はじめに

「どうしたら信仰は成長するのだろうか。」私たちクリスチャンは、この質問を何度くりかえし問いかけてきたことでしょうか。ある時は牧師に、ある時は友人に、またある時は自分自身に、そして神様に。ほとんどの場合、返ってくる答えは、「聖書を読みなさい、祈りなさい、集会に出席しなさい、　・・・　。」どれもしているつもりなのに、それでもなかなか信仰が成長しないような気がする。これは永遠のなぞなのでしょうか。

最近は、霊性に関するすぐれた書物が発行されるようになり、信仰の成長に大いに助けになると期待されます。しかし、実際にクリスチャンの中で信仰はどのように受け取られ、変化しているのかについての研究は数少ないように思われます。クリスチャンのありのままの姿を知るためには、証し集しかないような印象を受けてきました。まず、日本人クリスチャンの現状を知らなくては、どのように牧会をしていくのか、伝道していくのかなどについて有効な方法を考えることがむずかしいのではないでしょうか。そのためにも、社会科学（心理学、社会学など）的分析が必要とされているように感じてきました。

本書は、私がトリニティー国際大学において書いた「日本文化と成人クリスチャンの信仰」という博士論文をもとにして書かれています。その中から日本の教会に役立てていただけそうな箇所を選んでまとめました。この研究は、12 名の日本人クリスチャンに人生を詳しく分かち合っていただき、現実をできる限りありのままに観察して、そこにどのような共通性・法則性があるかを見出すことを目的としました。

この研究は、インタヴューさせていただいたお一人一人の人生をすべて理解した上で書いたわけではありません。したがってご本人が読まれたら、不正確な部分、解釈の正しくない点もあることと思います。それらは研究の制約上、避けられないことですので、どうかお許し願いたいと思います。12 名の方々がご自分の人生を率直に深い所まで分かち合ってくださったことによって、日本人クリスチャンの一般的傾向を理解する上での大変貴重なデータを得ることができました。この場をお借りして、心より感謝申しあげます。

回答者の生の声を伝えたいと思いましたので、できる限り会話をそのまま「　」に入れて用いました。省略は ・・・ で表し、わかりづらいために補則した部分は（　　）で表しました。

その他にも多くの方々のお世話になりました。指導教授のペリー・ダウンズ教授、ハロルド・ネットランド教授、リンダ・キャネル教授、テッド・ワード教授などには

特に貴重な示唆をいただきました。最後に、このような研究を可能にしてくださった、主に感謝いたします。この研究が、神の国の前進のために少しでもお役に立てれば幸いです。

第１章　研究課題

キリスト教と文化との関係

キリスト教は神の啓示に基づいたもので、人類に与えられたさまざまな文化を越えたものです。福音はすべての文化と歴史に適用できるものです。福音は文化を創り出し、変えて行く力があります。

その一方で、キリスト教は文化の中で展開されてきました。神は歴史の中の文化を通してご自身を現して来られました。イエスはユダヤ文化の中に受肉され生きられました。神は、救いの計画を人間の文化を通して実現されました。福音は、言語、シンボル、証言といった文化的な手段を通して伝えられてきました。キリスト教の歴史は、福音がどのようにしてさまざまな文化と出会ってきたかの歴史であると言えます。それゆえ、福音を特定の文化に根づかせること(文脈化)が、キリスト教宣教と教育におけるもっとも重要な課題の一つなのです。

福音を特定の文化に根づかせるためには、その文化の特徴的な要素を、聖書と神学に基づいて評価しなければなりません。どの文化もキリスト教にとって、肯定的と否定的の両方の価値を持っています。「人類は神の像に造られた者として文化を創造している。各々の文化はクリスチャンが積極的に用いることができるものをたくさん含んでいる。」[1] しかしながら、「人間の罪のゆえに、すべての文化は悪い構造と習慣をも有している。」[2] 多くの文化は福音を同化し、自分たちの利益のために使おうと試みてきました。しかし本当は、その文化が神の創造と救いの計画に従っているかどうかを福音が評価するのです。

日本文化とキリスト教

本研究は、日本文化とクリスチャンの信仰に焦点を当てています。キリスト教は日本に二つの波によって紹介されました。それは、16 世紀のカソリックと 19 世紀のプロテスタントです。[3] どちらの場合も、伝えられた当初、キリスト教は日本人にとって好意的に受け入れられました。しかし、しばらくすると、政府はキリスト教を国家の統一をおびやかす外国の脅威とみなして弾圧しました。[4] キリスト教は政府よりも神に忠誠を尽くすという特徴を持っていたことも影響がありました。

第二次大戦後の時期（1945 年－1952 年)、キリスト教は再び急速に広まりました。[5] 特に都市部の中流階級に属する人々は、地域や血縁による人間関係の義務から比較的自由だったので、キリスト教に魅力を感じました。地方に住む人々は、仏教や神道がすでに生活の一部になっていたので、キリスト教に強く反発しました。それ以降も、

多くの宣教師や日本人クリスチャンが福音を述べ伝えてきましたが、クリスチャンは少数者にとどまっています。しかし、キリスト教は教育、社会活動、労働運動などの分野で強い影響を与えてきました。[6]

日本文化との関連で教会がかかえている問題

牧会の目的は、クリスチャンの信仰が成熟することを助けることです（コロサイ１：28－29)。日本の牧師たちは、この目的に向かって努力していますが、多くの問題に直面しています。以下に六つの問題を概説します。

第一の問題は、キリスト教の異質性です。日本人は、キリスト教を外国の宗教と見ています。[7] 宣教師はキリスト教を「純粋なフォーム」つまり日本文化とほとんど接点のないものとして紹介しました。[8] 多くの日本人クリスチャンにとっては、無数の外国の習慣や教派的な習慣の模倣は、信仰にとってはよけいなものに思えました。[9]

キリスト教の異質性に関して、根本的な問題は「非文脈化（noncontextualization)」[10]に関することでした。過去の宣教師たちは、日本の習慣のほとんどを「異教的」として拒否する傾向がありました。なぜなら、そういった習慣が伝統的な宗教と関係していたためです。[11] 過去の宣教師たちは、福音を自分たちの習慣と区別することに失敗し、西洋式のやり方をキリスト教の習慣として日本に輸入したのです。その結果、ほとんどの日本人がキリスト教を外国の宗教としてみるようになったのです。

第二の問題は、日本人クリスチャンが日本文化を否定的にとらえる傾向があることです。これは、先ほどの第一の問題と密接に関連しています。日本人クリスチャンは、自国の文化を誇りに思うよりも、むしろ「異教的」文化として対峙しなくてはいけないという姿勢を持っています。日本文化のすべてが異教的で、クリスチャンにとって受け入れられないものなのでしょうか。先ほども見ましたように、どの文化もキリスト教にとって肯定と否定の両方の要素を持っています。日本文化は、キリスト教に肯定的な影響もあるのです。たとえば、日本人がキリスト教に肯定的に応える一つの理由として、日本の伝統的美徳である身分の上の者に対する忠誠心が超越的な神への忠誠心に置き換わることが考えられています。[12]

日本文化とキリスト教信仰に関しての、第三の問題として、「言葉」を過度に重視することが考えられます。アメリカの宣教師たちは、日本に自由教会の伝統を輸入しました。その伝統の一つが、「聖書主義（ビブリシズム)」と言われる、あらゆる領域において聖書の権威を強調する考え方です。[13]「正確な言語化と理論への過度の依存」は日本人の思考パターンとはかけ離れたものでした。[14]

第四の問題は、日本のクリスチャンは閉じた社会を作りやすい傾向があることです。

[15] 日本のクリスチャンは、敵意のある環境から自分たちを守りたいと思っています。さらに、日本のグループは一般的に、内の人と外の人とを区別する傾向もあります。こういった傾向が反映して、日本のキリスト教組織は制度化してしまい、社会や人々のニーズに充分な対応ができなくなっています。[16]

第五の問題は、教職者が中心であって、信徒が受け身である傾向です。多くの日本の教会において、信徒はお客さん意識を持ち、教育を受けた専門家（牧師や宣教師）に頼っています。[17] 信徒は牧師に従順であることを期待されています。

最後に第六番目の問題として、日本のクリスチャンは自分たちの信仰を限定的に見る傾向があることが考えられます。日本のクリスチャンは、自分たちの信仰を地域教会との関係だけで見ていて、日常の経験と関連づけない傾向があります。日本の牧師は、信徒がきちんと礼拝と祈祷会に出席し、毎日聖書を読み、牧師に従っていれば、その人が「信仰的」であると考えるのです。

本研究の課題

以上のような問題を解決し、日本のクリスチャンが本当の意味で信仰が成長するために少しでも役立つことを願って、本研究では、日本のクリスチャンの信仰をその人の生涯と日本文化との関連で理解することを目指しています。具体的には、以下の質問に答えることを目的としています。

１．日本のクリスチャンはどのような重要な人生経験をしているか。
２．日本のクリスチャンが自分たちの信仰経験をどのように受け止めているのか。
３．日本のクリスチャンがどのように文化的特性を信仰に関連して受け止めているのか。
４．重要な人生経験、信仰経験、文化的特性がどのように関連しているのか。

インタヴュー回答者

12 名の信徒の方にインタヴューに答えていただきました。その内訳は、男性 6 名、女性 6 名です。年齢構成は、23－35 歳が男女 2 名づつ、36－50 歳が男女 2 名づつ、51 歳以上が男女 2 名づつです。日本文化と信仰の関係を考えるために、ノンクリスチャンの日本の家庭で育ち、洗礼を受けて 5 年以上たっていることを条件にしました。先行研究から、信仰の深さや性質が性別や年齢によって異なることがわかっていましたので、男女を半々にし、またインタビューに正確に答えられる範囲でできるだけ幅広い年齢の方を選びました。本書で用いる名前は仮名で、敬称は省略させていただきました。

第２章　重要な人生経験

この章では、日本人クリスチャンの生涯における、主要な人間関係、中心的価値観、権威、目印となる出来事、人生の意味、神(神々)のイメージについて報告します。ただし、これらの６つの領域は密接に関連しているため、はっきりと区別することは不可能です。

主要な人間関係

主要な人間関係とは、自分の人生に重要な影響を与えたと思われる人間関係のことです。詳しい内容は、それぞれの箇所で述べられますので、ここでは回答者が答えてくださった全体像を簡単にまとめてみたいと思います。

幼い頃は、人間関係は家族のメンバーに限られていました。学校時代は、先生や友人が人生に重要な影響を与えました。就職してからは、職場での人間関係が主になっています。結婚した後は、配偶者や子供たちと重要な人間関係が築かれています。クリスチャンになった後は、特に地域教会の中において、他のクリスチャンとの新しい人間関係ができています。

このように、ライフスタイルの変化に伴って、主要な人間関係は変わってきています。この変化は、日本社会では一般的に見られるものです。唯一の例外は、クリスチャンになった後、地域教会内に中心的な人間関係ができることです。

中心的価値観

中心的価値観とは、その時々に人生の中心となっていた人、組織、考え、目標などです。誰もが中心的価値観に時間とエネルギーを注いでいます。

家族の影響

インタビューの結果、家庭が基本的価値観を形成したことがわかります。ヒロシが子供だった頃、彼の両親はよく彼の名前の意味を説明しました。彼の名前は、「多くの人から愛され、尊敬される」という意味が込められていました。彼の両親は、彼がそのような人になることを期待していました。彼は「この価値観は現在まで影響しています」と述べています。

ユウコの性格も家庭の中で形成されてきました。彼女の両親は祖父母と同居し、仲がよくありませんでした。彼らは、よくユウコのことで口論しました。たとえば、ユ

ウコをどう育てるのか、おやつをどう与えるか、服の着せ方などについてです。どちらの側も、ユウコの言葉を自分たちの意見に有利になるように使おうとしました。「ですから、両方が信じられない状況でした。気を許してつきあえるという関係が家の中になかったですね。欲求不満もずっと持っていたかも知れません。その頃は、そういうふうに思いませんでしたけど、やっぱり今思い出すとリラックスしていない、安心していなかったなぁと。」このような環境で育ち、彼女は争いを避ける傾向を身につけました。彼女の両親と祖父母がけんかをする時には、彼女は黙ることを身につけました。どちらの側にもつきたくなかったからです。

この性格は、後々までユウコの行動にも影響を与えています。彼女が大学生だった時、できるだけ人を避けようとしました。今でも、友人が口論を始めると彼女は急いで話題を変え、仲をとりもつようにします。

家庭環境は、ミドリの人格形成にも影響を与えています。彼女が子供だった時、彼女の両親はよくけんかをしました。彼女は、両親の大声におびえました。それだけでなく、彼女の母はささいなことでミドリをしかりました。ミドリはお母さんの指示に注意深く従わなければなりませんでした。そういった環境で育ったので、彼女はおくびょうな子供になりました。「いつも他人を気にする性格だったので、先生に注意されたり、友達にちょっと違ったそぶりをされるとすごくびりびりという感じで。すごく傷ついたり、落ち込んじゃうような」ところがありました。

親を喜ばせる

親を喜ばせることは、時に強い動機づけとなっています。特に、幼い時にそのことが顕著に現れています。ユウコの両親は、彼女が有能であること、良い成績をとること、道徳的に正しいことを期待しました。ユウコは両親の期待に応えようと努力しました。「これは小学校１年生くらいからありますね。よい成績とって帰ると親が喜びますでしょ。　・　・　・　だって、喜ぶことをやりたいでしょ。」

カズコは貧しい家で育ちました。彼女の父はあまり働かず、よく家を留守にして賭け事にお金を使いました。父が家にいる時は、お酒を飲んでいました。「母はとにかく苦労しました。父がそういう父でしたから。とにかく食べていくために、兄弟三人、おばあちゃんがいて、母は一人でとにかく食べさせるために、本当にがむしゃらに働いていました。私は母をすごく尊敬していました。母が私たちにしてくれたことに強い恩を感じていました。それで私は母を喜ばせることが私の小さい頃の生きがいでした。そのために弟や妹をかばうというか、それから勉強をがんばること。とにかく母を喜ばせたい」とカズコは思っていました。

アキラにとって、他の人の評価を得ること、特に母親に認められることが、彼の人生における中心的価値観でした。「特に母親に認められたいというか、母親というのが自分を評価してくれる人というイメージでした。・　・　・　学校でいい成績をとることで母親にほめられるとか。母親に勉強とかで評価してほしいと。自分がしていることをそれでいいとか、言ってもらいたい存在でした。」アキラは大きくなるにつれて、認めてもらいたい人が母親から友人や先生へと移っていきました。彼はいつも自分を他人と比較してきました。彼は自分の価値観を分析して、こう言っています。「世間的な評価を得るという価値観を、たぶん母親から受けたのです。」

以上見ましたように、回答者たちが幼かった時、家庭環境が彼らの基本的な価値観を形成しました。彼らは、こういった価値観を内在化し、両親を喜ばせたいために両親の期待に応えようと努めました。

スポーツと音楽

いく人かの回答者にとっては、スポーツや音楽が学校時代の中心的価値観でした。タケシは野球が大好きでした。「野球が自分の人生のすべてみたいなところがあって、勉強よりも面白かったんです。　・　・　・　野球けっこううまかったから、影響力持っているわけですよ。自分がみんなを指揮したり、親分になれるわけですよ。」

エミは小学校の後半は、鼓笛隊をやって楽しく過ごしました。中学と高校時代は、バスケットボールに打ち込みました。彼女の友人は皆、部活の仲間で、いつもいっしょでした。当時、彼女の生活の中心は部活でした。

ミドリは高校時代、吹奏楽部に所属していました。彼女は音楽は好きでしたが、友達がいませんでした。それで昼休みも練習していました。「私は孤独感を部活で埋めようとしていました。」とミドリは言っています。

受験勉強

大学受験を目的として高校に入学した人にとって、受験勉強が強力な中心的価値観になっていました。ケンジは中学、高校の時代は、「いい大学に入学すること。これしかなかった感じですね」と言っています。

タケシが高校に入学した時、大変ショックを受けました。なぜなら、成績がすべてだったからです。教師たちは、生徒が一流大学に行くことを期待しました。もし生徒がそういった大学に入学できなければ、「人間じゃないという扱いをされましたよ。」彼はそういう価値観を植え付けられました。

仕事

就職した後、多くの回答者は自分の仕事に打ち込み、仕事が中心的価値観になりました。ヨシヒコは、日本最大級の企業の元幹部でした。「私は、いわゆる猛烈サラリーマンでしたね。泊まることもしょっちゅうありました。それはこの時代から退職するまで、そんな生き方ですけどね。まあ、反感、じゃっかんありますけどね。」ヨシヒコは生活の 80%は会社のためだったと言っています。「仕事の面でも、毎晩毎晩、宴会。それに日曜日、土曜日といってもゴルフでしょ。・ ・ ・ サラリーマンって悲しいもので、会社の価値観に完全に入り込まないと仕事にならないでしょ。」

マサオは高校の教師です。「高校の教師になったその日から、水を得た魚のごとく、『あっ、これだ』と思いました。高校生が非常に好きだったということと、自分の性質が高校の教員に向いているなあと、あの頃は確信していました。」マサオは教室で教えることと、放課後のヨット部の指導が面白くてたまりませんでした。

エミがキリスト教の保育園の保母さんになった時、毎日子供たちと過ごせることを喜びました。「毎朝、礼拝があって、子供たちが素直に賛美している。来ている子供のほとんどはノンクリスチャンの家庭からですから、そういう子供たちが素直に『イエス様、神様』って歌っている姿が、すごくうれしくて、仕事を覚えていくのがとても楽しかった。」

以上の 3 人とは違って、ユウコは両親の言葉に従って、しぶしぶ小学校の先生になりました。けれども、「『いいもんだな』って思ったんですよ。（この仕事は）いやだと思ったけど、子供ってこっちの内面なんて知らないでポーンって入って来ますでしょ。そういうの、すごくいいなって思ったんですね。・ ・ ・ それに、忙しいでしょ。一生懸命やればやるほど仕事はあるし、中も深いし、生きがいになってきたというか。」

ハルヨは、主婦としての仕事に生きがいを感じていました。彼女の夫は会社での仕事がとても忙しかったので、「家庭は一人できりもりするという感じでした。 ・ ・ ・ とにかく子供は勉強させて、よい高校、大学と進学させて、よい会社に入れるのが子供の幸せだろうと、そういう考え方に ・ ・ ・ 結局そうなっていきますよね。」

キリスト教的価値観

回答者たちがクリスチャンになってからは、新しい中心的価値観を発展させました。この点については、「クリスチャン生活」の項目で詳しく扱います。ここでは、いくつかの例をあげるにとどめます。

ケンジは大学 1 年生の時に、クリスチャンになりました。その後、「神様を知る」ことに興味を持ちました。彼はキャンパス・クルセードと教会活動に、熱心に参加しま

した。ユウコがクリスチャンになった後、「わからないことは何でも聖書に相談すればいいという感じですね。聖書は頼れると。」ヒロシは 2 度離婚した後、クリスチャンになりました。「救われたということがありますので、最大の安心感と希望、あとは愛するということがどういうことなのかっていうことを、本当にはっきりわからせてもらった。」

要約

回答者たちは、人生の各時点で、親を喜ばせること、スポーツや音楽、受験、仕事、キリスト教的価値観というような中心的価値観を持っていました。彼らの人生は、家庭、学校、職場、教会というようなさまざまな組織を通ってきました。それぞれの組織は独自の価値を持っています。彼らは、各々の組織が持っているのと同じ価値観を内在化してきたように思われます。各々の組織に加わり、両親や先生、友人、同僚などといった重要な人物の影響を受けて、その組織と同じ中心的価値観を築いてきたと考えられます。

権 威

権威とは、指導を求めた人や自分の価値観や決断の承認を求めた人を意味します。

父親や祖父

回答者が若い時には、両親が権威でした。地方で少し前の時代には、家長が強い権威を持っていました。ハルヨは、インタヴュー当時 70 歳の主婦でした。彼女はこう語っています。「父は苦労してきたものですから、非常に家族に対して厳しかった。特に女の子に対しては。私に対しては大変きびしいしつけをしました。とにかく結婚するまでは、父の権威から逃げられないというような状態でした。絶対服従という感じでした。」

マサコも同じような環境で育ちました。彼女の父は彼女が 1 歳の時亡くなっていましたので、祖父が家長でした。「（祖父は）絶対的なものです。何か困ったことがあっても祖父に相談すれば解答が出るし、物の判断の仕方、言葉に対してもものすごく厳しいけれども、責任を持つ人でした。言ったことは絶対やりました。」

ユウコの父は、彼女が結婚するまで彼女に対して権威がありました。「何をやりたくても、父が『うん』って言ってくれなきゃだめなのよって。私のやりたいこと、本当は違うんだけどって。」このようにユウコは、父親が言うことはどんなことであっても従ってきました。

アキラは母親に認められることを熱心に求めていましたが、中学校を卒業するまでは、父親が権威を持っていました。「父親が人生の目標でしたから、たぶん価値観として一生懸命がんばって、何かを達成して、人よりも上に行ってという価値観なので、仕事を一生懸命がんばっている父親が人生の目標っていうか、自分にとってはすごく権威があった。」

母親

母親が権威だった人もいます。すでに述べたように、カズコは母親を喜ばせようと努力してきました。ですから、彼女が高校を卒業するまでは、母親が彼女の一番の権威でした。

エミは 18 歳でクリスチャンになるまでは、母親のアドヴァイスに従っていました。彼女は大きくなるに従って、母親のアドヴァイスが「ちょっとどうかなと思えるようになってきても、やっぱり母はそれなりの経験をして、それなりの年を生きてきたわけですから、その方が正しいのかなあと、やっぱり母の言うことに従っていた。」

ケンジも 20 歳でクリスチャンになるまでは、母親が権威でした。ケンジが幼い時から、父親は医者の仕事がすべてという感じでした。彼の母親が、彼の世話をしました。彼も、母親に相談をしました。「自分が頼るものは母親だっていうふうに決めていたっていうか、母親の存在を本当に大きく意識していた部分があるので、それは母親依存みたいな感じになっていったんだと思います。」ケンジは自分の母親が、カトリックのマリヤ像のイメージとだぶって見えると言っています。「(母は) 神ではないけれども、自分がその血を引き継いだ存在っていいますか。そういった意味での母。うまく説明できないですけど、いわゆる母としての理想像っていいますか、そういう形のものです。」

教師

学校時代は、教師が権威であった人がいます。マサコは、先生が言ったことは本当であると信じていました。そして、自分が先生に好かれる生徒になりたいと思っていました。

アキラは、高校の生物部の先生を尊敬していました。その先生の影響で、生物学に興味を持つようになり、現在は大学で助手をしています。

タケシは田舎で育ち、子供の頃は、中学校の教師をしている自分の父が社会で一番偉いと思っていました。しかし、高校に入学した後、高校の先生の方が父親よりも社会的に地位が高いことに気づきました。それで、高校の先生たちを尊敬するようにな

りました。その先生たちは、成績がすべてであるとか、学歴がとても大切であるというような価値観をタケシに植え付けました。

エミは幼稚園に通っている時、自分のクラスの先生が大好きでした。保母の仕事を選んだのも、「その先生と幼稚園時代がすごく楽しかったからだと思う。」

ミドリも幼稚園の先生を 6 年間しました。「幼稚園の先生をしようと思った時は、常にこの先生（自分の幼稚園時代の担任）のイメージが、すごくやさしい、はっきりは覚えていないけれど、ぼんやりとっていう感じですけど。なんかとても印象強かったんです。あの時楽しかったから、今も子供たちの楽しい思い出をつくってあげたいなという思いで働いていたような気がします。」

自分自身

カズコとヒロシは、クリスチャンになる前の社会人の時、自分自身しか信じる者がありませんでした。カズコにとって、権威は母親から自分自身へ移っていきました。彼女が 20 代後半の時、誰も頼りにできる人がいませんでした。彼女の両親も、カズコの判断を尊重してくれるようになっていました。彼女は、最善の生き方は自分が好きなように生きることだと思っていました。「自分が思う通りに生きるのが一番いい生き方だと、 ・ ・ ・ 他の人がなんと思おうと自分が信じる道を進むのが一番すてきな生き方だと（思っていました）。」

ヒロシにとっても、権威は徐々に自分自身に移っていきました。彼は離婚した後、自分がいつも他人の忠告や判断に従うばかりで、自分自身の意見を持っていないことに気づきました。それで彼は、何事も自分自身で決断すべきだと思いました。

キリスト教関係の権威（神、聖書、牧師、教会の人たち）

多くの人がクリスチャンになった後は、その人にとっての権威は大きく変わりました。ミドリはクリスチャンになった時、権威は両親から神へと移りました。「教会生活が中心になってしまったから、ある面で親の意見より教会の人たちの意見とか（をより信頼するようになった）。教会の人たちというのは、神様とつながっているというのがあるので、親はつながっていない。（親の意見は）ある面では聞くけれども、ここから先は受け入れられないっていうようなのができてしまった。」ミドリは、神の権威は教会の人たちの意見を通して表されると考えていました。

エミの権威も同様の変化を示しています。彼女が救われた後、母親にはあまり相談しなくなりました。なぜなら、母親はクリスチャンではなく、母親の返答はエミが期待していたものと違ったからです。エミはクリスチャンである自分の姉に、何でも相

談しました。エミは、お姉さんは同じ信仰の土台があると感じていました。「姉は私の問題について、真剣に考えてくれました。いっしょに祈ることほど、励ましになったことはありません。」エミはお姉さんだけでなく、牧師も信頼し、彼のアドヴァイスに従いました。

ケンジはクリスチャンになる以前は、母親に依存していました。「今は、人間にできることは限界があると、イエス様を知るようになって、絶対的存在が母親から神に変わったみたいな部分があります。」ケンジは、聖書とキリスト教の本から問題の解決を得ようと思うようになりました。彼は特に教会の伝道師を信頼し、いろいろ困ったことを打ち明けたり、手本にしていました。

ユウコがクリスチャンになった時、彼女は夫以上に神を信頼するようになりました。「主人よりは神。夫に聞いてこうしようかしら、ああしようかしらっていう前に、聖書はどうしてるかしら、ちょっと見てみようかしらみたいな、そういう感じで。・・・夫はお友達っていうような、同じレベルにある信仰者みたいなそういう感じですね。」

マサコがクリスチャンになった後、神が彼女の権威になりました。「権威は神ですね。 ・・・ 神様に従うということは、絶対的だし、まちがいがないし ・・・ 。私の判断力、考え、力、考えていることは、もう否定まではしないけれども、常にそれはここに置いておいて、祈って神様のみ心を知って、そしてその時に得られた平安なり、解答なり、心の内に思いますよね。そのことで決めてまいりました。」

ヒロシとカズコがキリストを知る以前は、自分自身に信頼していました。しかし、クリスチャンになった後は、ヒロシにとっては神が権威になり、カズコにとっては聖書と牧師が権威になりました。

タケシがクリスチャンになった後、権威は神と牧師になりました。「自分の信仰上の意味で、神がナンバーワンの権威ですよね。 ・・・ やっぱり牧師は恐れなければいけないなと。神にたてられた人だからね。やっぱり権威者ですよね。」

アキラは大学院生の時に、クリスチャンになりました。その頃、彼は自分の指導教授に認めてもらおうと一生懸命でした。しかし、教会に通うにつれて、徐々に聖書にも従いたいと思うようになりました。そのため、彼は指導教授と神という二つの権威を持つことになりました。就職してからも、上司と神という二つの権威を持っていました。しかし、時がたつにつれて上司に認められたいという思いは少なくなり、神だけが彼の権威になっていきました。

夫

女性が結婚した後は、夫が彼女たちの権威になりました。ユウコが結婚した後、権威は父親から夫に移りました。当時、彼女はクリスチャンではありませんでした。彼女は最初の子供が産まれた後も仕事を続けたいと思いましたが、夫が強く反対したので仕事をやめました。「自分で自分の人生を切り開いて行く自信がないんです。ずっとそうですけど。誰かに反対された時に、『あなたはそうかもしれないけど、私はこうなの』って言う能力がなかったんです。臆病なんでしょうかね。 ・・・ 逆に言うと、自分では責任を取らないで、人に責任をとらせちゃうみたいな。自分で責任を取るのが恐いみたいな。」

カズコやミドリ、エミが結婚した時はすでにクリスチャンで、神が権威になっていました。結婚した後は、夫も権威に加えられました。カズコは、「もちろん主人は非常に信仰的な人ですから、信頼できます」と言っています。

ミドリの夫は、彼女が「神様に向いていない時、スーって正してくれるような存在」です。「時々、やっぱり目に見える形の者を追いかけているような感じがするんです。神様の見えない力を信じるんだけれども、夫が自分に対して直接的に目に見える形でしてくれることが、すごく大事に思えてしまったりする。神様より夫に従ってしまうところがあるかもしれない。そこに（神様が）働いているとは信じているんですけど。」

エミはこう語っています。「夫に従うわけじゃないですけど、なんか決断する時でも、小さなことでも大きなことでも、夫の意見も交えて（考えるようになりました）。」彼女は、夫の存在によって負担が軽くなり、責任が半分になったと感じています。

要約

一人の人にとって、権威は生涯を通して変化します。クリスチャンになると、神や牧師、教会の人などが権威になります。また、女性が結婚すると、夫が権威の中に加わります。

権威は、家庭や学校、地域教会などというようなその人が生活している場から選ばれがちです。人生のさまざまな時点で、両親、先生、牧師などといったその時の権威と同じ価値観を持つ傾向が見られます。

目印となる出来事

目印となる出来事とは、人生の転換点となった出来事のことです。そういった出来事には、普通の人生の出来事もあれば、特殊な経験も含まれます。キリスト教信仰に

関連する回心などの出来事については、「クリスチャン生活」のところで扱います。

引越し

いく人かの人たちは、新しい環境に移ったことによって、人生が変わりました。エミは小学校 4 年生の時に転校しました。今までの学校では、彼女はおとなしい子でした。新しい学校では、彼女がすでに習ったところをやっていたので、勉強が大変よくできました。「それで、すごく自分ができてしまって、周りからもそういう目で見られて、4 年の 2 学期で引っ越したんですけど、その時にすぐクラス委員やらされたりとか、自分が急に明るくなった。」

ユウコの家族は、彼女が小学 5 年生の時に農村部から都市部へ引越しました。前の学校では、いじめにあっていましたが、新しい学校では、誰も彼女をいじめませんでした。「ここでいじめはぷっつり止んでしまうんです。後はもう本当に順調な、お友達からも大事にしてもらって、高校くらいまで、本当に明るい感じに見えたと思いますけれども、そういう学校生活でしたね。」

アキラは大学院生の時に、研究室と指導教授を変えました。そのため、東京へ引越しました。それで、今までの人間関係がほとんどなくなってしまい、一人になることが多くなりました。「けっこうその当時に自分の人生をふり返ることが多かった。ふり返ってみて、自分がサークルとか研究室で一生懸命がんばってきたけれども、結局、その結果残ったものは、人生少し無理してきたんじゃないかなって感じたり、そのくらいの頃から、もう少し自分の人生を、もう少し着実に歩んでいかないといけないなと思いました。」

入学

引越しと同様に、新しい学校への入学が人生の転機になった人たちもいます。マサコは、どこの高校へ行くかで、進路がある意味で決まると思いました。彼女は自分がよい高校に入れたので、その後に短大に行くことができたと考えています。

ケンジにとって、高校入学はショックでした。「小学校の頃は、頭もよくて、おりこうさんみたいな感じでした。」しかし、高校で進学校に入学して以来、急に成績が落ちてしまいました。毎回のように追試験を受けるようになりました。「なんかいじめてないんですけど、いじめられているっていうか。成績が悪いということによって、なんとなく周りから責められているような気持ちが大きくなっていったと思います。」

ヒロシは上の学校へ行くほど、規模が大きくなっていきました。小学生の時は、「自分がチャンピオンみたいな感じでふるまっていた。」何かの大会があると、大体いつも

出ているタイプでした。中学に入学した時、「誰も周りに知っている人がいないし、みんな賢そうだし、わりと小さくなっていた時がありました。」最初の数ヶ月間は、弁当もろくに食べられないくらい緊張していました。彼は、高校や大学に入学した時も、萎縮した感覚を覚えています。「上の学校に行く時に、小さいグループになって新しい所へ入って行ったということで、その影響はありますね。人前できちんとしたことをしゃべるとか。自分の意見をはっきり言うとかなかなかできなかった。」

受験の失敗

２人の回答者にとって、受験の失敗が人生の転機になりました。エミは希望の短大に合格せず、専門学校に入学しました。「それはずっと引きずっています。後悔っていうか。・・・ あまり言いたくないっていうのがあります。すごく影響があるわけではないですけど、やっぱりどこか片隅にあるというか。だからそういう学歴とか言わなくてはいけない時がすごくいやだ。教会の中では別にいいんですけど。この先、自分の子供も『お母さんは・・・』っていうような、いやな思いをしたらかわいそうだなとか思ったりしないでもない。」

タケシは、大学入試が 3 度うまくいきませんでした。「これは日本の社会では先に行くことを閉ざされてしまうわけですからね。 ・・・ 大学いいとこ行ってないと、いい職業に就けないわけでしょ。そういうのありますよね。閉鎖社会だから。日本は学歴社会ですからね。自分はもうこっちの側には行けないんだなと。いい側には行けないということですよね。それは感じましたよね。」

自殺未遂

受験のプレッシャーから、二人の回答者が自殺未遂をしました。ケンジは高校 3 年生の秋に、自殺を試みました。「成績が悪いのと、受験が近くなって、いい大学に入学することが自分の頭に浮かんできたことが目前に迫って、危機感って言いますか、 ・・・ それがせっぱつまってきて、周りの見る目も変わってきちゃったというか。自分の中でですけれども、周りは自分を責めているっていいますか、脅迫感をこの頃、持つようになっていって、どうしようもないっていいますか。ぼくなんかいないほうがいいだっていうふうに思って、手首を切る真似事みたいなことをして、親にみつかって、大学病院に通うことになった。 ・・・ 悲観的に物事を見るといいう視点がこの頃できあがった。」

タケシも高校 3 年生の時に、自殺未遂をしました。「なんか 18,9 の時、夢見ちゃうというか、すごい幸せだったんですね。受験があっても。ずっと（交際していた）彼

女といっしょに、その関係が永遠に続けばいいなと。そしてまたふられるのがいやだなと思って。幸せなうちに死ねたらいいなと思って。あと受験勉強の疲れもあったんでしょうけどね。今でも思い出しますけど、・・・ 睡眠薬買って来て飲んで、彼女と話していてぱっといっちゃってね。倒れちゃったんですよ。それで 3 日間意識不明で、意識が回復したら、今度は相手側もあんなバカ野郎とは付き合うなということになっちゃって。 ・・・彼女が離れちゃうところがあったでしょ。だから今度は逆に憎しみに変わっちゃたんです。それから彼女との人間関係がだめになって、それから 5 年間もんもんとしましたね。」タケシは当時を振り返って、こう言っています。「最低のところまで行きました。後から、やらなければよかったなあと思いました。 ・・・ 一回死んで、よみがえって生きて、これは人生の大きな転機ですよ。こういうことがなかったら、クリスチャンへの導きもなかったし、留学もしなかったんじゃないですかね。」

就職

ほとんどの回答者にとって、就職は人生の新しい局面へのスタートでした。ユウコは大学生の時、できるだけ人を避けるようにしていました。ところが、小学校の教師になったとたん、「ばりばり仕事したんですね。それまでは、音楽以外は全然興味はないわ、みたいな人間に関する接し方ですよね。本以外は興味ないみたいな。でもここで、すごく暴力ふるう子とか、いじめられている子とか、そういうのをいっぱい目にしてみて、なんとかしなくちゃ、どうしたらいいだろうみたいな。『変わったね』って言われました。大学時代の友達から。」

ケンジは雑誌の編集プロダクションに就職しました。そこで初めて、社会の厳しさを経験しました。「最初の頃は、原稿の書き直しが何回も何回も重なって、10 回とか 15 回とか、つっかえされてくる回数が多かった。 ・・・ 最初書いていた文章というのは、自分ではいいと思っていても、他の人に見せるとわかりにくい。 ・・・ 自分中心っていうか、そういったことをちょっと客観的に、引いて見るっていうか、そういった作業が編集っていうか、書き直す作業だということが、徐々にわかってきて、・・・ そうして苦労して書き直していくうちに、『あっ、これはおもしろいぞ』っていうか、そういう書いた文章によって、ちょっとオーバーな言い方ですけど、自分自身も磨かれるというか、そういったようなことを感じまして。」

ヒロシが広告会社に就職した時も、仕事の重い責任を経験しました。「広告会社というのはすごく忙しい社会で、入ってすぐ、月 100 時間くらいの残業がありました。一日の生活が会社行って、仕事終わって帰ってくればもう 12 時近いですから、食事して、

寝て、あっという間に朝迎えてという感じでした。」

ヒロシは学校と職場との違いにも驚きました。「勉強であれば特に期限はない。会社の場合は、仕事の期間は 3 日とか一週間の単位なんですよ。受注して、一週間で企画をつくって出さないといけない。『間に合わなかった』と言えないんです。たまたまあったんですよ。できませんでしたというのが。資料が足りませんでしたとかね。いろいろやってみたんですが、この先ちょっと思い浮かびませんでした。 ・・・ 『できませんでした』と言ったら、『何を言っているんだ、明日出さないといけないのに、そういうことではだめだ』って、ひどく言われましたね。別の仕事ではほめられたこともありましたけどね。仕事の厳しさを教えられました。 ・・・ やっぱり約束したら守るということですよね。仕事でも何でも。できないんだったら、最初から約束しない。できるっていう前提があるから、約束するんだって。僕にとっては、ショッキングな出来事でしたね。」

ヨシヒコは、自分の人生で二つの大きな転機があったと言います。それは敗戦と就職でした。(敗戦については、後で述べます。) 彼が東京で就職した時、「新しい会社社会に入って、社会のものの考え方について、(大学時代とは)全然別の勉強を始めなければならなかった。」また、人間関係の幅が広くなりました。「同僚といっても、日本全国あちこちから集まってきた連中だけれども、いろんなキャリアを持って、いろんな領域で、いろんな地方で過ごしてきた人たちがいっしょになって、そういう意味では自分の視野が非常に広くなりました。」

アキラは民間の研究所に就職しました。「最初は研究が好きで研究している人が多いのかなと思ったんですが、実際に入ってみると、会社の中で評価される研究をやる人が多かった。 ・・・ だからすごく昇進することを人生の目標とする人がけっこういる。 ・・・ 僕自身はそういうのを人生の目標にするのは、少し寂しいなと思った。会社で出世して、給料たくさんもらっている人でも、僕なんか見ていて、それで人生幸せなのかなと思うと、本人は幸せだと思っているかもしれないけど、そんなに幸せそうでもないと思ったりしますし。」

退職

ヨシヒコは 45 歳の時に、クリスチャンになりました。当時、彼は 65 歳になったら退職し、家庭集会を開きたいと思っていました。しかし、55 歳になった時、彼は自分の能力と記憶力が衰えていっていることに気づきました。そして、もし 65 歳まで待っていたら、もっと記憶力が衰えるだろうと思いました。それで、55 歳の時、クリスチャンとしての奉仕ができるように仕事を辞めました。

アキラには、父親の定年退職が貴重な経験となりました。アキラは、大学時代まで父親のようにがんばって働きたいと思い、父親が人生の目標になっていました。「父親は退職したとたん、それまでは会社の付き合いとかあって、人が来たりしたんですけど、ぱったり来なくなってしまった。父は仕事しかしてなかったので、・ ・ ・ ほとんど毎日家にいるんですけど、特にすることもなく一日過ごしてるっていうのを見ていると、だんだん人生に対する考え方が、一生懸命がんばって何かを達成するというのも、意味はあると思うのですが、それだけでだと人生、最後まで充実して生きることはできない。 ・ ・ ・僕はそれを見ていて、自分はそういうふうには生きたくないなと思った。」

結婚

多くの人にとって、結婚は人生の転換点になっています。エミは結婚する前は、クリスチャンでない両親といっしょに暮らしていました。彼女はクリスチャン男性と結婚しました。「家庭の中に神様がいるんだということをとても感じられる。結婚前は、自分が部屋にいて神様と交わるから、神様もそこにしか入りこめないけど、今は家全部に神様がいてくれる。神様をもっと意識できるようになった。」

ユウコは結婚した後、「ふわふわした感じがなくなりましたね。結婚どうしようみたいな、迷わなきゃいけないことがなくなりましたから。落ち着いてもっと仕事に専念できた。」

結婚がマサコを変えました。彼女はそれまで、祖父の絶対的権威の下で育ってきました。そして、祖父を通して男性のイメージを持っていました。結婚した時、彼女も彼女の夫も、妻は夫に従うべきであるという考えを持っていました。しかし、彼女にとって、自分の夫に従うことは容易なことではありませんでした。なぜなら、夫の性格が祖父の性格と全く異なっていたからです。マサコは言います、「一つ一つ自分もくだかれながら、成長させられるというかね、そこに順応するというか。」

アキラの価値観は、結婚の準備段階と結婚生活を通して変わって行きました。彼が両親に結婚の承諾を得ようとした時、両親は強く反対しました。彼は、両親との会話を通じて、両親の価値観がわかってきました。彼の両親は、アキラが博士号を持っているので、彼の結婚相手も一流大学卒で社会的地位も高い人でなくてはならないと考えていました。彼は自分の両親が、彼の学歴によって自分たちが世間から認められたいと思っていることに気づきました。こういった結婚前の両親との会話を通じて、彼は両親の価値観がわかり、そういった価値観がいかに自分自身の生涯をコントロールしてきたかということに気づいたのです。

アキラは両親の期待に背いて、看護婦さんと結婚しました。彼の妻は、彼と異なった価値観を持っていました。その違った価値観と出会って、彼は自分が強い競争意識を持っていることに気づかされました。「自分の人生で、会社の部分と家庭での部分で、だいぶ精神的にも結婚してから違ってきました。 ・・・ 精神的に落ち着いたというか。 ・・・ 結婚すると、家に帰ると会社とはまた違う価値観で動いている所なので、気分転換になるし。」

子供の誕生

子供が産まれることによって、多くの人の人生が変わりました。マサコは「女にとって、子供を出産するということはすごいことですよね」と語っています。彼女は最初の子を出産した翌日、アブラハムとイサクの関係を強く感じました。「生まれた時に、子供に対する母親になった責任、それから、自分の体から出たものですよね、子供は。だけれども、この子は自分のものではないということを示されたんです。 ・・・ 私もこの子は神様の預かりものとして育てなくちゃならない、これはいつか離さなくちゃならないというようなことを示されて、『主よ、この子を本当にあなたの前に正しい子に育てる知恵を与えてください』と祈りをもって。その時に、悲しみともつかない、なんともいえない涙、自分でこんなに苦しんで産みながら、これは自分の子じゃないんだというような。あれは強烈でしたね。生まれて二日目くらいだと思います。そういうことで育児が始められたということは、すごく感謝でした。」

マサコにとって、育児は育自を意味していました。「自分の腹立たしい時、疲れた時、いろいろあるわけですよね。でも子供が純真にいる時に、『ああ疲れたからもう育児したくない』といっても、こっちはいるわけでしょ。そんな時に自分が本当にゆとりがあり、成長していかなかったら、この子、育てられないっていうことを感じさせられた。責任感と共に、子供によって自分が母親になり、心の面で成長させられたという、これは大きいですね。」

ユウコは最初の子を出産した時、小学校の先生を辞めました。「（教員の仕事って）自分のペースでなんでも進んでいきますでしょ。でも子供たちってそうじゃないんですよね。ここであわててしまったんです。どうしていいかわからないんです。人に合わせること知らないから。教員って自分の行きたい方向にドライブするでしょ。ところが、自分の子供になったら、全然。それでもうパニックになっちゃったんです。悪く言えば、育児ノイローゼ。 ・・・ 子供の存在は、こういう自分の思い通りにいかない世界があるんだなって。 ・・・ カルチャーショックでしたね。」

アキラは子供が生まれた時、自分の使命を一つ達成したように感じました。「今まで

だと自分が死んでしまえば、地上の命は終わる。子供が生まれたことによって、地上でも僕の命が子供に一部行くというか、そういう意味では、なんとなく、この地上で子供が大きくなって、また子供ができると、自分が将来に向かってどんどんどんどんつながっていくんだなと。自分がこの地上に生まれて、一つの使命を達したのかなという気がしました。」

アキラの妻は、子供が生まれた後も仕事を続けて、子供は二人でめんどうみることにしていました。「子供の場合は、かなり手間がかかるんだけど、子供の表情なんかを見ていると、自分の人生の幅ができるというか、充実するというか、そういうのがあって、今までの評価されたいという、 ・・・ そういう充実感とは全然違う意味の充実感が子供にはあるなと思います。 ・・・ だから、人生でそれまでの勉強とか仕事とか競争することによって人生をやるのではなく、家庭を持って家庭を大切にするという人生もあるんだなという感じ。」

ヒロシにとって子供は、「やっぱり愛する者ができたという喜びですよね。 ・・・（妻も含めて）一番支えになっています。いつも待っててくれる人たちだし、いつも期待をしてくれる人たち。」ヒロシは、期待して待っていてくださる神様の姿を、家族の中に見出していました。

インタヴューに答えてくださった方の中で、孫がいるのはハルヨだけでした。孫が生まれた時は「うれしくて、食べてしまいたいくらい。今までは、子供のため、子供のためと思ってきましたんですよね。男の子ですから、結婚するともちろん、お嫁さんのものになりますので、家から独立していくわけですね。 ・・・ 母親にとってはとても寂しいことでもあるわけですね。 ・・・ そういう状態でいて、孫が生まれると、また私が手を出す、口を出す余地ができてくるということは、とてもうれしいことなんですね。男性の方には、あまりおわかりにならないかもしれませんけどね。そういう意味でとてもうれしかったですね。新たな生きがいを見つけたような気がするわけですね。」

海外へ行く

インタヴューに答えてくださった方の中の 3 人が、海外を訪ねたり、住んだりしたことが人生における目印となる出来事でした。ミドリは 23 歳の時に、初めての海外で、韓国のキャンプに参加しました。「自分の世界と違ったものを見た。 ・・・ 初めて日本人として自分を意識した。自分の内にも偏見があったんだなと。島国根性みたいなものが、他を受け入れられないところがあるんだなって。初めてそれを意識できた。今までそんなこと、意識したことはなかった。」

ユウコは夫の海外赴任に伴って、アメリカに5年間住みました。「これは大きかったですね。解放的で、自由で、聖書に会えて。もう天国ですよ。人の目から解放された。まず親戚の目がないでしょ。両親いないでしょ。近くにいてなんだかんだと言う子供の学校のお友達のお母さんたちもいないでしょ。自分のペースがまた始まって、自分のやりたいようにやれるという解放感。」

ユウコは文化的な違いも経験しました。「イエスなのかノーなのか、はっきりしろとよく言われました。 ・・・ 正直にならないとしようがない状況が多かった。自分はどうなんだって。自分をありのまま出さないといけない。でも出したら気分いいんですよね。格好つけなくていいから。」

タケシは日本での大学入試がうまくいかなかった後、アメリカの大学に入学しました。「留学して、日本の社会の価値観とは違う、国際的に全く生き方の違うものの見方、考え方があるんだなというのを体験しました。4年間ね。これが大きかったですよ。ほっとしましたよ。何も小さい社会だけにいかなくたっていいんだと。」

タケシはアメリカで真剣に勉強しました。そこでの教師たちの印象を次のように語っています。「日本の先生とは全然違いますよ。彼らは自分のいい所を引き出してくれますよ。足らなくてもなんでもね。ダイナミックにね。真剣にぶつかっていくでしょ、体でね。だから批判するよりは、能力あるなしにかかわらず、受け止めてくれましたよね。やっぱり全然違うなと思いました。日本は頭のよしあしで、偏差値とかそういうもので、色めがねかけて見るでしょ。むこうは違いますよ。ダイナミックにその人のよさを、個性を引き出そうと。それが自分には合っていたんですよ。それは大きいですね。一人一人大事にして教育してくれましたよ。人間の存在の意義っていうかね。」

タケシは学ぶことの喜びを発見しました。「学問の喜びとか、おもしろさっていうものがわかってきたんですよね、この頃ね。異文化行くと、知識も吸収できるでしょ。毎日が新しい体験でしょ。これはおもしろいなと思ってね。そこからどんどん自分が知識と人間的にもすべての面で成長していくのが肌で感じるわけですよ。一番楽しかったですよ。エネルギッシュでね。そうすると過去のいやなことも忘れてきたしね。」

死

家族の死は、重要な経験となっています。マサコが小学校3、4年生の時、ひいおばあちゃんが亡くなりました。「この時に初めて死というものがあるということと、死んだら会えないということ、死の非情さを感じました。」

タケシも小学生の時、ひいおじいちゃんが亡くなりました。「小さい時で、初めて経験した死でしょ。人間死ぬんだなと思うわけですよ。今まで自分を大事にしてくれた

人が死んで、初めての死を体験しました。」

ミドリは、夫の父親が急に亡くなり、棺を自宅に置きました。「それを見た時に初めて、死を身近に感じて。あんなに今まで生きていた人がこんなになるんだなって。今までそういう経験、全然なかったんですね。すごいショックでした。やっぱり、みんなこうなっちゃうのかなって。」

ハルヨの夫は 61 歳の時、突然、心筋梗塞で亡くなりました。「まず呆然としました。なぜだろうとかね。なんで家族の者に神様が、主人は立派な人だったのに、こういうことが起きるのかということについて理解できませんでしたね。その時点ではね。もう神も仏もあるものかというようなね。そういうふうにまで思いました。」

戦争と敗戦

ヨシヒコ、ハルヨ、マサオの 3 人は、小学校時代を第二次大戦中に過しています。ヨシヒコは、「10 歳の時、戦争が終わったという強烈な出来事があった。 ・・・ まず食べる物が充分食べられないという飢餓貧困の時代ですよね。 ・・・ だからこの頃の小学校の終わりから、中学校の初めくらいの終戦をはさんだ時期というのは、ある意味では私の人格形成ということでは、知識とかそういう面では何の蓄積もできなかったけれども、体験といいう意味では一番強烈な体験の時代でしたね。」この時に体験した人間の基本的に必要な衣食住の大切さは、今に到るまでヨシヒコに影響を与えています。彼は会社を退職した後、キリスト教の国際的組織でボランティア活動をしています。

ヨシヒコは戦時中に軍国教育を受けました。「戦争中というのは、天皇陛下が神様ですからね。それは信じきっていたわけですね。 ・・・ （敗戦によって）世の中の仕組みが 180 度変わっているでしょ。それまでは天皇陛下が偉かったんだけど、終戦後は天皇陛下は人間になっちゃって、逆にアメリカから偉い人が来たということでしょ。だからね、大人もそうだけど、小学生として、そういう価値観を頭からたたき込まれた人間は、すごいカルチャーショックでね。今に到るまで、いろんな価値観とかね、絶対というものはないんだなという疑問が常にありますよね。 ・・・ 考えてみればそれ以降の自分の価値観なり、ものの考え方の中にいつもなんか疑いの目で見るような習性は育ったかもしれません。」

ハルヨも学校時代、軍国主義的教育を受けました。彼女は敗戦の 1 年前の 1944 年、小学校の先生になりました。教師になって最初の 1 年目と 2 年目の 8 月までは、文部省のガイドラインに従って一生懸命、軍国主義的な教育をしました。2 年目の 8 月 15 日、突然、終戦になりました。「夏休みの暑い時に終戦になって、すぐ教師が集まるよ

うに命令が出ましたものですから、集まりました。そうしましたら、とにかく書類の整理なんですね、今までの。ボンボンボンボン火にくべてね。校庭で、燃やしてね。 ・・・ それをして二学期から、今までの教科書はとにかくそこのうちから天皇陛下とか、兵隊さんのなんとかという所を、墨をすって筆を持たせて、ここからここまで、こう塗りなさいっていう、そういうことをやったんですよね。その残りで何を教えろっていうんですか。 ・・・ 私の気持ちの中では、とにかく自分が信じていたものは全部そこでくずれたわけですし、もちろん、自分が権威だと思っていたことは全部そこでなくなってしまったわけですし、ですから、私にとって終戦というのは、そういう意味で、大変ショックだったと思う。 ・・・ そのショックが大きくて、(教師を)やめたいと思いました。 ・・・ （その経験の影響は）遠い将来には信仰につながっていきますけど、その時にはもう何も信じないというか、そういうふうに思いました。権力とか、そういうものを何も信じないでおこうと。信じることによって傷ついたわけですよね。結局ね。大きな傷を負ったから、もうそういうものを信じるのはやめましょう。やめたいと。そういうふうに、その時は思っていました。」

マサオも軍国主義教育を受けましたが、父親の影響や、配属将校の人柄に反発して、そのことに批判的でした。戦争の影響は、「いつ死んでもいいという、そういう人生観を確立しないといられなかった。徴兵制だから、年がくれば嫌でもおうでも軍隊に引っ張られちゃう。 ・・・ その頃、人生 25 って言いました。25 って言うけれど、22，3 で死んじゃうんじゃないかとみんな思っていましたね。だからいつ死んでも平気で死ねるようにというのが、そういうふうな生死を乗り越えるというんですかね。どうせ殺されちゃう。」

マサオは徴兵される直前に、敗戦を迎えました。「死ぬと思っていたのが、死刑囚がいきなり釈放されたようなものですよね。ポケーとしちゃって。なんだか重荷が解放されたという感じはあるんですけど、国民がすべて虚脱状態でした。虚脱感で生きていくのが精一杯というんですかね。」

その他の目印となる出来事

人生の転機となるような経験で、その人にだけユニークなものとしては以下のものがあげられました。

いじめ

ユウコは小学 4 年生の時、いじめられてつらい経験をしました。ささいなことで、友達の態度がガラッと変わったことに驚きました。「お友達づき合いにすごく慎重に

なりました。 ・・・ これはちょっと、友達というのは要注意だぞみたいな。だから、まず自分が無防備でいてはいけない。これが本当にこたえましたね。無防備ではいけないから、つっこまれないように、よけいなことは言わない。（自己防衛的な傾向が）もっとひどくなったという感じでしょうか。」

優勝

高校の先生になったマサオは、放課後、ヨット部をつくり、その指導に打ち込みました。5 年後、このヨット部は国体で優勝し、翌年、インターハイでも優勝しました。ところが、すぐにマサオはヨット部を辞めてしまいました。「勝ってみたら、なんだこんなものかという、すごい失望をしました。こんなもののためにみんながあこがれてやっているのかと思って、笑い出したいほどでした。なんかばかばかしかった。ちょうど西部劇のセットがありますよね。前から見ると家のかっこうをしていて、後ろにまわってみると丸太しかないという。後ろにまわってみたら、そういうものだったっていう。あれをその時感じましたね。これは本物じゃないって。」

解雇

ケンジは解雇を 2 度、経験しました。1 度目は、バブルの崩壊で仕事がだんだん少なくなり、辞めざるを得なくなりました。次に入社した会社で、彼は上司から人員削減のためにやめてくれと婉曲的に言われました。この時は、上司と何とかうまくやっていこうと努力していた時だったので、「２度目だったし、その後のことが全然決まらないうちに追い込まれてしまったので、 ・・・ けっこうプッツンきたといいますか、そういった感じです。」この時は、彼の親友がキリスト教から離れたことが重なって、ケンジは大変なショックを受けました。何も信じられなくなって、１年くらい教会を離れました。「もう何も考えたくない」っていう気持ちでした。

離婚

ヒロシは離婚を２度経験しました。彼はそのことを振り返って、こう語っています。「本当に愛していたかどうかって確信が持てないまま結婚していた。なんとなくはたから見て比較的きれいな人たちだったので、まわりからちやほやされたり、あこがれの的になったりっていうんで。なんか２人の間の結婚というよりは、まわりを気にした結婚っていう感じがあって。それでいて、相手のことあまり自分が大切にしてあげなかった気もします。」

ヒロシにとって、離婚の影響は２つの面で顕著だったようです。一つは対人関係で

す。「その時のショックっていうのは、そのことを冷静に考えるというよりは、むしろ人に近づくよりは距離を置いていた方がいいんじゃないかって。この時は、すでに結婚も半分あきらめかけていて、自分はそういうことはもうないなぁと。だからなるべく人とは距離を置いて、まあ仕事さえやっておけば社会的にはなんとかなるし、会社の中ではプライベートなことまで話しをしてくる人までいませんから、それはそれでなんとかなるだろうくらいに思っていました。」

もう一つの影響は、「信じる」ということに対する疑問です。「信じるということはどういうことなんだろうって。自分は確かに相手のこと信じていたし、愛していると思っていたけれども、自分に自信が持てなくなった。つまり、自分が信じているということが、本当は信じてないってことじゃなかったか。愛していると思ったことが、本当は愛してるってことじゃなかったんじゃないか。自分の物事の判断のよりどころとか、確信を持てる土台というものがすべてなくなってしまったようなのがあって。相手に対しては人間不信だけれども、自分自身の居所が定まらないっていう問題でもありますね。相手のことも信じられないと同時に、自分自身も信じられない。つまり、どこに自分はいるんだろうって。居場所が確認できない。」

日本への帰国

ユウコの家族は、アメリカで 5 年間滞在した後、日本に帰国しました。その時、逆カルチャーショックを経験しました。彼女の子供たちは、日本の学校に適応できませんでした。「どうやって生きていくんだろうっていう感じですよね。日本で。日本人なのに私は日本に合わないわって。どうしていいんだかわからない。 ・・・ （アメリカでは）自分出しても大丈夫、オープンでも大丈夫っていうすごい安心感があって、やりたいことはバリバリやってっていうような。 ・・・（日本に帰ってきたら）なんかしゃべっていいことと、いけないことがあるみたいっていうような。さあ、日本に帰って伝道したいって、さあがんばりたーいと思って帰ってきたら、なんか働き場所がないなって、とかね。」

病気

ハルヨのお子さんの一人が、働き過ぎて病気になってしまい、仕事も続けられなくなりました。「私も生まれて初めて経験しました。こういうことは。本当に思ってもみなかったことですよね。どうなるかと思いましたね。」彼女はこの困難を通して、苦労した自分の両親の気持ちがわかるようになったと語っています。「自分が苦労すれば人に対する思いやりとか、両親に対する思いやりもやっぱりそこからしか生まれない

ものなんですね。そんなことがなくても、そういったことが理解できたら本当は一番理想的なんでしょうけれども。私は不幸にして、自分が両親と同じ苦しみを味わった時に初めて理解できたっていうか、そういう感じです。」

要約

どの人も、自分の人生で転換点となるような出来事があります。こういった出来事には、引越し、入学、就職、結婚、出産というような多くの人が経験する普通の出来事が含まれています。またその人独自の経験もあります。例えば、自殺未遂、解雇、離婚、いじめ、戦争体験などです。快い経験もあれば、つらい経験もあります。

こういった出来事を通して、環境、人間関係、ライフスタイルが変化しています。場合によっては、その出来事を通して、今まで隠されていた価値観が明らかにされることもあります。こういった出来事を通して、過去の価値観を修正したり、捨てたり、新しい価値観を身につけたりしています。

人生の意味

インタヴューの中で、「あなたは現在、あなたの人生に意味があると感じていますか。」（感じているなら）「何があなたの人生を意味あるものにしていますか。」との質問をしました。その結果は、どの人も自分の人生に意味を見出していました。人生の意味は、大きく３つに分類されました。第一のグループは、神との関係で意味を見出している人たちです。第二のグループは、他の人との関係で意味を見出している人たちです。第三のグループは、神と人と両方の関係で意味を見出している人たちです。

神との関係

12 人中 7 人が、神との関係で人生に意味を見出していました。そのうちの 4 人は、神中心の考え方をしています。ミドリは「自分の人生の計画は、神様の所にあるって思っているから、何か神様がさせようとしてこの地上に今いるのかなあというふうに思う。」と言っています。ユウコは、「神様が『あなたは、私にとって意味があるんだよ』っておっしゃってくださるから、意味がある。」と語りました。ケンジは次のように話してくれました。「神様を信じる前は、・・・ 人生って楽しめばいいんだよみたいな。意味があるとか全然思っていなかったんですけど。神様信じるようになって、神様からの導きがあるんだなと思えるようになりました。何か目標っていいますか、自分を造られた意味があるってことを信じて、いろいろなことを学ぶに従って、考え

るようになったので、その影響でそう思うようになった。」

ヨシヒコはこう語っています。「意味ということになると、自分の人生すべて意味があるんでしょうね。神様からすれば。そういう考えが非常に強くなっています。・・・神様に用いられて仕事をやっていれば、それはどんなに小さいものであっても、わずかなものであっても、むずかしいものであっても、意味はことによるとイコールかもしれません。という見方からすれば、クリスチャンとして神様によって救われたという人は、人生にすべて意味があるんだと思います。」

２人の回答者は、自分が神に貢献しているという事実に基づいて意味を見出しています。カズコは次のように語っています。「具体的には私はそれほど神様のお役に立ってはいないと思うのですが、いくらかのお役には立っているんじゃないかと思うんです。私たち家族の生き方が神様を中心とした生き方をしていますので。すべて神様からいただいている。そして神様にお返しできることに対して。 ・・・ だから、本当に子供でも、寝たきりのお年寄りでも、病気の人でも、その場にあって、その人のやれる働きがあるので、今私たちに与えられている立場、健康、仕事、そういうものを持って、今私たちはそれほど一生懸命、神様のためにやっているというものではありませんが、お役に立っているのではないかなと。」マサオは「やっぱり、こんな者でも神様が何かに用いようとしておられることに意味があると思う。結局、神様が用いなくなったらなったでまた意味があるんでしょうけど。今はどんなにささいなことでも、神様に用いられることがうれしいことだと思います。」

ハルヨは、自分の尊敬していた夫が亡くなり自分がまだ生きているという事実を神様と関連づけて意味を見出しています。「こうやって生かされているんですから、何か意味があって生かされているんで。そうじゃなきゃ、なぜ主人のように仕事もしてちゃんと立派にやってきた人が、子供にも尊敬されている人が先に死んで、私が後に残されたのかと思いますから。それはたぶん生かされて、今生きているんでしょうから、何かの意味があると思うんですが。まだ、もう少しの間、生きてれば息子たちの役に立つことがあるからかなあと思ったりしますけどね。 ・・・ 神様の御用もしなくてはいけないことが、教会の御用をしなくてはいけないことがあるのではないかと思いますのでね。」

他の人との関係

エミとアキラは、他の人との関係で人生の意味を見出しています。エミは次のように語っています。「（私の存在は）実家の父母にとっては子供だし、保育園でも子供たちを保護してあげる立場でもあるし、また友達関係の中で、ノンクリスチャンの友達

たくさんいますけど、その中で私だけが教会へ行っているということで、そこの場所でやっぱり私はいなくちゃ、その人たちを神様と関わらせることもできないし。」

アキラも同様の答えをしています。「（自分の存在は）特に子供にとっては、・・・すごく大きな存在だと思う。妻にとっても、これからの人生、・・・ 妻とはずっとでしょうし。あと、今勤めている職場でも、自分がうけもっている生徒から見れば、僕がすべてというか、僕しか指導している人がいないので、極端な話し、僕がいなくなってしまったら困るなというのもあって、自分ががんばって、学生が大学院を卒業していくということで。自分の存在ということは、職場でも家庭でもそれなりに意味を持っているんだなと思う。」

マサコは他の人との関係と同時に、自分の願いとして人生の意味を語っています。「もちろん（人生に意味があると）感じています。だって意味がなかったらつらいですね。まず、家族にとって、母であり、一応妻であり、子供や夫に対する責任。そこに自分の価値というものを。まだしなければならないこともたくさんありますし。仕事の中でも、少しでも役にたっているだろうと思って。それから、自分自身なにかしら、まわりからもそうですし、私もまた、その中で価値ある者として生きたいという、自分の内からも願いがありますね。価値をあらしめなければつまらないんじゃないですか。意味がないんじゃないですか。」

神と人との関係

タケシとヒロシは、神と人との両方の関係で自分の人生に意味を見出しています。タケシは、次のように語っています。「自分の職業を通してね、人の役に少しでもたてるというのを感じられるのは、自分の存在の意義があるんじゃないですかね。神様が用いてくれる。神様がそこに遣わして、活かしてくれる時に大きな喜びがある。・・・今、コーリングで仕事していますからね。召命でね。そこが大きいと思うんですよ。」

ヒロシは神様の愛との関係で説明しています。「僕自身を愛してくださってる方がいつもいて、その人（神様）にとって必要な人間だということです。・・・ 必要とされる場面というのはどういうことかというと、自分の家族を持って自分の家族を愛しなさいと言われている。それから仕事そのものも大事だけれども、仕事のまわりにいる人たちも愛しなさいって、・・・ そういうふうに言われている。（その他、親戚、友人など）そういう人にも愛を『あなた、示す必要があるんだ』と言われている気がします。それが証しだと思うんですけど ・・・ それが意味じゃないかなと思います。自分がそれだけ愛されているってことを、どうやってそういう人たちに知らせるか。」

要約

すべての回答者は、神や他の人との関係において自分の人生に意味を見出していました。言いかえるなら、他の人格との関わりにおいて、人生の意味を見出しています。自分自身や物質的な環境との関わりによって意味を見出している人は、いませんでした。神が自分を創造されたので意味があるという人や、神や人に貢献しているので意味があるという人がいました。

神のイメージ

人生のさまざまな時期に、どんな神（神々）のイメージを持っていたかを答えていただきました。神のイメージは、その人が神をどのように経験し、神とどのような関係を持っているかを表します。[18] 人生の時期は、子供時代、初めてクリスチャンに出会った時、クリスチャンになってから、の三つ時期に分けて考察します。

子供時代

子供の時に、神のイメージを持っていなかった人もいます。以下の４つの要素が、神のイメージの形成に関係があったと思われます：家庭環境、自然環境、地域環境、学校教育。

家庭環境

神のイメージ形成に関係があったと思われる第一の要素は、家庭環境です。自分が育った家庭で、家族が特定の宗教の熱心な信者でなかった場合は、子供たちは神のイメージを持たない傾向が見られました。マサオ、アキラ、マサコ、カズコの家庭には仏壇はありましたが、家族が熱心に信仰していたわけではないので、彼らは子供時代には、神のイメージを持っていませんでした。

アキラの子供時代は、「生活の中で宗教を感じるというのは、そういう葬式くらいだったので、特にイメージはなかった。」マサコとカズコはいくらか仏壇を拝むような習慣がありましたが、それが神のイメージの形成に影響はありませんでした。マサコは次のように語っています。「生家は宗教色のない家だったので、神について深く考えたことはなかった。 ・・・ ただ機械的に仏壇とかにお水を供えたりということであって、ただ位牌がそこにあるということだけであった。だから、自分の家の宗教には興味も関心も持っていなかった。」カズコも同様に語っています。「うちは無宗教っていうか、全然信仰的でなかったので、神様ってものを特に考えたり、意識したりする

ことはなかった。ただ、うちに仏壇と神棚があって、・・・ そこにお線香あげる、おそなえするくらいで。小学生の頃は神様なんて、何にも考えなかったと思う。鳥居の前を通ると手を合わせる。それは習慣的なもので、どってことないのよ。そういうふうにするもんだと。」

以上とは逆に、家族が熱心に何らかの宗教を信じていた場合には、子供たちは神のイメージを持っていました。ユウコの「あばあちゃんは、すごい熱心な仏教徒だったんです。浄土真宗。それで『仏様が、仏様が』っていつも言っていたんです。だから、仏様がいるものという大前提が 2 歳、3 歳の頃からあったみたいです。でも神様っていうのも出てくるんですよ。おじいちゃんは、神棚に向かってポンポンやっているわけですよね。だから神様だか仏様だか何がなんだか知らないけれど、あるらしいっていうのは出発にあるんですね。」ユウコはこの神様や仏様を人格的存在として、考えていました。「『仏様はこう言うとってじゃけん』とか、おっしゃるっていうからには、人だろうっていう感じが強かったんですね。仏像もありますしね。なんか知らないけど人間みたいなものらしいみたいな。」

タケシが育った田舎には、神社、お寺とかがたくさんありました。「家にも神棚あるしね。仏壇もあるし。先祖崇拝、仏様。それから、自然のいろいろな所にお地蔵様とかあるでしょ。八百万の神ですよ。まさにそれが神々のイメージでしたね。とにかく神様って言われるものは、具体的にはなんだかわからないけれども、いるんじゃないかなと思いました。それをずっと持っていた。」

ヒロシも、日本の伝統的な宗教的習慣が行なわれていた環境で育ちました。「小さい頃から、神様、仏様、ご先祖様を拝んでいた。田舎ですので、日本的な習俗が根づいている。自分の担当で、食事の前に仏壇に小さいご飯をあげたり、ロウソクと線香に火を付けて拝むことを毎日やる。あとは、普通のお盆や正月、それ以外にも小さい行事がいろいろありました。 ・・・ ほとんど日常的な中にそういうのがあるんですね。 ・・・ ただなんとなく神様と言われているものいると。ただなんかいると。自分を見守っている人が必ずいるんだと、そして自分が悪いことすれば、悪いことが起こるよということがあったから、きちんとそのことはやっといた方がいい。神様とか仏様を拝んだり、お供えしたりはした方がいいと思っていました。」このように、ヒロシは、この時に「自分を見ていてくれる人たちを大切にする」という生活の規範、基本的なルールを身につけたと、当時を振り返って語っています。

自然環境

神のイメージの形成に影響を与えたと思われる第二の要素は、自然環境です。ハル

ヨはこう語っています。「八百万の神よりも、むしろ自然の古い木とか、大木とかそういうものに霊が宿っているといいますでしょ。そういうことの方が信じられるんですね。 ・・・ 田舎で育ったものですから、たっぷりした自然を見て育ちましたからね。山の姿なんかはとても好きでしたからね。」

ミドリも自分が育った自然環境の影響を述べています。「すごい田舎だったんですよ、山の奥の。 ・・・ それですごい風がヒューと吹くような山奥にいて、なんかそこに神とかわからないけど、見えないものが大自然の中でなんか働いているような感じがいつも小さい頃からあった。田舎の自然の中で遊んでいる中で、顔真っ赤にしながら遊んでいる中で、ヒューっておもに風とかですけど、自分も飛ばされそうな大きな風が吹いたり、雷がなったり、雨が降ったり。」

地域環境

第三の要素は、地域環境です。ケンジは子供時代を、殉教者で有名な長崎で過ごしました。彼がおばあさんの家を訪れると、カソリックの天主堂が見え、鐘の音が聞こえました。「なんとなくそのイメージが頭にこびりついていた」とケンジは言います。「昔から長崎だったこともありまして、神ってものは存在すると思っていました。教会の神様ってことを漠然といるって思っていました。」ただし、ケンジは何か悪いことがあると神の責任にしていました。たとえば、テストの成績が悪かったり、先生に叱られたりすると、「その時の理由づけとして、漠然と信じている神様が、こんなこと、こういう成績を悪くしたりすると思って、なんでこんなことするんだって、自分のせいじゃなくて、神様の責任にしていました。」

すでに見たとおり、タケシやヒロシは地域社会の宗教的環境の影響を強く受けて育ち、神様や仏様、ご先祖様のイメージを持っていました。しかし、その他の人々にとって、地域の環境は家庭環境ほど強くは影響を与えていないようです。

学校教育

神のイメージ形成に影響した第四の要素は、学校教育です。「目印となる出来事」のところで見たように、ヨシヒコとハルヨは第二次大戦中に軍国主義的な学校教育を受けました。ヨシヒコの子供時代は、「神様と言えば、神道の神々ですね。これは学校教育ですから。教科書ですから。歴史の第一ページには、天照大神が出てくる。」この神が日本を造ったと教えられました。ハルヨは天皇は生きた神様（現人神）であると信じていました。教師になってからは、このことを子供たちに教えていました。彼女は当時のことを振り返って、「教育っていうのは恐ろしいことだっていうことを非常に

感じましたね」と語っています。

しかしながら、戦争が終わった時、神道の神々は教科書から消されました。ヨシヒコは次のように言っています。「神は終戦でいなくなった。神道の神様は 180 度変わった。・ ・ ・ 昨日まで教えられていた歴史の教科書が、昨日までいた神道の神がいなくなるんです。」ハルヨも「敗戦によりこれらすべて（神々のイメージ）が空しいものになる」と言い、信じるのは自分の力と努力だけになったと語っています。

第二次大戦後も、学校教育が神のイメージ形成において強力な影響力を持っていることは、ユウコの例でわかります。ユウコが神の存在を疑い始めたのは、学校教育の影響でした。「でもだんだん教育受けてきて、『本当に(神が)あるのかな』って、疑うようになりましたね。大学時代はもう全然信じられないみたいな。・ ・ ・ やっぱり、進化論だとか、無神論だとか、そういうものいろいろ触れますから、それで疑うようになったんじゃないかなって思います。」

初めてクリスチャンに出会った時

エミの両親は無宗教でした。彼女が 5 歳だった時、お姉さんが彼女を教会の日曜学校に連れて行ってくれました。そこで、彼女は「見えないけど神様がいる」と教えられ、「あっ、そうなんだ」って納得しました。それ以来、彼女は神の存在を疑いませんでした。小学校 1 年の時に、その日曜学校に行くことをやめた後も、彼女は食前の祈りを続けました。彼女は、日曜学校で「習慣づけてもらった」と語っています。

ミドリはすでに見たように、山奥で育ち、見えないものが大自然の中で働いている感じをずっと持っていました。彼女は高校生の時、初めてクリスチャンに会いました。その人たちに言われるままに創世記の 1 章 1 節を読んだ時、「『これだ！』なんて思っちゃった。すごく単純だったんです。『あっ、ここに書いてある』とか思っちゃった。『この大自然に働くなんだかわからないものがここにちゃんと書いてあるわ』と思った。『やっぱりそうなんじゃないの』って思った。なんかピタッていう感じ。ガチッてはまったっていう感じ。創造主は 1 人と信じるようになった。」

ユウコにとって、生涯最初のクリスチャンとの出会いとなったのは、現在のご主人でした。まだ結婚する前に、彼はユウコに「自分の（信じている）神はいると思う、絶対に」と言って、遠藤周作の「イエスの生涯」を読んで感想文を書いてほしいと頼みました。彼女はこの本を読み終えて、イエス・キリストのことを「これはひょっとして私のことを理解してくれる人かもしれない」と思いました。「イエス・キリストという人がどうも実在したらしい。そしてひょっとしたら、これだけたくさんの人が信じていて、彼も疑わないということは、この人が本当に神なのかもしれない。」と彼女

は思いました。

クリスチャンになってから

インタビューに答えてくださった方々は、クリスチャンとしての生活が長くなるにつれて、愛なる神のイメージが強まる傾向が見られました。聖書の学び、他のクリスチャンとの交わり、そして人生経験が、神の新しいイメージ形成に貢献した主要な原因であると思われます。

カズコがクリスチャンになった時は、その時の牧師の影響で、恐く、きびしい神のイメージを持っていました。そのイメージは愛の神、私たちを受け入れてくれる神様のイメージに変わってきました。それは現在の牧師の影響であろうと彼女は語っています。

ケンジは教会の奉仕、日々のディボーション、クリスチャンの友人、大学の聖書研究などを通して、漠然としていた神様のイメージがどんどん変わっていって、「本当に神様は自分を見つめていてくださって、守ってくださる方」ということがわかっていきました。

エミは子供の頃、日曜学校で教わった「お寺や神社とは違う目には見えない神様がいる」というイメージを持って育ちました。高校生の時、洗礼準備会での学びを通して、「（イエス･キリストが）私のためにも十字架にかかってくれたと知り、愛の神を感じ」ました。その後、職場のむずかしい人間関係を通して、やさしいだけの神ではなく、訓練される神でもあることを知りました。「わりと仏教とかそういうのは、いいことだけっていうか、そういう感じですけど、私たちの神様はそういういいことばかりじゃないっていうか、そういう大変な経験もさせてくれる。 ・・・ 神様は訓練をもくださるから、きれいごとじゃない。 ・・・ （だから本当の神様という）自信を持って神様を信じていられた。」エミはインタビューの数ヶ月前に結婚しました。「結婚してみて、父とかはこの世のお父さんだけど、神様っていうのはずっと永遠にお父さんっていうか、そういうのをすごく感じます。 ・・・ 結婚してから、お父さんというイメージが強くなった気がします。やさしくかつきびしい。」

ヒロシもクリスチャンになってから、愛なる神のイメージが深まりました。彼がクリスチャンになった時、以前持っていた神のイメージとは全然ちがう神であることがわかりました。「見てくれているというのは、(以前持っていた神のイメージと)同じかもしれないけど、本当に自分自身を大切に待っている方というのが本当にいるんだ。同じ神様でも、神様の内容が違う。自分が愛の対象になっている。それが一番の違いだと思う。」ヒロシはクリスチャン生活が長くなるにつれて、２度離婚した自分でさえ

も救われたことや、さまざまな人の救いの率直な証しを聞いて、ますます神の愛の大きさがわかってきました。「クリスチャンは離婚してはいけないとか、クリスチャンは何々してはいけない、敬虔なクリスチャンでなければいけないといろんな言葉を並べる人がいますけど、いやそうじゃなくて、どういう人であっても愛に垣根はないんだっていう、そのことはすごく思います。」

マサオは 48 歳でクリスチャンになりました。「信じてからは、神様のイメージはあまり変化はない。私らは、どうしても厳しい、恐ろしい神様っていうよりは、愛の神様っていう方になりやすいですよね。自分が年をとるに従って、ますます救い難い罪人だと思い知って来るんじゃないですかね。だから、そういう自分が赦されているという確信はありますから、そういう方(愛の神様のイメージ)が強い。」

アキラがクリスチャンになった頃は、自分を助けたり、救ってくれる、何かをしてくれる神様というイメージを持っていました。その後、つらい経験をしたり、毎年のように引越しし、自分を知っている人が周りにいない生活を経験しました。「しかし、自分が信じている神様はずっと僕が地上でどうなるのかいっしょに歩いて知っていてくれる。 ・・・ 自分がどういうふうに歩んでも、共に歩んでくれる、そういうイメージにだんだん変わってきたような気がします。」

ヨシヒコはクリスチャンになった最初の頃は、天地の造り主という神のイメージを持っていました。その後、キリスト教のボランティア活動をするようになって、本当の意味では隣人を愛せない人間の罪を強く感じるようになりました。愛せない人間を愛せるようにしてくださるのがイエス様しかいないということで、今では愛なるイエス様のイメージが強いと語っています。

マサコは次のように言います。「初めは、自分とかけ離れた存在で、上から見ておられて導かれるものと思った。ところが、メッセージによって主はあなたといる、そして聖霊が心に住んでくださるという感じで、そしてよく自分を見ていく時に、『あっ、本当にそうなんだ』ということで、自分が神を認識していく。神様のいろんな面を知っていく。そんな意味で、神様がなおなお自分とのかかわりの中にもっといてほしいし、もっと神様を知りたいと。」このようにマサコにとって神は、超越的・外在的存在から親しく・内在的な存在のイメージに変わってきました。

ユウコの場合は、三位一体の神を一つづつ理解していく歩みであったと語っています。「最初はイエス・キリストという一人の人だったんですけど、そのイエス・キリストが創造主なんだという深まりですね。そして、イエス・キリストと創造主で終わってたんですけど、日本に帰ってきて困難なことを体験していく中で、そして聖書研究会の学びの中で、もう一つ聖霊というのがはっきり存在して、三位一体なんだってい

うことがビッシッと頭に入った。」

要約

幼い時に、神のイメージ形成に影響があると思われる要因は、家庭、自然環境、地域環境、学校教育の４つでした。育った家庭において、家族が熱心な信者（本研究の場合は仏教徒）でない場合は、子供は神のイメージを持たない傾向が見られました。逆に家族が熱心な信者である場合には、子供の神のイメージ形成に影響を与えています。山奥で育った人たちは、子供の頃は自然の中に何かが存在するという感じの神のイメージを持っていました。また、育った地域にお寺や神社、あるいは天主堂があった場合は、そういった環境も神のイメージ形成に影響を与えました。学校教育は戦時中には神道的な神のイメージを植え付け、戦後は進化論によって神はいないという考え（無神論）の形成に影響を与えています。

12 人中 3 人が、人生で初めてクリスチャンに出会った時にキリスト教的な神のイメージを持ちました。また、ほとんどすべての人がクリスチャンとしての歩みが長くなるにつれて、愛なる神のイメージが強くなる傾向が見られました。この変化には、聖書の学び、他のクリスチャンとの交わり、人生経験などが影響を与えているように思われます。

第 3 章　クリスチャン生活

クリスチャン生活に関して、以下の 10 項目について答えていただきました。信仰の概念、成熟した信仰の概念、回心の経験、信仰の変化の認識、信仰の成長、信仰の落ち込み、人間的影響（積極的）、人間的影響（否定的）、教会活動、教会環境。

信仰の概念

「信仰とは何だと思いますか」という質問は、かなり答えることがむずかしそうでした。ほとんどの人が、しばらく考えた後、言葉を選びながら話してくださいました。抽象的な解答が多かったのですが、以下のような信仰の概念を得ることができました。

幾人かの人たちは、信仰を人生とか、過程としてとらえ、「神と共に歩む」ことや、「神と共に生きる」ことを強調しています。アキラは「自分が生きて行く人生そのものが信仰のような気がする。神が自分と共に歩んで、人生の中でいろんなことがあって、そういうのを共に祈ったりして、人生を一つ一つ歩んで行く」と言っています。カズコも同様に、「私が生きていることすべてが信仰。毎日の生活。信仰というのは、神様の方を向いて生きること」と語っています。エミは「生活していく基本となるもの、土台となる、支えとなるもの。　・・・　神様といっしょに生活していくのが信仰」と答えています。マサコにとって信仰とは、「見えないものに向かって行くこと。　・・・　祈りつつ日々の生活を送って行く、そしてそれは新しい天と地、神様の元に戻るという道程が信仰だと思っています。」

別の人たちは、神に対する人の責任を強調しています。ユウコにとって信仰とは「自分の存在の裏付け。自分があるのは、創造主が自分を創造されたからで、私はただその創造主に応答している。その応答の形が信仰。」タケシは次のように語っています。「信仰っていうのは、イエス・キリストが自分を愛されて、自分の罪のために死んでくれて、そして三日目によみがえって、自分に人生の希望と愛と生きる力を与えてくださり、神様を第一としながら、主の御旨を悟りながら、神のよしとすることを聖書に基づいて生きて行くことだと思う。」ケンジにとって信仰とは、「あってないようなものですけど、それを持っていないといろんなことがめちゃめちゃになっていくもの。　・・・　手を伸ばしてつかめるというものでもないですけど、いつも手を伸ばしていないと感情に流されてくずれてしまう。　・・・　引っ張って行く機関車（動力）の意味。」ミドリにとって信仰とは、「自然にそこにあるべき姿になっていく」こと、あるいは「人間として本当の正しいあり方」のこと。「本当にごく自然に神様に感謝したり、与えられた物を喜んで受け取るとか、自分の不満とかをぶつけられる存在

の神様に頼っていくのが信仰。」

マサオとヨシヒコは、信仰における決断とか意志を強調しています。彼らはそれぞれ 48 歳と 44 歳でクリスチャンになりました。自分の入信の経験が、信仰の概念に影響を与えているのかもしれません。マサオはこう語っています。「信仰とはいろんなことありますけど、意志が一番強いと思います。それを補強するのに感情とか、理性とかありますけど。人間を列車にたとえると、機関車は意志だと思っています。・・・信仰とはイエス・キリストが神であることを信じることだと思います。信じるとは信じようと思うことではないですか。」

ヨシヒコにとって信仰とは、「求めること、ゆだねること。・・・自分が何かを求めているということは、まさに神様がそうされているんで、神様を求める気持ちがひとかけらでもあれば、それは信仰なんだ。それがなければ、いくら立派なことを言っても、頭の中で何か素晴らしいことを信じても、神様求める気持ちがなければ、それは信仰ではないと思います。もう一つはゆだねるということ。いろんな苦しみとか悩みとかあるけど、信仰の喜びというのは、結局すべてをゆだねること。人間は自分で自分を追いやってしまっている。それを絶対的に大丈夫な方にゆだねて。そこには一つの決断というものが必要になってくる。」

信仰の概念は、一人一人の人生経験を反映しています。特にハルヨとヒロシの回答には、そのことがよくうかがえます。ハルヨは自分の夫を亡くし、病気の息子を看病するという苦しい経験をしてきました。ハルヨにとって信仰とは、「ひたすら信じることだと思います。神様をね。どのようなことがあっても、神が助けてくださると信じて生活していくこと。信じて幸せを得られれば一番いいことだと思いますけどね。それがたとえそうじゃなくても、やっぱり神様を信じて生きていくこと。」

ヒロシは２度離婚し、すべての自信を失った経験があります。彼にとって信仰とは「希望だと思います。神様がいつも共にいてくださるってことですね。相談する人がいても、いつも相談ができる方っていうのは神様だし、いつも見つめていてくれるし、多少の間違いをおかしても、きちんと受けとめてくださるし、ちゃんとその間違いも指摘してくださるし、自分の生きる指針を与えてくださるっていう意味での希望。こっちに光があるっていう。ですから安心している。」

以上のように、信仰の概念は一人一人の人生経験や学んできたことから形成されたものであると考えられます。信仰を人生とか、過程としてとらえ、「神と共に歩む」こととか「神と共に生きる」ことを中心に考える人もいれば、神に対する人の責任を中心にして考えている人たちもいます。また、信仰における決断とか意志を強調している人もいます。これらの回答からわかることは、信仰を信条の集りのように考えたり、

自分の生き方の一部として考えている人はいませんでした。すべての人が、信仰を生き方すべてに関わるものとして考え、自分一人の個人的なものではなく、神との関わりでとらえています。

成熟した信仰の概念

インタヴューをお願いした方に、「成熟した信仰とはどのようなものだと思いますか」、「成熟した信仰者のイメージを描いてみてください」と質問しました。

４人の回答者（ヒロシ、タケシ、マサコ、ケンジ）は、イエス・キリストに似ることが成熟した信仰であると答えています。ヒロシにとって成熟した信仰とは、「イエス様にならうこと。すべてをゆだねること。 ・・・ イエス様だったらどうするんだろうっていう、この問いっていうのは、結局、信仰者としてどうするのかっていうことだと思うんですけど。そういう場面っていろいろあるんじゃないかなって思うんです。」

タケシも同様に、「どんな状況の中でも、イエス様だったらどういうふうに行動し、発言するかなと、イエス様だったらどういうふうにこの場を処理していくかなということを、きちっと常に見極めて、聖書の言葉を実行できるということでしょうね。」

マサコは成熟した信仰者について、次のように語っています。「その人の人間、自我を超越できる人。極端にいったら成熟した信仰者はどれだけイエス様のお姿に近づいているか、そのひとことに尽きると思う。つまり、自分の自我とか罪、自分の雑念、いろんな心の思いとか無知とかいろいろありますよね。自己から解放されること。」しかし、それは自分から離れることではなく、自分の内に愛、善、人への思いやりを増し加えて自分を成長させていくことが大切であるとマサコは言います。

ケンジは成熟した信仰者の姿を決めてかかるのがいやで、そういった人のイメージを思い描かないようにしていると言います。しかし、強いて言えば「トンネルがあって、その向こうに光が見えてて、その光に向かってずっと手を差し伸べている。そういった状態というのが一番。本当に成熟した人というのはイエス・キリスト以外にいないですから、そういった光に常に手を伸ばしている状態が理想的だと思う。」

エミとハルヨ、ユウコは動じない信仰をあげています。エミは、成熟した信仰者は「ちょっとしたことじゃ揺れない。本当に神様にゆだねきれる人。神様に密着している人」と言っています。ハルヨにとっての成熟した信仰者のイメージは、「ある程度お年をとった落ち着いた中年過ぎのご婦人。あるいは紳士の穏やかなしっかりした生活ぶり。あまり騒がしくない穏やかな、それでいて芯が通っていて、あまり物事に動じないような、そういう方のイメージを思い浮かべます。」

ユウコにとって成熟した信仰とは、「いろんなことが起こってもつまずかない信仰。 ・・・ 逆境になっても、マイナスにならない信仰。マイナスにならないというのは、だから、これを信じているのが間違っているとかじゃなくて、前に向かって期待できる信仰。いったん落ち込んでも、必ずはい上がれるみたいな。信仰体験を積んでいる。祈りを重ねて、いろんな場面に出くわして、そしてやっぱりそれでも、神様あがめながら来たから成熟した人になっていけるんじゃないかな。」

カズコとマサオは他の人に対する愛を中心に語っています。カズコにとって成熟した信仰者は、「いつでも神様を見ていられる人。誰でも愛することのできる人。マザー・テレサみたいな人。いつも神様といっしょにいる人。」マサオにとっても成熟した信仰者とは、「やっぱり自分のことだけじゃなくて、他の多くの方のことを配慮できるような信仰者じゃないですかね。」

アキラは使命に忠実な生き方を強調しています。彼にとって成熟した信仰者は、「神様だけを見て、他の人の評価に依存しないで、その人の人生でその人が与えられている仕事とかそういうのを誠実に歩んでいくような人。自分のことだけでなく他の人の配慮も。」

ミドリは、聖い生き方と神様に立ち返れることを強調しています。彼女にとって成熟した信仰者は、「目に見えてもすごく聖い生活をしている人。ディボーションもちゃんとしているとかね。にじみでるような、あふれているようなイメージ。 ・・・ あとは、神様に立ち返れる人。失敗しても、それをすべて益としてくださることに目をとめて、そこに返れる人は素晴らしいなあと思う。」

ヨシヒコは喜びを強調しています。彼は具体的な宣教師の名を挙げて、「H 先生のような、喜びにあふれているような、しかも天に召される時も喜びにあふれて天国に召されていく。そういう方の信仰の境地というのは、一つの成熟した信仰でしょう。」

回心の経験

ここでは、一人一人が答えてくださったユニークな回心の体験を簡単にまとめて紹介します。

エミ

エミが五歳の時、お姉さんがエミを日曜学校に連れていってくれました。「神様と自分の関係ということで、ここで日曜学校の先生との出会いはすごく重要だったと思う。ここで、信仰告白しましたし、お祈りの習慣」も身につきました。エミは小学校一年

生の時に、その日曜学校へは行かなくなりましたが、神様の存在を疑うことはずっとありませんでした。それに、食前のお祈りも続けました。

エミは自分のお姉さんがクリスチャンになるのを見た時、自分もクリスチャンになるのだろうと思いました。「神様に小さい頃出会ったこと自体がすごく大きな出会いだから、そこで出会った時点でいつ受洗するのかはわからないけど、そういう人生とうか、そういうものなんだろうなって思っていた。」

中学、高校時代は、日曜日も部活動でバスケットボールの練習をしていました。高校三年の時、エミは」部活動を引退し、日曜日の時間があきました。彼女のお姉さんはすでに教会に行っていたので、エミも「もうそろそろ教会に行こうかなと」思って、行き始めました。「教会の人たちというのも、とてもやさしかったですし、そういう仲間に入りたいというのがありました。」エミは洗礼準備クラスに出席し、すんなりと１８歳の時に洗礼を受けました。

ミドリ

ミドリは高校生の時、孤独で友達がいませんでした。そんな時、ラジオの音楽番組を聞いて手紙を出したら、何人かの人が会いに来てくれました。彼らは、クリスチャンと称し、神のことをいろいろ話してくれました。「すごくやさしくて、何でも受け止めてくれるような感じ」でした。ミドリは、彼らから聖書の話しを聞いてクリスチャンになる決心はしませんでしたが、その時以来、一人の創造者が存在することを信じるようになりました。

ミドリは幼い頃、両親を神のように尊敬していました。しかし、高校生になると親の弱点も見えるようになり、もはや両親を尊敬することができないでいました。「自分を変えたかったし、頼りになる人がちょうど両親のいろんな面を見たりして、だめだなって思って、神様的存在だったのに、自分の指針となるような、自分を導いてくれるような人たちが、友達とかもその時は自分には益とならないっていうか、自分は入っていけなかったし。友達もだめ、両親もだめという感じになったので、そのクリスチャンの人たちに向いて」いきました。「その人たちが言っていたことが、自分を捨てるということと、この世の生活じゃない生活をするっていうようなことを言っていて、すごく新鮮に感じて、自分も今の生活はいやだと思っていたし、そういう生活も他の人と違うものに影響されたいっていうようなものがあって、それがぴったりいっていたような。」そのクリスチャンたちは共同生活をするようにミドリを誘いましたが、ミドリは家族から離れられずに断りました。それで、そのクリスチャンたちとの出会いは終わりました。

それ以降、ミドリは時々、聖書を読むようになりました。そして、自分に聖書を教えてくれる人を求めていました。同時に彼女は、初めてクリスチャンたちに出会った時のような満足感を与えてくれる経験を求めていました。

ミドリは 20 歳の時に、特別伝道集会のチラシを見て、教会に行きました。そして、「やっぱりこれだという感じ」で、特に音楽が気に入って、毎週教会に行くようになりました。「自分の持っていた神様のイメージとぴったりきた。違和感がなかった。そして、もうとにかくこれだと思った。でも今考えると何でも受け入れてたような、わけわからなくても、とにかく仲間になりたいみたいな感じがあったかもしれない。」その年の 8 月のキャンプの聖会で、罪の悔い改めをし、12 月に洗礼を受けました。

ユウコ

ユウコにとって、最初に出会ったクリスチャンは将来、彼女の夫となる男性でした。結婚前に、彼の父がユウコが洗礼を受けてクリスチャンにならなければ結婚を認めないと言ったので、ユウコはとにかく洗礼を受けました。その後、ユウコはキリスト教の本を読んで、イエス・キリストが自分の求めている神様かもしれないという気持ちを持っていました。しかし、義父や親戚のクリスチャンの偽善性が目につき、自分が本当に信じてもいないのにクリスチャンとして礼拝に出席していることが苦しくなって、礼拝に出席しなくなりました。

その後、ユウコが 37 歳の時、夫の転勤に伴って家族でアメリカに引越しました。そして、近所の人から日本人を対象とした聖書研究会に誘われました。ユウコは、信仰を捨てた者だったので、聖書を勉強する気にはならなかったのですが、一度行ってみようかと思って行き始めました。そこでマルコの福音書の中で、パリサイ人がイエスを糾弾している場面を学んだ時、「あっと思ったんですね。私が主人の父に対して非常に反感を持っていて、あの人のことを考えてずっとつきつめている。攻撃している。気持ちの中で、その攻撃の仕方とパリサイ人の攻撃の仕方がそっくりだと思ったんですね。だから、きっと私があの時代に生きていたなら、イエス・キリストを十字架につけよと叫んだにちがいないと思ったんですね。その時に初めて、あっそうなのか、こういう罪がイエス・キリストを殺したんだなってことがわかったんです。だから、私は本当に罪人だったんだなとわかって初めて、ここで信仰告白できたんですね。」

カズコ

カズコは OL をしていた 20 代の後半の頃、創価学会に入っている友人がいました。「その人が一生懸命、しゃく伏するんですよ。私はしょうがないから聞いているんで

すけど、いやな顔して聞いているんですけど、むこうは一生懸命するんですね。・・・その人を見ていながら、信じるものを持っている人の強さを感じました。・・・私自身はそういうもの何もないわけですよ。ただ会社に行って、あとは自分がいいと思うこと、楽しいこと、そういうものをやって生活していて、まあ普通の OL ですけど、毎日毎日それで繰り返していて、そんな中で信じるものを持っている人は強いなあと。これで何にも持たないで、このまま一生過すのと、なんか信じるものを持って生きるのでは、一生の間に大きな差ができるなと思ったんですね。」

カズコはキリスト教のことをほとんど知りませんでしたが、いろいろな宗教の中でキリスト教が一番かっこういいと思っていました。そんな時、キリスト教の特別伝道集会の案内をもらったので、集会に出てみました。その集会では、メッセージも音楽もあまりかっこうよくありませんでした。それで集会の途中で出てきてしまいました。ただ、「クリスチャンは生きる目的がはっきりしている」という言葉だけは、ずっと頭の中から消えませんでした。

その頃、カズコは親友と思っていた会社の友人に利用される経験をしました。「そういうことがあって、人は本当は心から信頼することはできないものだって」しみじみ思いました。

それで、クリスチャンが何を考えているのか知りたいと思い、教会へ行ってみました。行った日はちょうど、祈祷会の日でした。「そこで私は非常にびっくりしたんです。・・・そこに来ていた人たちがみんな真剣なんですよ。私が何にもわからないで行ったわけですけど、私のためにもお祈りしているわけです。どこの誰だかわからないポッと来た人のためにも、この人たちは真剣にお祈りしているということはわかるんです。・・・こんなにまじめに生きている人たちがいたんだなというのが、教会に対する最初の印象でした。」

この時に出会った伝道師が、カズコにすごく大きな影響を与えました。この伝道師の笑顔は、カズコが今まで知っているどんな笑顔とも違い、とても引きつけられました。「人柄に引かれたんです。その人が持っている信仰だったんでしょうね。きっとね。」

カズコが教会に来て、メッセージを聞くようになると、今まで自分が生きてきた世の中の基準で絶えず変わる世界と、変わることのないキリスト教の世界とどちらで生きるかという選択を迫られているように感じました。「元の世界に戻るかどうかと思った時、私は元の世界に戻れないと思った。こっちの世界で私は生きたいと、もう元の所へ戻るのはいやだと思」った。最初は曇りガラスの向こうにイエス様を見ているようなものでしたが、「だんだん曇りガラスが透明のガラスになってくるわけです。だ

んだんよくわかってくるわけですね。そうすると、私はもうこの方を信じて生きるしかないと思うようになったわけです。カズコは 29 歳の時に洗礼を受けました。

マサコ

マサコは、死に対して恐怖を抱いていました。彼女は、ジイドやヘッセの本を読んで、その中に永遠の命のことが書かれていて、それが何を意味するのか知りたいと思いました。マサコが短大一年生の時、永遠の命のことを友人と話していたら、一人の友人が「私知っているわ」と言って、マサコを教会に誘ってくれました。その友人がマサコの聖書理解を助け、相談にのり、信仰を導いてくれました。

その年の夏、マサコはキリスト教のキャンプに参加しました。そのキャンプの２日目の朝、「祈って聖書を読んでいた時に、ヨハネ伝の中で、『あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。』というみ言葉がものすごく光のように私の心に差し込んでくる感じでした。この言葉によって、なぜ神様が私を選んだのか、愛しているのかが解決した。その時を契機に、神様との関わり、イエス様の十字架というものがわかった。救われたという確信です。」この時、マサコは 19 歳でした。

ハルヨ

ハルヨは第二次世界大戦の敗戦時、教師をしていました。その時の教育内容の激変を身を持って体験し、自分以外何者も信じられなくなりました。それでも「だんだん 40 にもなってくると、不安というのはどんな生活の中でも起きてきますよね。それで何かほしかたんですね。」ハルヨは文学がとても好きだったので、世界文学全集をたくさん読みました。「そういうものを読んでいると、キリスト教を理解していなければ、理解できないところが自然にでてきますよね。」こうして、ハルヨはキリスト教に興味を持ちました。

そんな時、近所のクリスチャンの女性から、教会でオルガンを弾く人が足りないので助けてほしいと頼まれました。それでハルヨは教会へ行き始めました。そして、毎週、牧師の説教を聞いているうちに、一年くらいして自然に信じました。「生活は貧乏でしたけど、その頃、苦労も何もなかったんですから、よかったんですけど。よく病気がちで信じるとか、夫に裏切られて信じるとか、そういう悲劇的なことは私の場合、ありませんでした。ですから、自然に浸透していったんだと思います。」ハルヨは 44 歳で洗礼を受けました。

ケンジ

ケンジは大学に入学後、キャンパスクルセードのスタッフから、「四つの法則」のトラクトを使ってキリスト教の話しを聞きました。「漠然と信じてきたものがあったので、『はい』って答えちゃったんですね。『信じます』とその時言いました。自分ではほとんど、何も覚えていませんが、むこうの人が喜んでくれて、握手求めてきてくれて、それで、これでよかったのかなと思った。」

その後、ケンジはキャンパスクルセード主催のアメリカツアーに誘われました。その時、親に反対されました。ところが、ケンジのお母さんの知り合いにクリスチャンがいて、その人が大丈夫と言ってくれたおかげで、ケンジの両親もツアーに参加することを認めました。「その時の導かれ方に、本当に神様っているんだと思って。片言で『いけますように』とお祈りしていたので、本当に神っているんだとわかって、それがきっかけで、アメリカに行って、帰ってきた頃、洗礼を受けました。その時、ケンジは 20 歳でした。

アキラ

「それまで、小、中、高と一生懸命がんばるという価値観で生きてきて、・・・結局、一生懸命まわりの評価を求めていったにもかかわらず、そういうのがない状態がずっと続いていることもあって。そういいながら、人とは違う一段上の神みたいな存在がいて、そういう自分に幸せを運んできてくれるんじゃないかと、そういうイメージを持っていて、」大学に入ってもがんばり続けて、さらに疲れるという繰り返しでした。その頃、アキラは大学院で研究者としてうまくやっていけるかどうか、とても不安でした。

そんな時に、一人の友人から教会での特別伝道集会に誘われました。キリスト教の神のイメージは、それまで漠然と持っていた神のイメージとそっくりに思われました。アキラは教会の青年会にも参加し、「新しい人を大切にしてくれるような雰囲気」を感じました。「僕自身が求めていたものは、結局、勉強とかの、何かを達成することで評価を受けて、まわりの人から親切にしてもらうという、それがすごく大きかった。だけども、親切にしてもらうために自分をがんばるとか、評価してもらうとか、そういうことですごく疲れていたので。（教会では）そういうことが全然ではないけど、ほとんどなくて親切にしてくれるということは、精神的に落ち着きました。」アキラは 23 歳の時に、洗礼を受けました。

ヒロシ

ヒロシは２度の離婚の後、自分の判断や信念のすべての基準を失いました。他の人も自分自身も信じられない状態でした。それから四年後に、職場の女性と結婚したいと思いました。その時、職場のクリスチャンの上司が、教会に来て結婚とはどういうことなのか勉強してみないかと誘ってくれました。「僕自身も３回目ということになって、本当に自分の気持ちが確かなのかどうかということを、もう１度確認したかったし、・・・ ある意味では教会でなくてもよかったんです。誰かが確信を持って、いいんだって言ってくれる人がほしかったんですね。 ・・・ それで、３ヶ月くらい、勉強して。礼拝前に一時間くらいづつ、 ・・・。」

「そういう中で、秋の特伝がありまして、 O 先生が放蕩息子の話のところから、神様ってのは、自分から離れて行った者でも、どんなにひどいことしてきた人間でも赦してくれるんだと。 ・・・ この時に、そういう神様っていらっしゃるんだなって覚えて、そういう神様のもとでなら結婚を誓うことができるなあと。」こうして、ヒロシはこの特別伝道集会の時にイエス・キリストを信じる決心をしました。翌年の１月に結婚式をあげ、その後も洗礼準備会で勉強して、10 月に夫婦そろって洗礼を受けました。その時、ヒロシは 35 歳でした。

タケシ

タケシは失恋と大学入試の失敗で傷つき、アメリカの大学に入学しました。タケシがいた学生寮に２人のクリスチャンが訪ねて来ました。この人たちが「非常にいい方たちだったので、英語も勉強したかったし、そこから教会に導かれたんですよ。それで留学生たちを非常に大事にしてくれる会があったんですよ。 ・・・ そこにつながってから教会に行って、教会の人たちって違うなと思った。タバコも酒もやらないし、非常に親切だし、清らかさを持っていました。そういうものに引かれるようになりました。」

その時、タケシは新興宗教の霊友会を信じていました。「最初は、俺は霊友会で、日本には日本の先祖供養があるんだとやっていたんです。キリスト教というのはアメリカの宗教だと、日本には先祖供養とか冠婚葬祭だってしっかりしたものを持っているんだということでね。ただある時、考えたの。本当にうちの先祖が太平洋を越えて自分のこと、守りに来てくれるのかなと疑問をある時点で感じ始めた。」

タケシは「その頃、人生って何のために自分が生きて、存在しているのかなと考え始めましたよ。20 歳過ぎでね。それでどうしたら過去の自分の失敗とか、・・・ 人生の汚点を消すことができるかなと考えていましたよ。いろいろな宗教やって、朝の

集いやったってだめだし、先祖供養やったって消せなかったけど、じゃあこれからどうしていけばいいんだと、一生こういうような思いで生きていかなければいけないのかなと思いました。」

大学２年生の時、大学の勉強で「もうへとへとになっちゃって、どうしようもなくなっちゃたんですよ。何を信じていいかわからなくなっちゃって、それで2月26日に、今までいろんなイエス様の話聞いてきて、本当にイエス様って自分のこと救ってくれてね、イエス様が真理であり、命であり、道であると、本当なのかなと。自分も心開いてね、祈ったんですよ。 ・・・ イエス様、本当に生きていて、あなたが愛の神であるなら、自分の過去の罪をすべて負ってくれて、自分に豊かな人生を与えてくれるんだったら、俺は生涯自分の人生ささげるから、なんとかしてくれって、本当にもがきの中から祈ってね。 ・・・ 祈った時に、イエス・キリストが平安の暖かい、本当に最初に聖霊が入って来る時、暖かさを感じました。それですべての重荷を私が負うから、おまえは俺について来いと。 ・・・ 自分の人生の一番の転機ですよね。」この経験から７ヶ月後に、タケシは23歳で洗礼を受けました。

ヨシヒコ

ヨシヒコは大学の時、絶対的なものはないと考える歴史的相対主義の影響を強く受けました。その後、サラリーマンとして猛烈に忙しかった30代に、仏教関係の本を読むようになりました。「相対主義だと思いながらも、それではおさまらない気持ちが多分あったんだと思います。」「なまなましい現実の社会の中でやっていく中で、やっぱり頼れるものがほしかったということだったと思います。」

37,8歳のある時、「たまたま古本屋で聖書があって、それでちょっと読んでみようかと思って、買って持って帰って。 ・・・ もし、僕に広い意味での神様との出会いがあったとしたら、僕はそういうこと意識的にやりたくない方だけれども、一つの出会いだったかもしれません。 ・・・ その時にものすごく新鮮な感じがしました。山上の垂訓のところなんですね。 ・・・ 一つ一つがものすごく生き生きと入ってきたんですよ。 ・・・ そこでがらっと変わったわけじゃなくて、聖書とかキリスト教関係書をかなり読んで。キリスト教の神様を受け入れる最初のきっかけというのは、ここなんでしょうね。」

その後、内村鑑三のロマ書の研究などを読んで、「キリスト教神学というものが壮大な体系があるんだということを知った。これは勉強しなくてはいけないと。これまでなじんできた哲学書を凌駕するほどの領域がキリスト教の中にあるんだと感じました。」

その頃、ヨシヒコの家に牧師が訪ねてくる機会がありました。そこで２、３時間、牧師と話しました。その牧師が帰る時に、「また来ますから」と言いました。ヨシヒコは、「『また来られたのでは困る』と思って、『わざわざ来ていただくのは失礼だから、こちらから行きますから』と。それで、その翌週、せっかく行くと言ったから、一度は顔出さないといけないと思って、教会へ行ったんです。それがきっかけで、それからずっと、毎週欠かさず、今に到るまで」礼拝に出席し続けています。

「私は今から考えると、それは神様から与えられた一つの機会だったと思います。この時、聖書を読んだり、いろいろな本を読んで、ある程度キリスト教に魅力を感じていたけど、具体的に自分は何をしたらいいかと、どうしたらいいのかと、行き詰まりみたいな状況になっていたんですよ。いろいろ仏教だ、キリスト教だといろいろなことをぐちゃぐちゃやってきたけれども、堂々巡りばかりやっているんじゃないかと。結局、ああでもない、こうでもないとやってきて、このままいってると、このキリスト教関係の本もある時期が来ると、何かほかのイスラム教だか何だか知らないけど、といいうようなことでね。何となく一つの行き詰まり感というものがあって、ここで何かふんぎらないと自分の人生はずっと従来の延長が続くだけのことだと、かなり感じていたんです。そういう機会を、まさに神様が与えてくださったんだと思います。 ・・・ ゆだねるとか、求めるという信仰の基本的なものは、仏教でもありますから、頭の中ではわかっていたんですよね。信仰というのはそういうものだと。それを頭の中ではなく、自分自身の決断として、そうしようとしたのがこの時でした。」ヨシヒコは、44 歳で洗礼を受けました。

マサオ

マサオは中学一年生の時に、レ・ミゼラブルを読んで、「自分は罪人なんだという罪の意識はその時に芽生え」ました。これが、マサオの人生を変えた本でした。

マサオはよく親友の家へ行って、大学入試のための勉強をしました。マサオはその親友のお母さんを、大変尊敬していました。「その方がクリスチャンで、ものすごく立派な方なんです。その人を私は非常に尊敬していまして、キリスト教に関心を抱いたのはおそらくその人の影響だろうと思います。」

マサオは高校の先生として打ち込み、ヨット部を国体とインターハイで全国優勝にまで導きました。しかし、優勝してみたら、こんなもののために一生懸命やっていたのかと幻滅してしまい、ヨット部を辞めました。それまで 10 年間、ヨットの本しか読まなかったので、今までがまんしていた本を夢中になって読みました。「何のために教育するのかわからなくなって、どういう人間になれというのかわからないですから、

教育書を夢中で読んで、それで哲学の本とか世界史の本とかいろいろ読みました。」どんな本を読んでも、結局キリスト教がわからないと本当の意味で理解できないように感じました。それで、聖書を読み始めました。マサオは、「どこかの教会へ行かないとわからないということがわかっていました。信仰というものは、頭でただ本を読んだだけではわからないと。必ず体験を伴わなければだめだと。」

ちょうどその頃、マサオの妻が教会に行き始めていました。当時、その教会は、マサオも興味を持っていたキリスト教史の勉強会を開いていました。それで、マサオはその勉強会に参加し始めました。しかし、ただ勉強会に出席するだけじゃ悪いと思って、礼拝にも出ることにしました。そうしたら、牧師の説教に大変感動しました。その牧師といろいろ話す機会もあり、「こんな偉い人会ったことないと思いました。」この牧師から、内村鑑三のロマ書の研究を読むことを勧められました。この本に非常に感動し、繰り返し読んで、洗礼を受けようという決心がつきました。マサオは 48 歳で、洗礼を受けました。

要約

以上見てきましたように、一人一人がユニークな経験を通してクリスチャンになりました。しかし、多くの共通性も見られます。

回心以前に、すべての回答者はクリスチャンとの交流がありました。彼らは、自分の知っているクリスチャンや教会のメンバーに引き付けられるものがありました。幾人かにとっては、クリスチャンが親切なので教会に加わりたいという思いを持ちました。

また、すべての回答者は回心以前に、何らかの形でキリスト教について学んでいました。多くの人は説教を通してキリスト教のことを学んでいました。インタヴューした当時 45 歳以上だった人の内、カズコを除く 5 人は、外国文学やキリスト教の書物を読むことが、キリスト教に興味を持つきっかけになりました。

回答者たちがクリスチャンになったのは、彼らの両親や学校の先生の影響が弱くなってからでした。すべての回答者は、高校を卒業してからクリスチャンになりました。（本研究では、クリスチャンホームで育った人は除外してあります。）ほとんどの人は、自分が生まれ育った家を出てからクリスチャンになりました。

全体的に、情緒的なニーズが満たされたのちに、キリスト教に入信する傾向が見られました。以下にその例を挙げてみます。ミドリがクリスチャンになる前は、友人も両親も頼ることはできませんでした。彼女が教会に行くようになってから、彼女の孤独は消えました。カズコはクリスチャンになる前、自分が親友でさえ信頼できないこ

とに気づきました。その後、彼女は教会において信頼できる伝道師に出会いました。ハルヨが 40 歳になった時、自分の人生に対する不安を感じ、何か頼りになるものを求めました。そして、教会で頼りになる神を発見しました。アキラは教会に行き始める前、他人に認めてもらおうと努力することにとても疲れていました。教会内においては、青年たちの交わりでとてもリラックスすることができました。ヒロシは２度目の離婚の後、判断基準と信念とをすべて失っていました。彼は他人も自分自身も信じることができませんでした。彼が放蕩息子のメッセージを聞いた時、神が彼を赦し、受け入れてくださることがわかりました。

信仰の変化の認識

カズコ、マサオ、マサコは自分の信仰が変わってきたと思っていません。しかしながら、「神のイメージ」の箇所で述べたように、これら３人にとっても神のイメージは超越的なイメージから親密なイメージに変化していました。彼らの信仰は実際は変化してきたと思われますが、当人はその変化に気づいていないように思われます。おそらく、マサコが言っているように、信じている対象が絶対的なものであって変わらないということを、自分の信仰が変わらないという表現で表したのだと考えられます。

その他の九名は、クリスチャンになって以来、自分の信仰が変化してきたと認識しています。　ヒロシは時がたつにつれて、自分の罪深さをますます教えられ、神の愛の深さを感じると語っています。

ケンジは自己中心な信仰から神中心の信仰に変わってきたと言っています。「最初の頃は、・・・ 奉仕をしているから神様の祝福を受けているんだっていうような。教会に行っている限りは、奉仕をしていなければならないみたいな感じだったんですが、その奉仕によって自分も成長するんだと思っていたんですが、だんだんそういったことに疲れてきまして。その間に就職して、退職してという時期があったのですが、クオ・ヴァディスを読んで感動したあたりから、変わってきて、奉仕も大切だけど、そうではなくて、もっと自分の信仰の深い部分が成長していなければということがわかってきて。」以前は「四つの法則」の図にあるように、「心の王座に自分がすわっていたんですね。　・・・ そのクオ・ヴァディスの後くらいから、イエス・キリストの十字架が王座を占めるようになっていって、だんだん本当にみ言葉に照らし合わせて、自分がこう思うからではなくて、神様の言うことに従って、生活、信仰、会社の生活も見方を変えるようにしていったので、・・・ その頃から心が入れ替わって、変わってきた。」

タケシは世的な価値観から解放されてきたことを、次のように語っています。「世的なものに振り回されなくなってきた。少しづつね。決断するのにもね。たとえば、物とか、車にしてもいい車乗ってた方がいいとか、 ・・・ 一般的な社会的通念の価値観が強かったんですよ。それが信仰と共にバランスがとれてきて、 ・・・ 本当の意味で何が大事で何が大事でないかが変わりましたよね。それは大きいですね。それは聖化されつつある段階でしょうね。今でもいい車乗りたいなと思うけど、前は本当にほしいと買ってしまうんですよ、クリスチャンになっても。物でも何でも。今は物でも何でも本当に必要だったら買うしね。ほしい物と必要である物は違いますからね。それは変わりましたね。」

ユウコの場合は、祈りによる神との結びつきが強くなってきました。彼女は、アメリカでクリスチャンになりました。以前は「イエス・キリストは神であるとはわかっていたけれども、祈ることによって自分が変えられて行くような体験とか、強められるような体験をしなかったですから、祈りの大切さを知らなかったと思います。アメリカにいた頃ずっとそうかな。祈らないでいろんなことをやってきた。でもそれが、日本に帰ってきて、困難な中を通って来て、本当に祈らないと何も始まらないのねっていうことに気がついた。」こうして、ユウコは神との「結びつきが強くなってきた」と感じています。

エミはクリスチャンになりたての頃は、受け身で、教えられたことをそのまま受け入れていました。毎年の夏にクリスチャンキャンプに参加するようになって、同世代のクリスチャンから、神による問題解決の仕方を教わりました。神になんでも話してよいこと、真剣に祈ること、ディボーションすること、人のために祈ることなどを教えられ、信仰生活が充実してきました。

ミドリは振り返って見ると、洗礼を受けたばかりの頃は、「何でも受け入れちゃうよっていう感じで燃えてい」て、「自分でわかったような気になっちゃってた。」それから九年たって、「今ちょっと落ち着いて、 ・・・ あの時よりも今の方が神様っていうことに対してとか、イエス様っていうこととか、少しわかったかなって。」キリスト教の幼稚園での仕事やいろいろな人との関わりを通して、「自分の信仰が少し大きくなった。少し成長したのかなって。」たとえば、以前は「すごくやなこととかを受け入れられなかったり、文句ばかり言ってたんですけど、そういうのも最近、別の観点から見られるようになれたし、少し冷静になって、少しゆだねることができたのかなぁって。」

アキラは以前、「信仰っていうのが個人の内面の問題という部分」がありました。その後、「神様信じている人が集まっている教会で、他のクリスチャンと接することが、

交わりを持つということが意味がある」と思うようになりました。アキラの信仰は、個人的な信仰から共同体的信仰へと広められていったように見えます。

ハルヨやヨシヒコのように 70 歳、60 歳といった人にとっては、信仰が理性中心から経験中心へと変わってきたと言います。ハルヨは「最初はとにかく興味というか、理屈ですね。そういうのにすごく興味がありました。それと教会史とか。 ・・・ 年齢のせいもあると思うんですね。あまりしちめんどくさいことは、わずらわしいとか、そういうことになってきたと思うんですけど。 ・・・ やはりそれがすべてではないっていうこと。もっと信じて、頼って、自分の努力やなんか勉強したって、最後の救いとか得られないんだなって。だから今はただひたすら頼って、そこから振り落とされないように、神様からつまはじきされないように、ひたすら頼っていくってふうに変わってきましたね。最初の頃は、自分で努力してこの道もきわめなきゃいけないっていう思いがあったんじゃないかと思うんですね。性質としてもね。それがそうじゃないんだ、っていうことを、自分が教会に通わせてもらっているって、いくらか謙遜を覚えたんじゃないかなと思うんですよ。」

ヨシヒコも同様に、「これはむしろ年齢のせいかもしれないけれど、やっぱり、どちらかというと私は頭で考える人間だったけれども、それがだんだん年をとって、頭で整理して考えるよりも、直接的にイエス様の愛を感じるとか、そういう理屈の問題じゃなくて、信仰というものは、ある意味では理屈も必要かもしれないけれども、もっと単純なもののような気がだんだんしていますけどね。まだまだそういう意味では、私は実際的にも、経験の面からも、本当の信仰の醍醐味に達していないなと思うんですよ。」

以上見てきましたように、クリスチャンにとって、信じる対象は変わらなくても、自分の内にある信仰は生涯にわたって変化していくことがわかります。それは、さまざまな経験や教えを通して、信仰がより幅広く、深いものへ変わっているように思えます。狭い解釈の枠組みしか持っていなかった人が、いろいろな経験（特に困難な体験）をも解釈できる信仰へと変えられていったようです。また、自分の力や知恵に頼るような信仰から、神様に頼り、ゆだねていく信仰へと変わってきているように見えます。

信仰の成長

どの回答者も、自分のクリスチャン人生の特定の時期に信仰が特に成長したことを認めています。信仰の成長を大きく分類すると、時期としては、クリスチャンになっ

たばかりの頃、要因としては、困難な経験と主要な人生経験が共通するものとして見られます。

クリスチャンになったばかりの頃

５人の回答者が、クリスチャンになってから２年から５年の間に信仰が成長したと報告しています。カズコは、クリスチャンになってからの２年間が一番信仰が成長したと言います。「その時は、非常にいろいろな本、いろいろな伝道者の本を読んで、気持ちも燃え、いろいろな知識が頭の中に入っていく。ああこういうすばらしい人がいたんだっていうことが、私の気持ちを奮い立たせますよね。そういう時期でした。いろんな人に会うと、目新しい影響とか与えられることが大きいわけですよ。今までの人生に比べてずっとね。交わりとかそういうことでね。」

マサコは、信仰が成長した２つの時期があります。一つは、クリスチャンになってから五年間くらいの時期です。彼女は短大生の時に信仰を持ち、短大の２年間と卒業後、中学校の教員をしていた３年間は、自分の時間が持て、キリスト教の本をたくさん読んで、知的に成長しました。中学校の教員になりたての頃、神の愛を深く知る経験をしました。「教員というのは、子供たちいますよね。教師と生徒の関係で。私がいくらこういうことだよ、ああいうことだよと教えても、・・・ 子供たち言うこと聞かないわけですよね。それから、いくら私があれ（努力）しても、反抗する子もいろいろいるわけでしょ。 ・・・ その時に、こんなに私が子供たちのこと思っているのに、この子たちはわかってくれない、わからない。そして、子供たちのためになることを言っているのに、ところがわからないでいるでしょ。そういう時に、神が人間に対する思い、愛、それを知ったんです。それよりももっと高い、純真、一人子をたもうほどに世を愛された。それによって成長させられましたね。」

マサコの信仰が成長した第二期は、出産して子育てをしている時期でした。「イエス様があなたを愛したように、隣人を愛しなさい。子供ももちろん愛しなさいということで、それを実践するということで。自分の信仰が成長しなければ愛せないでしょ。そうするとなおさら、神様から愛をいただかなくちゃならないという。」

ケンジは、自分の信仰が洗礼を受けてから５年間に特に成長したと感じています。それには四つの要因があったと言います。第一に、青年会の会長に選ばれたことです。「責任ある立場にいると、他の人から見られることも多いですし、自分の信仰生活というものも、しっかりしていないと青年の人たちを導いていけないですから。」第二に、教会学校の教師になったことです。子供たちの教えるために、聖書の内容を「かみくだいて自分のものにしていかなければいけませんから、 ・・・ いろいろ苦心した

り、考えたりすることがありまして、それもプラスになったと思います。」第三に、クオ・ヴァディスを読んだことです。この本の最後の場面で、牢獄に入れられているクリスチャンたちが死を目前にしても賛美をしている。「先が読めなくなったんですよね。実際問題として自分に起こったらどうなるんだろうと考えて。それでハッとして、お祈りしたんですね。その時に、今でも覚えているんですが、神様の声をまじかに聞いて、すごいスピリチャルな経験があったんですけど。」第四に、「み心を知り、み心に従う」という聖書研究のテキストを読んだことです。「み心っていうものを、自分なりに解釈していた部分が（あったのですが)、本当に神様がどういうふうに教えられているかということを、客観的にわかるようになっていった。自分はこれがみ心だと思っていたことが、そうではなくて、神様が自分にこうしてほしいがみ心だとわかるようになった。」

マサオはクリスチャンになってから２年間ほど、説教の要約を毎週書いていました。「あれはただ牧師先生の言葉を縮めるというのではなくて、どういうことが言いたいのだろうということがわからないと、牧師先生の言葉の内側に入ってみないと、こういうことが言いたいんだということがわからないと、梗概があの少ない字数の中に入らないんですよ。あれは本当に２年間くらい、苦しみの連続でした。　・・・　なぜこういうふうな考えになったのかと、牧師先生の心の内まで考えるようになる。」マサオにとっては、洗礼を受けてすぐに、教会の 20 年誌の編集をしたことも信仰の成長になりました。「教会の小さい時代から苦労した人の話を聞いて、編集して、あれやって初めて、自分の教会になったんですね。あれやるまでは、教会でお客さんだった。やっぱり何にしてもお客さんじゃぁだめじゃないですかね。お客さんでは、信仰も及び腰で、信仰がしっかりしない。」

タケシは、自分の信仰が特に二つの時期に成長したと語っています。最初の時期は、彼がクリスチャンになってからの３年間でした。タケシはアメリカで留学中にクリスチャンになりました。「留学の時に、み言葉を一週間に二つ覚えさせられた。　・・・　それをメディテイト（瞑想）するわけですよ。覚えながら。そしてそれを実際の生活に当てはめていく訓練です。み言葉を実行していく。　・・・　その通りに生きると生活も祝福されて、成績まで上がってきたんですよ。それはびっくりしました。それはみ言葉の力でしょうね。み言葉が働いて。そうすると第一にするものを第一にして、無駄がなくなってくるんですよ、生活の中で。今度は主が喜ばれることを、少しづつやっていくわけですよ。それも成長につながるし、神様に喜ばれないことが少しづつなくなってくるわけでしょ。」このようにタケシは聖書の言葉を覚え、実行する中で、神の力を経験していきました。

また、当時タケシは、留学生担当のクリスチャンのスピリチュアルリーダーと週に一度会っていました。その人がタケシを弟子訓練してくれました。聖書の言葉を本当に覚えているか、本当に実行しているか毎回テストされました。「集りがあると、いっしょにくっついて行って、その先生がやっていることを見たり、お手伝いしたり、徐々に奉仕していくわけですよ。その人の生活を見ながら、実際に寝泊まりしながら、聖書を勉強したり、トータルな意味で自分に影響力を与えていくわけですよ。」

タケシの信仰が成長した第二期は、アメリカの大学を卒業して日本に帰国した時期です。これには大きく三つの要因があったとタケシは考えています。第一は、教会学校の教師をしたことです。「教えるのは恵みですよ。み言葉、本気になって読むでしょ。祈って。そして、それを祝福があるように、生徒に伝えていかなければならない。人が神様からの祝福があるような導きをしてあげたいなと。」第二は、献金です。「与えられたものの十分の一以上ささげるということは、自分の過去の信仰生活見てきて、神様、経済的にも本当に祝福してくれるんだなと思いました。あってもなくてもそれだけささげちゃうとね、必要のとこで仕事が与えられるんですよ。不思議と。自分のために先に使うとろくなことないんですよ。これは本当に不思議な、口では言い表せないですけど、実際にそうなんですよ。」第三の要因は、礼拝を守ることです。「神を礼拝することは、一番大事なことですから。奉仕する以上に。 ・・・ 自分の信仰生活守っていく上で、なんらかの形で、常にみ言葉に触れるということと、神の側に立って考えるという訓練をしていかないといけないわけでしょ。でないと、世的に流されてしまいますからね。」

困難

ユウコとハルヨは、困難を通して信仰が成長しました。ユウコはアメリカでクリスチャンになり、そこに５年間滞在しました。「日本に帰ってから、本当に気分的にどん底みたいな、逆カルチャーショックを受けた時に、そして日本が受け入れられなくて、日本人の友達も私が激情しちゃってるから、何となく寄り付かなくなってきた。そういう状況になって、どん底みたいに感じた時に成長しました。 ・・・ 今までの自分は何だったのか。あれだけ神様賛美して、素晴らしいって言っていた人間が、コロッてひっくり返って、そんなもの全部捨ててしまったような生活をしているわけでしょ。なんかすごくショックで、『あっ、これが私なんだ』って。」今までクワイヤーの指揮をやってはなばなしく、CS（教会学校）の教師をやったり、家庭でバイブルスタディーを開いたり、すごく『あの人は信仰深い人ね』みたいに、まわりから見られていた。そういう自分が自分ではなかった。本当に困難な時になったら、祈ることも忘

れちゃうような、そして友達もいやがって足が遠のいちゃうような、そのようないやな人間。『これが本当だったんだな』っていう認識。普通のつまらない人間だったんだなっていうか、自分では何もできないんだなっていう感じですよね。私自身だって自分では変えることができない。これを全部聖霊にゆだねて『変えてください』って言った時に初めて、自分の変えられていくことができるっていう体験。」このように、ユウコは困難を経験して、自分でも気づかなかった自分の弱い面を見せつけられ、自分の力の限界を感じ、神様にすべてをゆだねて、変えられていくという経験をしました。

ハルヨは自分の息子が「発病した時の試練を通して、いくらか成長したかなって思います。」彼女の息子の一人が、働き過ぎから精神を病んでしまいました。そして仕事を辞めざるを得なくなり、離婚もしました。その後、ハルヨが身の回りの世話をしています。「今回のことについては、すべて神様におゆだねして、神様がなさったことなんだから、神様がなんとかしてくださるだろうと、そういうふうに思っています。 ・・・ とにかく神様にすべてをゆだねて、力を与えられて、支えていこうと思いました。」ハルヨは、この経験を通して神様にゆだね信頼していくことを深めました。

主要な人生経験

主要な人生経験が、信仰成長の機会となる場合があります。先に見たマサコの場合も、出産・子育てが信仰の成長を促しました。ミドリはキリスト教の幼稚園で保母さんになった経験が、信仰を成長させたと考えています。「毎日、子供たちと礼拝したり、保育の中で神様という存在と意識しながら生活することになった。」こうして、「毎日の生活の中で働く力、神様の力とか体験できた。」

アキラは、結婚が信仰の成長になったと語っています。彼は二つの理由を挙げています。第一に、彼の妻の信仰の影響があります。彼女は、「信仰的にしっかり」していて、「クリスチャンホームになって、それでクリスチャン生活が自分の中でもしっかりと、地面に足がつくというか、夫婦できちんと礼拝守るとか、一人で守っている時よりも、信仰生活が落ち着いてくる。」第二に、教会生活に幅ができたことです。今までは独身でしたから、青年会の何人かと交わりがあるだけでした。しかし、結婚したことで、信仰が内面だけに留まらず、「いろんな教会に来ている人を家に招待するとか、そういう具体的な交流、 ・・・ そういうクリスチャン生活が成長しているのかもしれない。」これは、アキラが信仰の変化の認識のところで述べていたように、個人的な信仰から共同体的信仰への変化に結婚が大きく影響していることを示しています。

ヨシヒコは仕事を辞めたことが、信仰の成長に結びついたと言います。彼は 44 歳で

洗礼を受け、それから「55 歳の時まで、会社にいたけれども、やっぱり生活の主体がビジネスなんですね。」その会社を辞めた後、神学校へ入学しました。この決断によって、信仰が成長しました。それ以降はキリスト教関係の仕事をしています。「一つのふんぎりをしたということは、拠り所がね。 ・・・ かっこよく言えば、神様にゆだねるウエイトがその後は大きくなった。ゆだねざるを得なくなったというか。」

以上を見てきて、いくつかの共通した要因が信仰の成長につながっていることがわかります。信仰書を読んでキリスト教の知識を得ること、聖書を深く学ぶこと、他のクリスチャンとの交わり、奉仕を通して責任ある立場に置かれたり、牧師や教会のことをよく知ること、神の視点から物事を見る機会が与えられること、困難を通して神様にゆだね、頼らざるを得ない状況に置かれたこと、神の力を経験したりする霊的経験などです。

信仰の落ち込み

７名の回答者が、信仰が落ち込んだ時期がなかったと報告しています。しかし、そのうちの３名はしばしば落ち込みを感じていると言っています。ミドリは「しょっちゅう落ち込んで」、被害妄想的になったりすると言います。タケシも人とぶつかった時に、「しょっちゅう落ち込む時」があると言っています。ヨシヒコは、現在、奉仕している組織の将来のことを心配すると、毎日のように落ち込むと言っています。しかし、以上の３人に共通しているのは、信仰のこまかな浮き沈みはあっても、大きく落ち込んだ時期がないということです。

４人の男性と１人の女性が、信仰が落ち込んだ時期があったと報告しています。マサオは、50 代の時、あまりに仕事が忙しくて信仰が落ち込みました。「忙しいとそれだけ信仰のこと考えたり、聖書読んだりということがどうしてもおろそかになる。疲れてくると、どうしてもそうなりますからね。あまりに忙しいのは、心を亡ぼすと書くのは、そのとおりだろうと思います。」

アキラは大学院生の時、指導教授を変えたことに伴って東京へ引っ越しました。その時、以前の人間関係がほとんどすべてなくなりました。その時、「精神的、肉体的に疲れて、教会に行かなくなって、行かないことがすぐに何か自分たちに影響が出てくるという問題ではなかったこともあって、信仰が内面的なものだと思っていたために、結局、教会に行っても行かなくても同じじゃないかとなってしまった。落ち込む原因としては、信仰の取り上げ方にも問題があったのかもしれない。（教会に行かなくなったら）だんだん聖書を見る機会も減って、信仰のことを考える時間も減った。」

「目印となる出来事」のところで述べたように、ケンジは２度、仕事を解雇されました。それで、何をしたらよいのかわからなくなっていました。同時に、親友がキリスト教から離れてしまい「とても信じてなどいられなくなった。」その時、「信じていたことが、裏切られたっていうふうに思った。直接的に神様が悪いんじゃないんですけど、やっぱり幼い時のイメージだと思うんですけど、悪いことがあると神の責任に転嫁していたということがまたでてきちゃった。じゃぁ、もう信じていても仕方がないって思って、離れてしまった。」

ハルヨについても、「目印となる出来事」のところで述べたように、彼女が 59 歳の時、夫が心臓発作で突然、亡くなりました。「突然だったということが、私にとって一番ショックだったような気がするんですね。 ・・・ 自分じゃなくて大切な家族にそういった災難が加わったということは、非常に納得いかなかったんですね。・・・私ならクリスチャンだから、神様と関係あるんだから、私ならいいけど、なぜ主人なのかっていることが納得できない。なんとなく理不尽な仕打ちをされたというかそういう感じでした。自分が被害者の意識でね。とにかく突然だったのと、母がそのあくる日に亡くなったんですよ。忙しくて、教会どころじゃなかったということもありましたね。そんな大変な思いをなぜしなくてはいけないのかって思いました。もう教会へ行くのはよそうと思いました。」

ヒロシは、教会の役員をしていた時に信仰が落ち込んだと言います。役員会の中で、「他の教会のこととか、聞こえてきます。そうすると、キリストの体の教会の意味とは別に、社会的組織としての教会のあり方が、なんか企業以上に企業っぽい、割と欲の出ている。（教会は）それがあからさまに出る社会なのかなぁって。 ・・・ あっちでは分裂しちゃった、解散しちゃったとか、出て行った人がいるとか、そういう話しを聞いたりとか、教団への負担金を調整しているとか、いろいろ聞いたりして、こういうのってイエス様だったらどうするんだろうって、この場でそういう問題をかかえたらどうするんだろうって。はっきり言って、醜いと思いました。」このようにヒロシは、自分がクリスチャンに対して持っていたイメージが間違っていたのかと思いました。役員会で出される意見の背後にある価値観が、本当にキリスト教的価値観であるのだろうかという疑問を感じました。その結果、「教会に行くの止めようとは思いませんでした。ただまあ、一歩退いてというか、そういう事を決める場にはなるべく参加しないようにしといて、ひとまず。もう少し、本当の交わりをしたいなぁって。」そうして、役員を続けてすることを辞退しました。

以上見てきましたように、マサオとアキラは、心身共に疲れていた時に信仰が落ち込みました。ケンジとハルヨは、困難に出会った時に信仰が落ち込みました。彼らは、

なぜ神がこのようなことを自分に与えたのかと不信感を持ちました。また、アキラとケンジは、信仰の交わりから離れた時に、信仰が落ち込みました。ヒロシは、教会の世俗的な側面を見た時に信仰が落ち込みました。

人間的影響（積極的）

12 名の回答者中、11 名が信仰に積極的な影響を与えた人がいると報告しています。信仰に積極的な影響を与えた人は、大きく以下の４つに分類できます : 牧師、宣教師、家族、クリスチャンの友人。

牧師

８名が、自分の信仰に牧師や伝道師が積極的な影響を与えたと述べています。積極的な影響を与えた人の中では、牧師がもっとも影響力が強かったようです。エミの牧師は、彼女の就職の紹介をしてくれました。それを機に、彼女は牧師といろいろ話せるようになりました。「この頃はしょっちゅう泣きながら相談していました。仕事辞めたかったのに、なにか神様が忍耐じゃないですけれども、なにか計画があるんだから、そういう中でもあまりまわりに影響されないで、神様見上げて。仕事は子供に対してのものだから、その子供に対して一生懸命やっていけばがんばれるんじゃないのとか。」このように、その牧師はエミにアドヴァイスをしてくれて、祈ってくれました。

アキラが教会の礼拝に出席し始める前に、その教会の牧師はガンの一度目の手術を受けていました。しばらくは小康状態でしたが、そのガンが再発しました。アキラは、その牧師が会堂でした最後のメッセージの時に洗礼を受けました。「牧師は、信仰者はどうあるものなのかを実際の姿で（示してくれました）。 ・・・ 信仰者ということで、すごく強い影響があったと思います。信仰者として、一つの信仰を全うした人ということで。」

ミドリは、教会の幼稚園の先生になりました。そこでは毎日、牧師たちとの交流の機会がありました。「ここ（教会の幼稚園）に来ているそのことが、成長につながった。 ・・・ いろいろアドヴァイスももらっていたし、先生たちの働きを見て、真剣に神様の言葉に従っている。その働きを見て、すごく影響を受けた。」

タケシも牧師の影響を大きく受けてきました。「やっぱり、牧師だから、神様に召された人だから、困った時とかあるとなんでも相談できますでしょ。そして、自分の信仰状態だって見ているわけですから、牧師はね。上がり下がりもね。それが大事な決定をしなければならない時は、そこに行って聞いて。神がなんと言っているかなとい

うことを決定する場合は、牧師を通して、祈って、聖書を読んで、それから行動するようになりました。」

マサオは、前任者の牧師（A 師）と現在の牧師（B 師）を大変尊敬しています。マサオはA師に出会った時、「こんな偉い人、会ったことないと思いました。・・・ キリスト教に関することは全部、A 先生ですね。信仰とは何かをいうことは全部、先生から教わったし。・・・ 人物的にも（そうですが）、信仰がすごいですよね。・・・ あの先生のメッセージを聞いていますと、福音の力っていうんですか、非常に力強さを感じますね。」

マサオはまた、現在の牧師であるB師をも尊敬しています。マサオは、B師からいろいろなことを頼まれましたが、それらは最初はできるわけがないと思われるようなことでした。「ところが、やってみるとそれがものすごく成功したりするんです。そういうことで何度もびっくりさせられてますからね。この頃は、B 師にはきわめて忠実に素直に従おうと思っている。 ・・・ 本当に不思議な先生ですよ。」マサオはいくつもの奉仕を通して、「自分は用いられているんだという」充実感を味わいました。

特に若い世代には、伝道師も影響を与えています。カズコは教会初めて訪れた時、そこの伝道師に会いました。「この方が、祈祷会の後、ニコニコ話しかけてくれて、今までに会った人にはないものを持っている人でした。本当にニコニコしている。そのニコニコが私が今まで付き合ってきた人とは違うものを持っていた。非常にひかれました。」その後、カズコは何度もこの伝道師に会いに行きました。「この先生の影響はすごく大きかったんです。人柄にひかれたんです。その人が持っている信仰だったんでしょうね。きっとね。普通の人とは違うという感じがすごくしたんですね。」

ケンジが一番落ち込んで、教会に行かないでいた時に、伝道師はもっとも助けになりました。「先生自身は積極的には話さない人なんですけど、話を聞いてあげるといいますか、受け入れ方といいますか。 ・・・ 自分にとって、本当に落ち着きがなかった時期だったので、平安といいますか、そういったものをくれたし。」

宣教師

宣教師が自分の信仰に積極的な影響を与えたとした人は、３名いました。タケシはすでに見たように、アメリカでクリスチャンになった時、留学生担当の宣教師が彼の霊的リーダーとなり、彼を訓練して信仰の成長を導いてくれました。

ハルヨは、M 宣教師を尊敬しています。「M 先生も非常に熱心で、私の信仰のために熱心に祈ってくださいました。受洗する前なんかしつこいほどいらしてくださって。とても喜んでくださって、M 先生も、洗礼受ける決心した時は。立派な先生でし

た。 ・・・ 中国人とベトナム人のお子さんを養子にしていました。ご自分のお子さんの他に。そういう生活とか、すごく日本人にはできない、いいところ持ってるなぁと思いました。尊敬してました。」

ヨシヒコは、H 宣教師との「個人的な人格の交わりの中で、影響というか、非常に感銘を受け」ました。H 宣教師は、英語バイブルクラスの先生でした。「あの方からクリスチャンの生活の仕方というか、人との接し方というか。根っこからのクリスチャンというか。人格的に非常に強いあれを受けたんですよ。 ・・・ 個人的に尊敬できる人。ちょっと口では言えないですが、人間と人間との交わりだから、たぶんイエス様との交わりもそうだと思うんですよ。そこは口では言いにくくて、ある期間なり、ある時期そういう方に接している中で。すごい喜びに満ちた人なんですよ。いつもニコニコして、言っていることもすべてベースに喜びがあるんですよ。そういう意味ですばらしいと感じますよね。」

家族

家族も、信仰に積極的な影響を与えています。すでに見たように、アキラの信仰は、妻から積極的な影響を受けています。妻のしっかりした信仰のおかげで、しっかりした信仰生活を送ることができていると感謝しています。

カズコにとって、「私に信仰の面でも何でも与える影響が強いのは、主人なんですね。（カズコより）後から洗礼を受けたのですが、主人はもともとクリスチャンホームに育っていますから、生まれた時から神様がいる世界に育っていますから、やっぱり違うんですね。 ・・・ やっぱり主人の持っている信仰っていうのは、尊敬する信仰ですね。私らがわからないこと本当に、頭で考えた信仰ではなくて、体の中にしみついている信仰がありますからね。だから、そういうものが私にだんだん与えた影響って大きいですね。」

ミドリの夫もクリスチャンホームの出身です。「クリスチャンホームで育った主人と私は、やっぱり違うんですよね。培われたものがすごいんですよね。いくら私がここでがんばっても、燃えてても、やっぱり培われた信仰ってすごいなって。み言葉に忠実っていうか、すごく大事にしているし。私は信じたけれども、ディボーションしないでしまう時もあるし、なかなか習慣にするのは難しいんですけど、主人はスッーと入っていってるようでうらやましいっていう半面と、尊敬しています。 ・・・ 自分も影響されたいという思いはすごくある。」

エミには５歳年上のお姉さんがいます。お姉さんはいつもエミの前を歩いてきてくれました。エミが５歳の時、教会の日曜学校に行き始めたのも、お姉さんが誘ってく

れたからでした。お姉さんが洗礼を受けた時も、エミは自分もいつかクリスチャンになると思いました。エミが高校３年で「教会に行き始めてからの方が、姉の影響は大きくて、何でも姉に相談して。やっぱり土台が神様だと、相談しても話していくうちに解決法が違いますよね。すごく真剣に考えてくれて。やっぱり最後にいっしょに祈れるということは、一番心強いですね。」

クリスチャンの友人

さまざまなクリスチャンの友人たちが、信仰に積極的な影響を与えてきています。エミは就職した後、夏ごとにクリスチャンキャンプに参加しました。そこで何人もの友人ができました。前にも見ましたように、この友人たちが、エミにクリスチャンとしての生き方を教えてくれました。その友人たちは、エミの結婚に関しても祈り、アドヴァイスをしてくれました。

ミドリは、教会の人たちとの人間関係をとても喜んでいます。「同じ社会人として働いている人たち、青年会の人たちが祈ってくれて、その中で、自分よりも長い生活をしている人たちからアドヴァイスを聞けたりとか。神様の家族になったのが、すごくうれしかった。」

ハルヨは、教会内に自分が見習いたいと思う人がいます。「I さんを尊敬していましたし、あの方がずっとクリスチャンでいらして、そういう日常を見ていて、私もああなりたいと思った。K さんや S さんたちの信仰生活見ていると、非常にほがらかでしょ。明るいでしょ。ああいうクリスチャンはいいなあと思うんです。私、じめじめしたのがだめですから。明るくて、活発にクリスチャンを生きてるっていうか、生活をエンジョイしている、そういう方たち。」

ヒロシは、教会内の一組の夫婦の影響を強く受けています。「そのご夫婦とけっこう親しくさせてもらって、旅行とかいっしょに行ってたんですよ。いっしょに川辺で祈ったりする生活をいっしょにさせてもらって。それまでは、祈りは教会でやるもの、自分の家で食事の時にやるものというくらいにしか思っていなかったんですけど、その二人を見ていて、お祈りというのはこういうことなのかなあと。出かける前にも着いてからも、遊んでいる途中でも祈るんですよね。『ああ、すばらしいなあ』と思って。それだけ感謝の気持ちを持って、神様を考えているんだなあと思いました。それがかなり影響を受けましたね。」

タケシは現在、大学で教えています。彼は、教会内で同じ職業に就いている２人の教授を尊敬しています。「学者として立派なクリスチャン生活しているでしょ。クリスチャンで学者としても一流の人たちがまわりにいてくれると非常に刺激になって、い

い意味で励みになります。尊敬もできるしね。」

ヨシヒコは、クリスチャンの国際的援助機関の事務所で働いています。その機関で働いている一人の看護婦さんを、特に尊敬していると言っています。「看護婦だったんで、行かせてほしいということで、ひどい状況の中で、何度も命の危険にさらされながらやってきたんですよ。 ・・・ 根っからの信仰者というか。それはまさにソマリアとかルワンダの危機的な限界状況の中でいかされて、すばらしい証しをしていらしてね。彼女は年に一回か二回、日本に帰ってきて、必ず私の家に泊めるんだけど。非常に彼女といるとクリスチャンとして恥ずかしくなるような、本当にしっかりした信仰を持って、神様にゆだねちゃっているという意味では、私は尊敬しています。」

ユウコの信仰は、四人のアメリカ人の友人から積極的な影響を受けました。ユウコが、夫の転勤に伴ってシカゴに行った時、向いに住んでいたのがカソリック信者の C さんでした。彼女はユウコに大変親切にしてくれて、「本当に自分のできることをして、人を助けようとする性格」の人でした。また、シカゴでは日本語で聖書研究会をしていた T さんを紹介されました。T さんは、明るく、積極的で、どんな人でも受け入れるという姿勢を持っていました。そして、本当に聖書を大事にしている人でした。

ユウコがロサンジェルスに引っ越した時、そこで F さんという日本に宣教師として来ていたことのある方と知り合いました。F さんも、どんな人でも受け入れてくれる人で、「ああいうすばらしい人がいる」という強い印象をユウコに与えました。ユウコが日本に戻って来てから、聖書研究会で奉仕を始めましたが、そこでの責任者が B さんでした。B さんは、「すべてのことに、まず神が第一にある。 ・・・ 自分ですごく忙しい生活していて、レクチャーのためにすごく時間を割いているにもかかわらず、リーダーとかクラスに来ている生徒みんなをケアしていく。その働きのすばらしさ。それも一つの大きなイメージで。小さいことで動揺しないんです。何かハプニングが起こった時も、ふっとさがって「あっ、大丈夫よ」とか、「こうすればいい」とか。とにかく、祈って前進していくことだけを考えている。後退しないんです。 ・・・ 前へ前へっていう。みんなをケアしながら、共に育っていこうっていう姿勢がすごく見えてて。」

要約

ほとんどすべての回答者が、信仰に積極的な影響を与えた人がいると報告しています。信仰に積極的な影響を与えた人は、牧師、宣教師、家族、クリスチャンの友人とう大きく 4 つに分けられます。この中でも特に牧師の影響が強く見られます。大きな影響を与えた人たちは、回答者と長い時間を共に過し、親密な交わりを持っています。

信仰に積極的な影響を与えた人たちは、モデル(模範)と相談役という２つの機能を果たしたように考えられます。彼らは、信仰生活の模範を示し、回答者たちに「この人のようになりたい」という思いを起こさせ、人を受け入れ、アドヴァイスを与えています。

人間的影響（否定的）

３名の回答者が、自分の信仰に否定的な影響を与えた人がいたと報告しています。アキラの両親は、「今だにそうですけど、信仰には反対しているし、特に妻と結婚する時はすごく（反対しました)。信仰の面でも反対はありましたけど、今の日本の社会だと、キリスト教なんかを信じているのは、人生の上で、人の付き合いとして、葬式に行って焼香もあげないのなら、付き合いができないと。」

ケンジの場合は、親友がキリスト教から離れたことが否定的に影響しました。ケンジから見ると、その親友は、当時の教会の伝道師に「イエス様以上にべったりで、カトリックでいうとマリヤ崇拝みたいなものだと思うんですけど、その先生の意見に従ってやっていくみたいな部分が結構強かったらしいですね。 ・・・ それで、その先生が伝道師を辞めて、教会に遣わされて行くという時期になって、 ・・・ 信仰がゆがんできたらしいんですね。本当のことはわからないんですが、一応救われたのに、離れて行ったということが、自分の中でも影響が残っていまして、それにどう対処していったらよいのかっていうことで、苦闘、自分の中でも葛藤がありました。 ・・・ そういったことが、自分が一番友情感じている人に起こったので、なんでこんなこと神様するんだろうっていうような疑問がわいてきて、その頃、退職したりとか、結構そういったことが重なって、何かとても信じていられなくなった。一年ほど教会を離れていた。もう何にも考えたくないっていうことがありました。」

エミはキリスト教の幼稚園の先生をしていました。そこの園長が先生たちに、「『自分の行っている教会は幼稚園の土台になるものだから、おりがあったら来るように』と言っていて、特別な集会には何回か行ったことあるんですけど、 ・・・ その後、なにかの時に行かなかったりしたら、園長先生の態度が違うんですね。」このことはエミにとって、悩みの種でした。「園長先生が強制的に（自分の教会に）来てと言われた時に、神様に対して、どうしてそんなことまで、園長が強制するような状況にするんだろうかっていう思いがあって。私は一生懸命、神様にくっついているつもりだし、どうしてそういう状況にするんですか、みたいな。それで落ち込んだといえるんだか、わからないんですけど、なんかもやもやしたものがありました。」

この経験は、しばらくの間、エミの信仰のブレーキになりましたが、長い目で振り返ってみると、結局、訓練として自分の信仰にプラスになったと言います。「最初は園長のためにも祈れなかったのが、祈れるようになったりとか、そういうのがあります。」

以上見ましたように、ケンジとエミの場合は、なぜ神がこのようなことを起こしたのかという疑問を持ち、信仰が弱まりました。しかしながら、エミの場合は、長期的にはこの経験を自分の信仰の成長になる訓練として、積極的にとらえることができるようになっています。

教会活動

すべての回答者が、自分の信仰を成長させた教会の活動やプログラムを挙げています。これらの教会活動やプログラムは、大きく、以下の４つに分けられます：メッセージ、スモールグループ、奉仕、その他。

メッセージ

メッセージを聞くことは、信仰の成長にとって不可欠なように思われます。ハルヨは静かな礼拝が好きです。「やはりその時が、一番集中して聖書のお話し聞いて、神様と向かい合って、自分の心を探ってみるというか、そういう時間というのが、やはり私にとって大切なんですね。」

カズコは、伝道集会とか修養会のメッセージが信仰の成長につながったと言います。「『ああ、この集会に出てよかったなあ、やっぱり来てよかったなあ』っていうものを与えてくれた。私を勇気づけるもの、奮い立たせるものがあるんでしょうね。基本的な点に立ち返るという点かな。　・・・　信仰の原点に立ち返るようなメッセージですね。そういう単純なメッセージ。」

アキラにとっては、毎週のメッセージも伝道集会のメッセージも信仰の成長につながると言います。「自分で聖書を読むだけでは、本当にその箇所が言っている意味を充分に理解していないということで、ここはこういう意味なんだとメッセージを通して示してくれる。それは、聖書の理解とか信仰の理解が進む。」

ヨシヒコは、牧師のメッセージだけでなく、教会の中でみ言葉が分かち合われることが、信仰を促進すると述べています。「教会で語られる神様のみ言葉というのは、ある場合には牧師さんでなくても、会員の中の交わりの話であってもいいんだけど、教会の中でみ言葉が伝えられて、み言葉を分かち合うという、それが信仰にとってすごく促進しました。　・・・　自分で聖書を読んだり、本を読んだり、祈ったりという

のは、自分の思いがそこにからんでいますから、あるいは自分の幅の中でしますから、教会での交わりの中で、相手が立派なクリスチャンであろうと、子供であろうと、・・・そういったことの中で自分が思いもかけなかった全然別なみ言葉の新しい、・・・それとちがったこういう見方もあるんだ、こういう意味が秘められているんだということがあるでしょ。・・・そういう意味で、教会という場で、交わりの中で、非常に広い幅の中でみ言葉に接することができるというのが、教会のメリットだと思っています。」

以上見ましたように、メッセージを通して、神の言葉によって心を探られ、変えられたり、自分だけでは不十分な理解を助けられたり、救われた原点に返って勇気づけられることがあります。また、神の言葉がいろいろな立場から分かち合われることによって、その豊かさを経験できます。

スモールグループ

スモールグループは、そこに参加する人たちが共同体をつくり、信仰を成長させていく上で重要な役割を果たしています。ユウコはアメリカと日本で、聖書研究会に参加しました。この会は、「自分の信仰を強めてくれたし、足らないところを示されたし、でも足らないからといって落ち込まないでもいいんだ、そこはゆだねたら主が導いてくださるっていう、必ずそこは前向きに主がなしてくださるっていう自信を教えられました。」また、ユウコはアメリカで同じ年代の日本人夫婦が集まって、いろいろな問題を考える集会にも参加していました。「同じ年代の人の連帯感、オープンになって、枠を取り払って、共に歩むみたいな、そういう明るさ。本当の意味で友達になれるみたいなところがあったと思います。そういう人たちとは、何でも話せるから支えられる。」

マサコは、教会学校の英語科に参加することによって、信仰が成長しました。「その学びから教えられて成長させられますね。視点の違い。一つのみ言葉に対してとか、考え方に対して、日本人の持つ考え方じゃなくて、・・・ちょっと視点が違いますよね。それから、日本語の聖書と英語の聖書を読んでいると、ちょっと違う。両方で読んでいると、そのみ言葉に対しても、ニュアンスが違いますよね。そうするとより深い状態がわかる。」

マサオにとっては、日曜日の夕方に持たれた勉強会がよかったと言います。「あれはずいぶん、自分で勉強をするという気風をつくるのによかった。人数が少ないですから、発表する順番が回ってきますしね。」

以上、見てきたように、スモールグループは個人が受け身ではなく、積極的に参加

できる場を与えてくれていること、別の視点を与えられること、何でもオープンに分かち合えることなどが、信仰の成長に役立ったように思われます。

奉仕

多くの人が、奉仕を通して神や人に仕えることによって信仰が成長したと述べています。前にも見たように、ケンジやタケシは教会学校の教師になり、教えるために聖書を一生懸命読んだことが信仰の成長につながったと言います。

エミも、日曜学校の教師としての経験がプラスになりました。「いろいろ聖書を学べるようになったってことと、話したりとかする中で、特に分級とかっていうのは私は自分の証しを交えて、自分の証しの方が子供がわかりやすいかなと思って、そういう話しとかして。そういうのを意識して考えることによって、そういう自分の神様との生活を意識して振り返れる。そういう機会でもなければ、あんまり子供に日々神様を感じながら喜んでっていう、ちょっとした小さいことでも神様がっていうのを、子供たちに言っておきながら、自分でも体験していないとそれが伝わりませんよね。初めは、そういうのを伝えるために意識的にやっていたことが、あっそうなんだってことが感じられるようになった。意識していなかったことが、一つ一つ神様との生活なんだなっていうことが感じられるように訓練されてきた。」

ユウコは、アメリカの教会で聖歌隊の指揮者をしました。「まかされてみて、自分の信仰足らないけど、やらせてもらっているっていう感じとか、自分が落ち込んでいる時でも、自分がだめだと思った時でも、メンバーの方がしっかりしていて自分を支えてくれたとか。そういう経験をすることができて、いい経験ができたなって思いました。」

ミドリにとっては、奏楽の奉仕が信仰を促進しました。「奏楽の奉仕を通して、一瞬にささげる消え去ってしまうものっていうか。本当に霊的戦いっていうか。自分の内ですごい葛藤しちゃうんですね。自分で弾いてて。」ミドリは他の奏楽者と比べて、自分に技術がなく、奏楽の最中にも逃げ出したくなることがあると言います。「それをなんかの方法で乗り越えられたらいいなあと思うんだけど、そのプロセスで働く自分の葛藤とかが、自分をすごく見つめ直す機会で、自分の肉の思いとか、すごく反省させられるし、だからプラスになっていると思う。」

タケシは、礼拝に関する奉仕部の責任者をしています。「受付、案内なんか、新しく来た人への配慮しながら、自分が謙虚になって仕えていくわけでしょ。色めがねで見ないでね。高学歴で社会的地位の高い人であろうが、なんであろうが、そこで判断するわけにいかんですからね。ちゃんとみんなを受け入れるという姿勢がね。ちゃんと

10 時に行って、祈ってね。責任ある仕事が与えられれば与えられるほど、やっぱり重要ですよね。 ・・・ そういう意味で大きいですよね。責任も持つし、証し人として生きなくてはいけないなと思うとね。」

マサコは、いろいろな行事の準備を手伝うことによる祝福を述べています。「修養会があったり、ティータイムがあったり、特別な催しがありますよね。あれの準備などにかかわった時はすごく大変ですよね。だけれども、その恵みはありますね。奉仕をすることによって、神様が恵んでくださる。奉仕したことが喜びになって、しただけのことは喜びになって戻ってくる。たとえば、多くの人が来てくれた喜び、その中で救われる人がいれば喜びになりますよね。自分じゃなくて、神様が与えられた祝福ですからね。」

以上見てきましたように、奉仕には信仰を促進する実にさまざまな要素が含まれています。聖書を深く知ること。日常の経験を神様との関わりでとらえること。互いに支え合う共同体の経験。自分の内面を見詰め直す機会を与えてくれること。与えられた責任を果たすこと。奉仕の喜びと祝福など。どれも信仰の成長のために、大切なことばかりです。

その他の教会活動

先に見ましたように、エミは毎年の夏にクリスチャンキャンプに参加して、それが信仰の成長につながりました。アキラは、週に一度の祈祷会も信仰を成長させたと言います。「教会が一致して祈る。それは、実際に信仰が個人的じゃなくて、教会として一致して祈るという面で。他の人の信仰の姿を見ることによって、自分の信仰を改めて、本当にこれでいいのかどうかということを感じさせられる。」

ヒロシは、年に一度の修養会が信仰を促進したと言います。「日常の礼拝の時は、同じところからメッセージをもらうんですけど、そのことを分かち合うということはなかなかありませんね。」修養会においては、聖書の一部分が読まれた後、みんなで教えられたことを分かち合います。「やはり同じ聖書のみ言葉でも、全然感じ方が違うっていうか、与えられているものが違うということは、神様に救われる以前の前史ってのがけっこう、その言葉をどう受けとめるかということに影響がものすごく大きいと思うんですよね。自分では経験していないことを、経験できることになるんです。だから、10 人いれば 10 人分の経験が一個所から得られるってことですよね。それを恵みって言うんじゃないかなって思います。」

ここで挙げられたキャンプ、祈祷会、修養会に共通していることは、信仰共同体としてのすばらしさです。教会にはさまざまな人たちが集まり、それぞれの経験を分か

ち合うことによって、さらに全体が豊かにされていく姿が伺えます。

要約

信仰の成長を促す教会の活動やプログラムとしては、メッセージ、スモールグループ、奉仕、その他が報告されました。多くの場合、信仰共同体において、聖書の言葉や他の人との分かち合いを通し、自分の信仰を振り返り、クリスチャンとしての生き方を変えることによって信仰が成長しているように思われます。

教会環境

多くの回答者が、教会の家庭的雰囲気が信仰の成長にプラスになったと報告しています。エミが育った教会は、「本当にアットホームだったので、きちっきちっとしていないからよかった。学歴のことを含めて、変に背伸びをしないで、信仰を守っていかれた。」エミは、自分がありのままでいられた教会の環境を評価しています。

ユウコの出席している教会は、「すごくオープンなんです。 ・・・ ダジャレを言ってもいいし、ありのままで受け入れてもらえるっていう雰囲気がここの教会強い気がしますね。やっぱり、そういうタイプの人間でないと、教会員として、信仰持っていない人を受け入れる時にまずいよねみたいな。自然なやさしさっていうものを体験できて、格好つけない。とてもよかったと思います。ここに来るとリラックスできる。いい見本を見せてもらったみたいな。こういう雰囲気でありたいなって。」

カズコが信仰を持つ「前は、自分の言いたいことを言う前に、これを言っていいかどうかを考えなければならないような世界でしたけれども、今は自分の思っていることを素直に言ってもみんな許してくれる、許し合える気心の知れた仲間がいることが、私に力を与えていると思う。」

ケンジも教会の「雰囲気がとても自分に適している。雰囲気が暖かくて家族的な交わりが強調されていて、 ・・・」と語っています。彼が１年ほど教会から「離れていた時期から戻った時に、何となく入りにくい気分があったんですけど、それでもにんな受け入れてくれて、 ・・・ そういった環境がとても励みになりました。」

アキラは教会に来始めた頃、「青年会とか教会の雰囲気はすごく、僕自身がまだ信仰が不十分な時に、受け入れてくれたということで、そういう雰囲気がそのまま教会に出席続けられたんだと思う。」

マサオも、かつて教会が小さかった頃の雰囲気が「家族的なのがよかったと思う。どうしても、大きくなるとお互い励まし合ったりする横のつながりが薄くなっちゃ

う。」

ミドリは、教会の礼拝に多くの国の人たちが出席していることのよさを語っています。「そういう中で、韓国の人と出会ったりする中で、自分の信仰のあり方の根底に、自分でわからない人を否定するような考えがあったりとか、いろんなことを気づかせてくれた。そういう存在を受け入れる。それと関係して、神様の愛はこういうものなんだよって教えてもらっている。」

タケシも、さまざまな背景を持った人たちが集まっている雰囲気のすばらしさを、次のように言っています。「いろんな社会の人たちがいて、いろんなクリスチャンがいていいわけでしょ。そういう人と幅広くつき合えるしね。いろんなこと学べるしね。留学生にしても、外国の人たちにしてもね。ああ世界の国々の人たちで、やっぱり神様は一つなんだと思うとね。やっぱりすごいことなんだなと。そういう意味で、この教会はいいですよ。」

このように、多くの人にとって、教会の家庭的雰囲気が信仰の成長を促したと語っています。家庭的雰囲気の中で、ありのままの自分を出せて、受け入れ合えること。それによって、神の愛を体験していると思われます。

第４章　文化的特性と信仰

「日本の文化は、異教的で反キリスト教的である」と一般に言われてきました。しかしながら、本研究の結果は、多くの文化的特性が信仰の成長にとってプラスとマイナスの両面を持っていることを示しています。さらに、このプラスとマイナスの区分は不変的なものではなく、その人の受け取り方次第であるという面も見られます。

信仰にプラスの影響を与えた文化的特性

信仰に積極的な影響を与える文化的特性としては、多くのものがありました。これらを以下のように大きく４つに分類して考察します : キリスト教へと導く文化的特性、教会生活の違いを目立たせる文化的特性、信仰共同体の形成を助ける文化的特性、がんばる文化的特性。

キリスト教へと導く文化的特性

いくつかの文化的特性は、それ自体では信仰にマイナスの影響を与えます。しかし、これらの特性の中には人をキリスト教へと導く役割を果たすものがあります。この意味で、信仰の成長にプラスの影響を与えた文化的特性として分類しました。

いく人かの回答者にとっては、＜多くの宗教や神々に寛容である傾向＞が、キリスト教を受け入れる道を備えてくれました。ヨシヒコは一時期、仏教の本を大変熱心に読みました。「キリスト教の前に浄土真宗なんかの経験をふまえて、回り道だったけれども、キリスト教に達した。という意味では、いくつかの他の宗教に、その時期はそれに寛容だったけれど、結局はその宗教にもの足りないということで、キリスト教の信仰が与えられたということで、プラスでした。」

ミドリは、多くの迷信を信じる両親のもとで育ちました。しかし、「迷信とかを守らなくても悪いことは起こらないことを経験でき、」迷信が間違いであることを知ることができました。ヒロシは＜多くの宗教や神々に寛容である傾向＞と＜祖先崇拝をおこなう傾向＞が、キリスト教を「受け入れる素地を与えてくれた」と言います。

＜将来について高い不安を持つ傾向＞は、８名の回答者に神を求めたり、神への信頼を強めるように作用しました。しかし、この傾向によって信仰が弱められるという人もいます。

＜学校でも職場でも激しい競争がある傾向＞は、アキラとヨシヒコに信仰を求めるきっかけを与えました。ヨシヒコは「それに対する疑問が私の信仰のきっかけとして

は、かなり大きなウエイトを占めていました。」

教会生活の違いを目立たせる文化的特性

いくつかの文化的特性は、日常生活と教会生活の相違をきわだたせています。その結果、教会生活に魅力を感じさせることにつながりました。

先にも挙げられた＜学校でも職場でも激しい競争がある傾向＞は日常生活においてはあるのですが、教会生活には激しい競争がなく平安や思いやりを得られるため、信仰にプラスであるとヒロシとカズコは言います。

クリスチャンになって、＜建前と本音がはっきり分かれている傾向＞から解放されたことが信仰の成長につながった人たちがいます。カズコは信仰を持つ前、「うそを言わなくてはいけないというのが非常にいやだったんですね。うそをつかなくてはならない時があるんですよ。他の人から強いられてね。でもクリスチャンになったら、うそ言わなくてもいいというのがうれしかった。」ヒロシも「信仰を与えられて、そういった体面をつくろってしのいできたこと」を、止めることができてよかったと言います。

信仰共同体の形成を助ける文化的特性

エミは、＜自分が所属する集団への一致を強調する傾向＞が、「教会員みんなが神様の前に集って礼拝をささげる」ためにプラスであると言います。タケシは、こういった傾向があれば、集団のよい価値観がメンバー一人一人によい影響を与えると考えます。

＜権威があったり、自分よりも地位の高い人に従いやすい傾向＞は、信仰にプラスに働くと五名が答えています。神の権威を認めて、他の人たちを尊重するようになれば、信仰が成長すると考えます。ミドリは、この傾向があったから、神に従いやすかったと言います。エミはこの傾向のおかげで、他の人から信仰のアドヴァイスを喜んで聞けました。マサコは、「その牧師のメッセージは、神様の代弁者として、語ったことに対しては、従わない以上、信仰的にプラスにならない」と信じて、牧師の権威を認め、メッセージに従って、信仰の糧になってきました。

＜他人の感情と意見をよく考慮してから発言したり行動したりする傾向＞は、他の人の意見をよく聞くことでプラスに働くと考えられます。エミは、この傾向がプラスに働いて、自分の考えだけで行動せず、相手の意見をよく聞くことができると言います。「神様からの意見は人を通してということ」があるので、人の意見を聞くことは大切であると考えています。ケンジも、「自分でいろんなことを思いあぐねて悩んでいる

よりも、他の人とよく話し合ったりすることが何かの解決になることが多いと思います。」

半数以上の人が、＜他人の期待に敏感であり、その期待に応えようとする傾向＞が、プラスに働いたと答えています。エミは祈ってくださいと頼まれた時に、その人のために真剣に祈ってきました。ケンジは、「他人は自分の信仰のバロメーターだと思うので、それに応えたいという気は大きかったですし、それに前向きに対処していったと思う」と答えています。ヒロシは、家族や教会の人たちの期待に応えようとすることが、励ましになってきました。ユウコは、聖歌隊の指揮者をしていた時に、メンバーからの期待をすごく敏感に感じ、その期待に応えようと努力したことが、信仰の成長につながりました。

がんばる文化的特性

がんばる傾向が信仰の成長にプラスであると、多くの人が答えています。タケシは、「いい仕事したいと思うことと、それが証しになっていきますからね」と言います。マサコは、「極限に置かれたりした時は、祈るということによって、なお神様の導きがある。自分の力を超えた神の力を体験できる。それから、人間の限界も知った」と語っています。ユウコは聖書研究会の奉仕をして、「すごく大変だったんですね。これだけはと思ってがんばったんです。結局、それが自分を助けてくれて。だからがんばることの中に自分を支えてきたんじゃなくて、がんばった結果、いいものにいつまでも食いついていけたので、信仰が強められた。」マサオは、仕事が大変忙しくて、疲れていた時でも、がんばって教会を休みませんでした。ハルヨは、よいクリスチャンになろうと努力し、ケンジは「努力していないと、自分の信仰が成長していかないと思う」と語っています。

信仰にマイナスの影響を与えた文化的特性

信仰にマイナスの影響を与えてきた文化的特性としては、以下のものが挙げられました：集団への一致を強調する文化的特性、他人の態度を気にする文化的特性、多神教・祖先崇拝の文化的特性、日本の教育が機械的暗記を強調している文化的特性、がんばる文化的特性。

集団への一致を強調する文化的特性

アキラは会社に勤めていた時、「会社の中での評価とか、会社の中での人間関係がす

べてみたいになる部分」がありました。彼はクリスチャンとして、会社が主催する仏教式や神道式の宗教儀式に参加しませんでした。そのことが自分の評価にマイナスになるというプレッシャーを感じました。

ハルヨとミドリは親戚関係や近所との関係で、好むと好まざるとにかかわらず、仏教式の葬式や法事に参加せざるを得ないことが、信仰にとってマイナスに働いてきたと語っています。

教会の中でさえ、こういった傾向が信仰の成長をはばんでいる姿が見られます。ミドリは、仲のよい人たちだけでかたまってしまい、他の人たちを排除してしまうことがマイナスになっていると言います。ユウコは、状況を判断して、自分が教会内で出過ぎたらいけないと思い、自宅で家庭集会を導くことを断念しました。

他人の態度を気にする文化的特性

他人の態度を気にして、自分がクリスチャンであることを明らかにすることをためらったり、伝道をためらう傾向が見られます。ケンジは他の人に悪く見られることを気にして、日常生活でクリスチャンとして行動することが容易ではありません。ハルヨも教会ではクリスチャンとして行動していますが、家庭では自分一人がクリスチャンであるため、クリスチャンとして行動する勇気はないと言います。カズコは、他の人の感情を害することを恐れて、キリスト教を伝えることにためらいを覚えてきました。アキラも、「どういうふうに、まわりが見るだろうかということで、信仰をはっきりさせないとか、信仰をあいまいに表現することがある」と言います。ユウコは、「友達に、『イエス・キリストはすばらしいのよ』って言いたくても、ちょっと神がかり的に見られちゃうかな、ここでは止めとこう」と考えてしまいます。

多神教・祖先崇拝の文化的特性

ハルヨは、今でも自然の中に霊的なものを感じたりするので、キリスト教信仰にはマイナスになっていると言います。タケシにとって、日本の伝統的な宗教的習慣は、「多かれ少なかれ信仰にも影響ありますね。お葬式とか出る場合、日本ではクリスチャンになっても祖先礼拝を 100 パーセント、心の中から消すことはできないんじゃないかなと思うんですよ。そのへんは、一つの葛藤ですよね。」特に、タケシは自分の祖父母や父を亡くしてから、心情的にかなり影響力があると言います。

先にも同様のことが挙げられていましたが、アキラは、母親から葬式で焼香をあげるようにとのプレッシャーをかけられています。アキラは、焼香は偶像礼拝につながるので、クリスチャンとして避けたいと思っています。このように、祖先崇拝の傾向

は信仰にとってマイナスであると感じています。

日本の教育が機械的暗記を強調している文化的特性

ほとんどの回答者が、機械的暗記を強調した日本の教育を体験していますが、そのことが自分の信仰を関係があるとは考えていません。しかし、おもしろいことに、アメリカ生活の経験があるユウコとタケシだけが、こういった日本の教育の傾向は信仰にマイナスであると考えています。ユウコは聖書研究会のリーダーをしていた時、責任者のアメリカ人からクリエイティブにやることをいつも強調されました。しかし、自分の内からは何も創造的なものは出てこない無力さを感じました。日本の教育は、創造性を育てないで、信仰にもマイナスであるとユウコは考えます。

タケシは次のように語っています。日本の教育は、「ノートワークの教育しているわけでしょ。一人一人の個性とか考え方とか意見とか、あまり尊重されないようなところがあるし。同じテスト受けて、それで何点とったかが、日本の行動体系の基準でしょ。自分の信仰には悪い意味で影響してきました。それがなかったら、もっと自由に生きられたんじゃないですかね。 ・・・ 日本の社会にいると、日本の教育とか、日本の価値観が絶対的じゃないかなと、小さい社会にいるとね、そう思ってしまうわけですよ。だから時々、外国に出て行かないと、違いがあるんだなと肌で感じないとまずいです。」

このように、日本を相対的に見る機会が与えられたユウコやタケシは、日本の教育が創造性の育成や多面的な価値観の形成に関して不十分であり、信仰にもマイナスであると考えています。

がんばる文化的特性

先に見ましたように、多くの人が、がんばる傾向は信仰の成長にプラスであると報告しています。しかし、がんばる傾向のマイナス面も多くの人が指摘しています。ヨシヒコは、がんばることは人と比較し、競争することになるから、信仰とは逆のことになると言います。またヨシヒコは、自分の努力を強調することが、神様に「ゆだねるという気持ちを阻害した」と考えます。ハルヨは、がんばる傾向は「非常に信仰にとってはマイナス」だったと言います。「結局、自分が自分がということになるじゃありませんか。自分の力を信じて、神様の力を信じない。自分の努力でこうなるとか、ああなるとか思いますからね。」

アキラにとって、がんばるということ自体が人生の目標、価値観、一つの信仰のようになってしまい、信仰に対してはマイナスになってきたと語っています。ミドリは、

極端にがんばってしまうところがあって、まわりの人のことを考えなくなったり、神様に頼らなくなるので、信仰にはマイナスだと言っています。ユウコは、努力は大事だと思いますが、何かいつも努力していなければいけないというプレッシャーを感じたり、努力していない人を見ると裁いてしまうので、信仰にマイナスであると言います。ヒロシも、がんばる傾向によって、教会内でも「なんかしなくちゃいけないと思って、仕事的に考えてしまう」と言います。

第 5 章　重要な人生経験、信仰経験、文化的特性の相互関係

今までの章で、日本人クリスチャンが経験してきた重要な人生経験、信仰経験、文化的特性を見てきました。第 5 章では、これら３つの相互関係を信仰との関わりで考察します。

信仰と人生

本研究は、信仰と人生は切り離せないものであることを示しています。誕生してから死ぬまで、すべての人生経験と文化的特性が信仰に影響を与えています。ホールとブローカウは、他の人を信頼することと神を信頼することは互いに補い合って発達していくことを示唆しています。心理的発達と霊的発達は互いに補い合っているのです。[19]　ファウラーは、人間は生まれながらにして信仰の能力と必要が神から与えられていると述べています。[20]　本研究においても、心理的・社会的発達が信仰の成長と結びついているように思われます。クリスチャンになる以前であっても、人間として成長していくことによって潜在的信仰も成長していくように考えられます。たとえば、他の人を信頼し、協力できるようになっていくことが、潜在的に神に対して信頼しやすくなっているように思われます。クリスチャンになってからは、人間としての成長が信仰の成長と直接的に結びついているようです。

価値観の発達と変化

信仰は、人生におけるダイナミックな発達過程といえます。信仰と人生経験とは切り離すことができません。価値観は、たとえそれがクリスチャンになる前に形成されたものであっても、クリスチャンになってから形成されたものであっても、生き方と信仰に大きな影響を及ぼします。たとえばヒロシが言っているように、神様に救われる前の「前史」が、クリスチャンになった後に聖書の言葉をどう受け止めるかに大きく影響しています。それゆえ、どのように価値観が形成され、変化していくかを明確にすることは重要なことです。価値観の形成と変化には、社会化（Socialization）と批判的省察（Critical Reflection）の二つが大きく関わっています。

社会化（Socialization）

日本のクリスチャンの人生は、生まれてから家庭、学校、職場、地域教会などといったさまざまな組織を通っていきます。それぞれの組織は、独自の価値観を持っています。日本の組織は、組織内での違いを認めない傾向を持っています。組織の構成員

の価値観を、組織の価値観と一致させる雰囲気があります。また、日本人は小さい時から、他の人の期待に敏感であって、その期待に応えようとするように育てられます。[21] この傾向が、個人が組織の価値観を内在化していくうえで大きく働いていると思われます。本研究の回答者たちは、それぞれの組織と深く関わることや、両親・先生・友人・牧師といった人たちとの関わりによって、組織が持っている価値観を内在化させていったように思えます。

回答者たちは、新しい組織や、結婚生活や子供のいる生活といった人生の新しい局面に入っていく時、新しい状況や新しい人間関係へどうやって適応していくかを学んできました。さまざまな人たちを受け入れたり、他の人に対して責任があることを学んできました。そうして、徐々に視野が広がってきました。

批判的省察（Critical Reflection）

思春期以降、価値観は批判的省察によっても形成されていきます。批判的省察には、①異なった価値観との遭遇、②自分自身の価値観の自覚、③自分の価値観＆異なった価値観の評価、④新しい価値観の形成という４つのステップがあります。

新しい状況において、今まで持ってきた価値観は、異なった価値観によってチャレンジを受けます。その時、自分自身の価値観を思い巡らし、自分の価値体系や前提となっている考えに気づくことがあります。そして、今まで自分が持ってきた価値観と新たに遭遇した異なった価値観を評価します。その後、今まで持ってきた価値観を維持するかどうか、異なった価値観を採用するかどうかを決めます。こうして、新しい価値体系が形成されていきます。

たとえば、アキラは結婚してから、自分が強い競争心を持っていることに気づきました。それは、彼の妻が競争心のない人だったからです。自分と異なった価値観に出会って、初めて自分自身の価値観を自覚したのです。そして、アキラは自分の価値観と彼の妻の価値観を評価し、仕事よりも家庭生活の方が大切であるという価値観を形成していきました。

海外へ行くことは、批判的省察のよい機会となります。人々が自国を離れ、自国の文化を客観的に見る時、その文化が持っている価値観に初めて気づくことがよくあります。文化的特性のところで見ましたように、アメリカ生活の経験があるユウコとタケシだけが、日本の教育が自分たちの信仰にマイナスの影響を与えていることに気づいたことは、大変興味深いことです。異なった価値観に触れることは、批判的省察にとってなくてはならないことです。

タケシがアメリカの大学に入学した時、彼は「日本の社会の価値観とは違う、国際

的に全く生き方の違うものの見方、考え方があるんだなというのを体験しました。四年間ね。これが大きかったですよ。ほっとしましたよ。何も小さい社会だけにいかなくたっていいんだと。」ミドリが韓国のキャンプに参加した時、「初めて日本人として自分を意識した。自分の内にも偏見があったんだなと。島国根性みたいなものが、他を受け入れられないところがあるんだなって、初めてそれを意識できた。今まで、そんなこと意識したことはなかった。」こういった経験を通して、タケシやミドリは自分の価値観を振り返り、生き方を変えてきました。

批判的省察には、自分の価値観や遭遇した異なった価値観を評価する過程があります。人が成長していって、自分なりの価値観を形成していくに従って、他の人を批判的に評価し、自分のものとしたい価値観を選択します。

アキラは民間の研究所に就職して、そこで研究よりも昇進を人生の目標にして競争している人が多いのを見ました。「僕自身はそういうのを人生の目標にするのは、少し寂しいなと思った。会社で出世して、給料たくさんもらっている人でも、僕なんか見ていて、それで人生幸せなのかなと思うと、本人は幸せだと思っているかもしれないけど、そんなに幸せそうでもないと思ったりしますし。」またアキラは、一生懸命に仕事をしていた父を尊敬し、人生の目標にしていました。その父親が退職し、会社の人も誰も訪ねて来なくなり、何もすることなく家にいる姿を見たアキラは、だんだん人生に対する考え方が変わって、「一生懸命がんばって何かを達成するというのも、意味はあると思うのですが、それだけだと人生、最後まで充実して生きることはできない。・・・僕はそれを見ていて、自分はそういうふうには生きたくないなと思った。」このように、アキラは自分の周囲にいる自分と同様の価値観を持った人々の生き方を見て、自分の価値観に気づきました。そして、その価値観を評価し、満足のいくものではないと判断したのです。

出来事の意味の理解

誰もが、人生のさまざまな経験を理解したり解釈したりしています。そのために、その人なりの価値観と意味づけのシステムが働いています。回答者たちはクリスチャンになった後、出来事の意味を神との関係で理解している姿がうかがえます。たとえば、ヒロシは、いつも自分を待って、期待していてくれる家族を通して、愛なる神の性質を見出しています。

ハルヨとケンジは、困難の意味を神との関係で見出そうとしました。ハルヨの夫は、心臓発作で突然亡くなりました。ケンジの親友は、キリスト教から離れました。ケンジは同時に、仕事を解雇されました。ハルヨもケンジも、神がこういったことを起こ

したと思い、神を非難しました。

インタヴューした時点では、すべての回答者が神や他人との関係で人生の意味を見出していました。別の言葉で言うと、彼らは人生の意味を他の人格との関係で見出しており、自分自身や物の中に意味を見出すことはありませんでした。神が自分を創造されたから人生に意味があると考える人や、神や他の人に貢献しているから意味があると考える人がいました。こういったことから考えると、回答者たちはクリスチャンになった後、神や人との関係を中心にして、人生の出来事の意味を理解していることがわかります。人生の意味を見出すには、「神を愛すること」と「人を愛すること」の二つの関係が不可欠であることがわかります。

回心

日本ではクリスチャンが大変少なく、クリスチャンになるということは大変まれなことです。回答者たちは、どのようにして信仰を持つに到ったのでしょうか。

いくつかの文化的特性が、キリスト教を受け入れる備えをしてくれました。たとえば、多くの宗教や神々に寛容である傾向、将来について高い不安を持つ傾向、激しい競争がある傾向などです。

回心以前に、すべての回答者はクリスチャンとの交流がありました。彼らは、自分の知っているクリスチャンや教会のメンバーに引き付けられるものがありました。幾人かの人にとっては、クリスチャンが親切なので教会に加わりたいという思いを持ちました。全体的に、情緒的なニーズが満たされたのちに、キリスト教に入信する傾向が見られました。

また、すべての回答者は回心以前に、何らかの形でキリスト教について学んでいました。多くの人は説教を通してキリスト教のことを学んでいました。インタヴューした当時 45 歳以上だった人の内、カズコを除く 5 人は、外国文学やキリスト教の書物を読むことが、キリスト教に興味を持つきっかけになりました。

回答者たちがクリスチャンになったのは、彼らの両親や学校の先生の影響が弱くなってからでした。すべての回答者は、高校を卒業してからクリスチャンになりました。ほとんどの人は、自分が生まれ育った家を出てからクリスチャンになりました。

回答者たちが、導きを求めたり、自分の決断や価値観の承認を求める人は、回心前は両親や自分自身でしたが、回心後は牧師や教会員に変っています。

信仰の成長に関わる要因

本研究から、信仰の成長に関わると思われる６つの要因が明らかになりました。それらは、神の言葉、重要な人生経験、神の経験、他者との関係、信仰共同体、がんばる傾向です。

神の言葉

回答者たちは、メッセージを聞くことによって信仰が成長すると受けとめています。また、彼らはキリスト教や聖書の知識が増える時に信仰が成長したと感じています。このように、信仰の成長にとって、神の言葉を聞くことは不可欠のように思われます。

多くの場合、回答者たちは、聖書の言葉を聞いたり、他のクリスチャンの話（証しや聖書を読んで教えられたことなど）を聞いて、自分の信仰を振り返る機会を与えられています。そして、今までの生き方や考えを改めることが起こります。

重要な人生経験

多くの人にとって、就職、結婚、子育て、退職、困難などの人生における重要な経験が、信仰の成長を促す機会を与えています。

マサコの信仰は、出産して子育てをすることによって成長しました。「イエス様があなたを愛したように、隣人を愛しなさい。子供ももちろん愛しなさいということで、それを実践するということで。自分の信仰が成長しなければ愛せないでしょ。」ユウコとハルヨは、困難な経験をした時、神にさらに信頼するようになって、信仰が成長しました。

神の経験

幾人かの人たちは、神の働きを直接経験することによって信仰が強められました。ミドリはキリスト教の幼稚園で先生として働いている時に、神の存在を感じる経験をしました。マサコはこう言っています。「極限に置かれたりした時は、祈るということによって、なお神様の導きがある。自分の力を超えた神の力を体験できる。」タケシにもそういった経験があります。聖書の言葉の通りに「生きると生活も祝福されて、成績まで上がってきたんですよ。それはびっくりしました。それはみ言葉の力でしょうね。」ユウコは、5 年ぶりに帰国した日本に適応できずに苦しんでいる時、「私自身だって自分では変えることができない。これを全部聖霊にゆだねて『変えてください』って言った時に初めて、自分の変えられていくことができるっていう体験」をしました。

他者との関係

ほとんどすべての回答者が、信仰に積極的な影響を与えた人がいると報告しています。信仰に積極的な影響を与えた人は、牧師、宣教師、家族、クリスチャンの友人というように大きく４つに分けられます。この中でも特に牧師の影響が強く見られます。大きな影響を与えた人たちは、回答者と長い時間を共に過し、親密な交わりを持っています。

信仰に積極的な影響を与えた人たちは、モデル(模範)と相談役という２つの機能を果たしたように考えられます。彼らは、信仰生活の模範を示し、「この人のようになりたい」という思いを起こさせ、回答者たちを受け入れ、アドヴァイスを与えています。

２つの文化的特性が、人間関係の形成を促進しているように見受けられます。多くの回答者が、他の人の期待に敏感であって、その期待に応えようとしました。また回答者たちは、権威ある人々に従いやすい傾向も持っていました。

信仰共同体

クリスチャン生活で、もっとも顕著な特徴の一つが信仰共同体です。クリスチャンは一人一人がばらばらに存在しているのではなく、共同体の中で生きています。このことが、信仰の成長に積極的な影響を及ぼしています。コーンウォールが、「宗教的専心は、同じ信仰を持った人々との交わりの中で発達する」と述べているとおりです。[22] いくつかの文化的特性が、信仰共同体の形成を促進するように働いているようです。たとえば、自分が所属する集団への一致を強調する傾向、権威があったり、自分よりも地位の高い人に従いやすい傾向、他人の感情と意見をよく考慮してから発言したり行動したりする傾向、他人の期待に敏感であり、その期待に応えようとする傾向などです。

また、いくつかの文化的特性は、この世の生活と信仰共同体の生活の相違をきわだたせています。一般の生活では、学校でも職場でも激しい競争がありますが、教会生活には競争がなく平安や思いやりを得られます。一般には、建前と本音がはっきり分かれている傾向がありますが、教会では体面をつくろう必要がなく、ありのままの姿でいることができます。

ほとんどの回答者が、家庭的な雰囲気が信仰にとってよかったと語っています。彼らは、自分たちが教会の家族に受け入れられていると感じています。人々は教会内で、互いに信頼し、励まし合い、仕え合っています。先行研究の中にも似たような結果が見られます。成人の信仰の成熟度は、教会内で他の人から受けるケアやサポートの程度、あるいは暖かさの度合いとある程度の関係が見られました。[23]

信仰共同体は教会全体のことだけではなく、祈祷会や聖書研究会、婦人会などといったスモールグループにおいても、そのすばらしさを味わえます。回答者たちは、スモールグループに参加することによって、信仰が成長したと報告しています。こういったスモールグループにおいて、人々は率直に話し合い、互いに支え合い、異なった視点を学んで、神の家族の豊かさを経験しています。

しかしながら、回答者たちは彼らの教会の現状に完全に満足しているわけではありません。多くの回答者が、教会内でもっと親密で幅の広い交わりが持てることを期待しています。その交わりにおいて、日常生活の経験や問題、喜びを分かち合い、共に祈り合いたいと希望しています。

がんばる傾向

多くの回答者たちが、がんばる傾向、自制心（セルフコントロール）がある傾向が、信仰の成長にとって重要であると認めています。

タケシは、「いい仕事したいと思うこと、それが証しになっていきますからね」と言います。マサコは、「極限に置かれたりした時は、祈るということによって、なお神様の導きがある。自分の力を超えた神の力を体験できる」と語っています。ユウコは聖書研究会の奉仕をして、「すごく大変だったんですね。これだけはと思ってがんばったんです。結局、それが自分を助けてくれて。だからがんばることの中に自分を支えてきたんじゃなくて、がんばった結果、いいものにいつまでも食いついていけたので、信仰が強められた。」マサオは、仕事が大変忙しくて、疲れていた時でも、がんばって教会を休みませんでした。ハルヨは、よいクリスチャンになろうと努力し、ケンジは「努力していないと、自分の信仰が成長していかないと思う」と語っています。

その他

その他の信仰を促進する要因として考えられるのは、困難を通して神様にゆだね、信頼するようになること、奉仕を通して、神と人に仕えることなどが見られました。

先行研究においては、信仰の成熟度は年齢と共に高まることが報告されています。[24] 本研究においては、年齢による信仰の成熟度の変化は調べていませんが、一人一人の信仰の変化を見てみますと、人生経験や他のクリスチャンとの交わりなどを通して、神や信仰の理解が深まっていく傾向が見られました。こういったことから、一般的に年齢と共に信仰も成長していくといえます。

信仰の落ち込みに関わる要因

信仰の落ち込みに関わる要因としては、以下の４つの要因が見られました。それらは、集団への一致、他人の態度を気にする傾向、困難、がんばる傾向です。

集団への一致

日本の組織は、構成員に組織と同じ価値観を持つように強力に作用しています。別の言葉で言うと、日本の組織は、組織内での相違を認めない強い傾向があります。回答者たちはクリスチャンになった後、クリスチャンとしての価値観が育ちます。そのため、しばしばキリスト教的価値観と組織が持っている価値観との衝突を経験しています。回答者たちは、こういった価値観の衝突を、特に職場、家庭、地域社会で経験しています。彼らは、しばしば非キリスト教的な宗教行事に参加しなくてはならない強い圧力を感じています。

教会においてさえ、集団への一致を強いる傾向は見られます。その傾向は、自分たちだけでかたまって、他の人たちを排除するような形で現れることがあります。また、新しいことを始めにくい雰囲気をつくり出すこともあります。

他人の態度を気にする傾向

この傾向は、先ほど見た集団への一致を強いる傾向と深く結びついています。回答者にも、他人の態度を気にして、自分がクリスチャンであることを明らかにすることをためらったり、伝道をためらう傾向が見られます。

多くの日本人は、他の日本人も自分と同じ考えを持ち、同じ行動をすることを期待しています。そのような環境で生きているため、日本人は他の人と同じことをしていると安心していられるのです。逆に、違ったことをするにはかなりの勇気が必要になります。回答者たちも、さまざまな場面で、他の人の態度を気にして、集団へ一致するような圧力を感じています。

このため、日本のクリスチャンは、信じている信仰と日常生活での行動を分離する傾向が出てきます。たとえば、ヨシヒコが解説しているように、日本のクリスチャンサラリーマンは、信仰は私的なことと割り切り、会社での異教的な行事は公的な行事とみなして参加する傾向が見られます。

困難

幾人かの回答者は、困難に出会った時、信仰が落ち込む時期がありました。その時に、彼らは神に失望しました。ケンジとハルヨは困難に出会った時に、なぜ神がこの

ようなことを自分に与えたのかと不信感を持ちました。エミは自分が勤めていた幼稚園の園長が彼の出席している教会に出席するようにしつこく誘った時、なぜ神がこんなことを起こされるのか疑問に感じました。それでも、エミは後にこの園長のために祈れるようになりました。

がんばる傾向

先に見ましたように、多くの人が、がんばる傾向は信仰の成長にプラスであると報告しています。しかし、がんばる傾向のマイナス面も多くの人が指摘しています。がんばることによって、神に頼る代わりに自分の力に頼ったり、信仰も仕事のようになってしまう傾向が見られます。

ヨシヒコは、自分の努力を強調することが、神様に「ゆだねるという気持ちを阻害した」と考えます。ハルヨは、がんばる傾向は「自分の力を信じて、神様の力を信じない。自分の努力でこうなるとか、ああなるとか思いますからね」と言っています。アキラにとって、がんばるということ自体が人生の目標、価値観、一つの信仰のようになっていました。ミドリは、極端にがんばってしまうところがあって、まわりの人のことを考えなくなったり、神様に頼らなくなるので、信仰にはマイナスだと言っています。ユウコは、努力は大事だと思いますが、何かいつも努力していなければいけないというプレッシャーを感じたり、努力していない人を見ると裁いてしまうので、信仰にマイナスであると言います。ヒロシも、がんばる傾向によって、教会内でも「なんかしなくちゃいけないと思って、仕事的に考えてしまう」と言います。

その他

その他に信仰が落ち込む要因としては、心身共に疲れること、信仰の交わりから離れること、教会の世俗的な面を見ること、多神教・祖先崇拝がなされている環境、日本の教育が機械的暗記を強調して創造性を育てていないことなどが挙げられました。

第 6 章　日本の教会への提言

最後の章では、今まで見てきたことに基づいて、日本の教会においてどうしたら信仰の成長を促進できるかについて、７つの提言をしたいと思います。

効果的な社会化をはかる

日本人は家庭や学校、職場といった自分たちが置かれている組織の価値観を内在化しているようです。その内在化は、各々の組織に深く関わったり、影響の大きい人々との人間関係によってもたらされます。本研究の結果も、よいモデルを示すことの重要性を示しています。グループに新しく加わった人は、すでにグループに所属している人たちの行動を観察して、そのグループが持っている規範や期待を学んでいくからです。[25]

子供の時期は、神のイメージ形成において最も重要な時期の一つです。日本においては、地域社会と学校教育はキリスト教的な神のイメージ形成に、一般に否定的な影響を与えています。そのため、クリスチャンである親は、自分の子供の信仰継承に対して、きわめて重要な役割を担っているわけです。親は、子供によいモデルを示す必要があります。日本の教会は、親の信仰的な子育てを助けるためのファミリーミニストリーに真剣に取り組まなければなりません。

思春期と成人初期が、宗教的社会化の二つのきわめて重要な時期です。新しい友人、世界観、生活様式に触れて、子供の時からの価値観とは異なった価値観を形成しやすい時期です。したがって、親元を離れた学生や新社会人が、最も新しい価値観を受け入れやすいといえます。この年代の人々への伝道は特に大切なことがわかります。また、日本においては、クリスチャンの青年たちは、たえず進化論、無神論、ニュー･エイジといった非キリスト教的思想の爆撃を受けています。この青年たちがキリスト教信仰にとどまるかどうかは、クリスチャンの親がどう生きるかということと親子関係が重要になってきます。教会は青年に対しては言うまでもなく、その親に対しても強力な支援をしていかなければなりません。

新しく救われた人にとっては、回心後の 2～5 年が大変重要な時期です。この時期には、キリスト教の新しい知識や価値観を熱心に吸収し、周囲のクリスチャンと同化してクリスチャンのライフスタイルを身に付けていきます。それゆえに、この時期は宗教的社会化にとって、最も効果のある時期の一つといえます。教会は、新しく救われた人がキリスト教世界観を形成していけるように助けなければなりません。

さらに、日本人がクリスチャンになるということは、多くの場合、劇的な変化です。そこでは、人間関係の摩擦や価値観の衝突が起こりやすい状態になっています。教会

は、新しくクリスチャンになった人たちへ、実際的な助けと同時に、情緒的にも支えていく必要があります。こういった努力を怠ると、洗礼を受けた人がすぐに教会から離れてしまう結果になります。受洗準備の時や受洗直後に、しっかりした学びとサポートを提供する必要があります。クリスチャンにとっても「三つ子の魂百まで」の原則が当てはまります。

日本の特に地方においては、神道や仏教が地域社会に根ざしています。特に子供たちは、生まれた時からこれらの宗教に関係のある習慣に関わりを持っていきます。キリスト教も、日本の地域社会に根ざすことを目指すべきでしょう。たとえば、日本の教会は、祝日や伝統的習慣をキリスト教に親しむ機会として用いるとよいと思われます。もちろん、多くの祝日や伝統的習慣は異教的起源を持っていますから、そういった祝日や習慣を用いる場合は、混合宗教（シンクレティズム）に陥らないように気をつけなければなりません。また、日本の伝統的習慣に代わるものをキリスト教側から提供していくことも大切です。たとえば、仏教式の法事に代わって、キリスト教式の記念会をアピールしていくこともよいでしょう。さらにまた、キリスト教の習慣を日本社会に根づかせていくことも大切です。いまのところ日本でもクリスマスが盛んに祝われ、商業主義的ではあっても、もっとも伝道しやすい時になっています。また最近では、キリスト教式の結婚式の人気が高いので、これを一時的流行に終わらせず、この機会に「結婚式はキリスト教で」という考えが日本に定着するように努力することも重要だと思われます。

批反的省察を促進する

本研究でも明らかなように、回答者たちが成長していくにつれて、社会化だけではなく、批判的省察によっても価値観が形成されたり、変化しています。ただし、自分の内面を見つめて振り返る程度には、個人差が大きいようです。

先行研究においても、批評的省察が信仰の成長に重要な役割を果たしていることを示しています。マーガレット・ホールは、危機的状況が霊的成長に及ぼす影響を研究しました。その結果、危機的状況は霊的成長に必要条件ではあるが、十分条件ではないことがわかりました。霊的成長の鍵は、危機的状況の中で、今までの自分の信念を批反的に検討し改定作業をおこなうかどうかでした。[26] コンスタンス・リーアンも、人がいかに不均衡（disequilibrium：自分の今までの考えが砕かれる経験）に対処するかが信仰の成長にとって決定的に重要であると述べています。「不均衡の出来事を振り返ったり、その経験から学ぶことを助けること、否定的感情、疑い、視点の変化の過程を助けることが非常に大切に思われます。」[27]

日本の文化は、同一性、協調性、調和、他者への配慮を強調します。こういった傾向は、よい面もたくさんありますが、一般に無批判的な人間を生み出してきました。そのような文化的環境に置かれている日本の教会は、信徒の霊的成長を目指すためには、思考の前提となっているものにチャレンジを与えて意図的に均衡を破る必要があります。説教や聖書研究において、人々が当然のように思っている神の性質や、伝統的にクリスチャンはこう考えこう行動しなくてはならないと考えられてきたことが、本当に聖書的に正しいのかどうかを問われなければなりません。そのためには、クリスチャンの交わりにおいて、チャレンジを受けるような質問を投げかけられたり、他の人から違った見方・解釈を与えられる必要があります。聖書研究会で参加者全員が、異なった視点から教えられたことを分かち合ったり、証しを聞き合うことは、とても大切なことです。

日本のクリスチャンは、特に自分たちが住んでいる日本の文化に無批判です。日本文化の中で生まれ育った場合、文化の存在すらも感じないでしょう。文化的特性は、他の文化との比較をしない限りわかりません。今日、多くの日本人が仕事や学び、観光の目的で海外へ行っています。ニュースやインターネットを通じて、海外のことも瞬時に伝えられるようになってきました。外国との交流も増えて、日本に滞在する外国人もふえています。海外のことを紹介したり、日本文化について書かれた書物もたくさん出版されています。ですから国際化した現在は、今までのどんな時代よりも日本文化について考えるよい環境が整っているといえるでしょう。本研究の結果が示しているように、日本文化は信仰の発達にプラスにもマイナスにも作用しています。日本のクリスチャンも自国の文化を聖書と神学の視点から批判的に見られるように訓練され、信仰にマイナスな点をよく自覚し、プラスの面を積極的に活かしていけるように整えられることが期待されています。

キリスト者をこの世界で生きられるように整える

日本のクリスチャンは、自分の信仰を教会との関わりにおいてだけで考える傾向が見られます。たとえば、日本の牧師は信仰が成長するためには、「日曜礼拝と祈祷会に出席し、聖書を読んで祈りなさい」というのが一般的でしょう。これらは正しい指摘でしょうが、信仰を教会の枠の中でしか捕らえていないことをも表しています。教会では、信仰を日常生活で証しするように勧められることはあっても、人生経験が信仰に影響があることはほとんど考えられていないのではないでしょうか。本研究の結果が示しているように、信仰と人生経験とは切り離せないものです。入学、就職、結婚、出産・子育てというような人生における主要な出来事は、信仰が成長する機会を提供し

ています。

日本の教会は、人生経験を信仰の成長に結び付けることができるように助けることが必要です。そのためには、学校生活の神学、仕事の神学、結婚の神学、家庭生活の神学というような、日常経験を聖書的・神学的に解釈することを助ける神学を構築する必要があります。ちなみにアメリカやカナダでは、フラー神学校のロバート・バンクス やリージェント・カレッジのポール・スティーブンスなどが中心になって、日常生活を神学的に理解する努力が積極的になされています。[28] プロテスタントの伝統においても、霊性の中心的側面は、「信仰と日常生活の完全な統合」[29]でした。霊的な人とは、「この世にあって神のために生き、神に応答する人」[30]のことです。

教会のメンバーは、人生の各々のステージで直面する問題についての実際的な解決の知恵と神学を学んでおくと、人生を有意義に送ることができるでしょう。たとえば、社会に出る前に、社会人としてどう生きるべきか、対人関係のあり方、仕事とは何か、などについて聖書的・神学的に学んでおくのです。もちろん、社会に出てからも必要に応じてこれらのことを学ぶ必要があります。こうすることによって、その時々の経験を信仰と結び付けて解釈することが可能になります。

日本の教会では、サポートグループを活用することによって、日常経験を信仰の成長につなげることができます。サポートグループは、人生の同じステージにある人々や、同じ問題をかかえる人たちが集まって、互いに励まし合い、共通の問題について聖書から学び合うスモールグループです。たとえば、独身者のグループ、未就園児を持つ母親のグループ、離婚した母親(シングルマザー)のグループ、十代の子供を持つ親のグループ、子供が独立した親のグループ、高齢者のグループ、薬物中毒のグループなど、共通の問題や関心さえあれば、どんなサポートグループをつくることも可能です。

日本のキリスト者にとっては、日本社会の特徴を知り、どのように対処すべきかを知る必要もあります。日本の宗教の特徴の一つは、「非ー排他的性質」[31]です。「ほとんどの日本の宗教は、（一般レベルにおいては）神学的信念とその表現に関心があるというよりも、見せること（パフォーマンス）や儀式が中心です。」[32] さらに、日本社会は強力な同一化傾向があり、違いを認めにくくしています。

しかしながら、キリスト教は排他的で知的性質を持っています。したがって、日本人がキリスト者になった場合、キリスト教的価値観と日本社会が持っている価値観との間に、しばしば衝突を経験することになります。この衝突は、特に職場や家庭、地域社会において生じます。日本人クリスチャンは、非キリスト教的宗教行事に参加するように強い圧力を感じることがよくあります。

多くの日本人にとって、人生の中で仕事が最も重要な領域になっています。特に、20 代の間に自分の会社の価値観を植え付けられています。[33]　宗教に関わることによってもたらされる社会心理的利益にとって変わるものを、仕事は提供しているといえます。仕事は、価値とアイデンティティー、社会的関係を与える源としての役割を果たし得るわけです。[34]

日本の教会は、クリスチャンが以上のような日本社会で生きられるように整える責任があります。まず、キリスト教的世界観の形成のために努力しなくてはなりません。そのためには、先に見た社会化や批判的省察を有効に用いるとよいでしょう。また、自分たちの日常の経験を分かち合い、聖書的・神学的に解釈することを励ますとよいでしょう。さらに、自分たちの信じている信仰を弁証し、広めて行けるように訓練される必要があります。信仰的に妥協することなく、この世と関わって行く方法を体得できるように助けることが大切です。

日本のクリスチャンは、少数者コンプレックスを持つ傾向があります。さらに、自分たちの仲のよい人だけでかたまりがちです。そして、自分たちの信仰を公にすることをためらいます。日本の教会は、信徒が自分たちが信じている信仰が真理であると確信を持てるように助ける必要があります。さらに、未信者に対する深い思いやりと福音を伝える情熱を持てるように助けるべきです。クリスチャンが、日常生活の中で、自然にノンクリスチャンの友人をつくり、福音を分かち合えるように励ますことが大切です。

困難な経験への備えをする

困難な経験は、霊的成長にとってプラスにもマイナスにも影響し得ます。プラスの影響の場合は、困難な経験を通して神への信頼を増していきます。このことは、ストレスレベルが高いほど、神への依存が高まるという先行研究の結果を支持しています。[35]　それに対して、マイナスの影響の場合は、なぜ神がこのような苦難を自分にもたらされたのかという疑問を抱き、神への信頼が揺らぎます。

どうして同じ困難な経験をしても、信仰にプラスになる人もいれば、信仰にマイナスになる人もいるのでしょうか。それは、困難な経験を神学的にどのように理解するかの違いによるもののように思われます。もし、苦難について聖書的な理解をしっかり持っているなら、おそらく苦難の中でも神を信頼し続けることができるでしょう。そして、その経験を通して、さらに神を信頼するようになり、霊的に成長していくように思われます。

このように考えてみますと、教会が苦難の聖書的理解を教えることがいかに重要で

あるかがわかります。説教において、牧師は困難を経験した人々の例を聖書やその他のものから紹介することも有効でしょう。また、実際に苦難の中を通っている人々は、孤独を覚え、自分が神に見捨てられたと感じていることがよくあります。教会はそのような人々を支え、祈り、実際の助けを提供すべきです。困難の中にある人が、皆から愛されていることを感じることができるようにし、神に信頼し続けることができるように助ける必要があります。

信仰共同体を形成する

信仰共同体は、信仰に積極的な影響を与えるクリスチャン生活の重要な特徴の一つです。教会はメンバーが互いに分かち合い、支え合える家族的な雰囲気を持っています。こういった雰囲気は、この世の組織が持っている雰囲気とは根本的に異なります。この世の組織では、人々は競争し、本音と建前が分離していることがよくあります。信仰共同体においては、人々は協力し、偽りの外見をとりつくろう必要がありません。こういった違いがあるため、教会において、メンバーはありのままの自分が出せ、安心し、解放された感じを受けます。日本の教会は、神の国のすばらしい特徴を保持し続ける努力をしなければなりません。

本研究の回答者たちは、スモールグループに参加することによって信仰が成長したと述べています。スモールグループにおいて、人々は共に学び、心を開いて話し、互いに支え、異なった視点を学ぶことができます。日本の教会は、よいスモールグループを提供し、積極的な参加を勧めることがよいでしょう。

しかしながら、回答者たちは教会の現状に完全には満足していません。さらに親密で、幅の広い交わりの中で、メンバーが日々の経験や問題、喜びを分かち合い、祈り合えることを望んでいます。日本の教会は、もっと自由に分かち合い、祈り合える雰囲気をつくる必要があると思われます。

いくつかの文化的特性が、信仰共同体の形成を促進しています。たとえば、集団への一致を強調する傾向、権威ある人々に従う傾向、他の人の期待に敏感であり、それに応えようとする傾向などです。しかし、集団への一致を強調したり、他の人の態度を気にする傾向は、健全な共同体の形成を妨げることにもなりかねません。こういった傾向は、共同体内での違いを認めないことにつながります。日本のクリスチャンは、聖書から信仰共同体のあるべき性質を学ばなければなりません。そして、自分たちの信仰共同体が聖書と神学的基準に照らし合わせて、どのような状態にあるのかを絶えずチェックする必要があるでしょう。

牧師の役割

牧師は教会のメンバーの信仰成長において、もっとも影響力のある人です。牧師はよいモデルを示さなければなりません。牧師は、この世界においてクリスチャンとしてどう生きるか、どうやって聖書の真理を生き方に結び付けるかを示す必要があります。

本研究の回答者たちは、牧師が自分たちの霊的状態を知り、指導してくれることを期待しています。日本の牧師は、メンバーに霊的指導を与え、自分たちの経験を批判的に振り返ることを助けることができるように訓練を受ける必要があります。このためには、発達心理学、信仰の発達理論、学習理論などの基礎知識があることが望ましいでしょう。

たとえ牧師がよい訓練を受けていたとしても、一人の牧師ですべてのメンバーの霊的指導ができるわけではありません。ですから、信徒が互いに霊的なケアをできるように訓練されることが理想でしょう。

さらに、回答者たちが牧師に期待していることは、説教において、神の言葉を確信を持って解き明かし、日常生活に適用してくれることです。単なる解説ではなく、牧師自身がまず教えられ、感動をもって語ってほしいという希望があります。テキストをメンバーの生活に適用するためには、メンバーの必要や問題を普段からよく知っていなければなりません。

神学校教育を改革する

信仰の成長を促進するための鍵になるのは、牧師です。なぜなら、牧師によって教会のありかたが左右され、牧師が信徒の教育にもっとも大きく関わっているからです。したがって、牧師の養成にあたっている神学校教育に日本の教会の将来がかかっていると言っても過言ではないでしょう。

本研究で見てきた日本人クリスチャンの信仰の弱点は、そのまま日本の神学校教育の弱点を反映していると考えられます。信仰を生活と結び付けて、適切な霊的指導を与えることのできる指導者の養成が望まれます。そのためには、実践神学の分野において、人間理解を深める学びをもっと充実させる必要があります。たとえば、人間の知的発達、感情的発達、信仰の発達、学習理論、効果的教育法などは重要な内容と思われます。

神学校の学生は、聖書的・神学的に考え、行動できるように整えられる必要があります。つまり、自分の人生の全領域を批判的に振り返り、評価できるようになること、さらには聖書を土台にして正しい生き方を選択できるようになることが求められます。

別の言葉で言えば、聖書的世界観を身につけ、実行できるようになることです。聖書的世界観を身につけることは、別の視点を身につけることです。聖書的世界観が確立して行くに従って、批判的省察ができる能力が高まるといえます。教師は学生が批判的思考（クリティカル・シンキング）能力を伸ばす助けをする必要があります。

さらに、神学校はすでに現場に出ているクリスチャンを対象にした継続教育に力を注ぐ必要があります。一般に、日本の牧師たちは神学校で学んだことに忠実に従っていますので、牧会のやり方は容易に変ることがありません。新しい学びの機会なくして、教会は新しくなりません。いろいろな問題にぶつかったり、必要を覚える時こそ、最高の学習機会です。神学校は新しいクリスチャンリーダーを生み出す役割と同じくらいの大切さで、現在のリーダーたちをさらに高めていくカリキュラムを真剣に考えていただきたいと思います。

あとがき

私はお一人一人のインタヴューをしていた時に、本当に感動しました。一人の人の人生を分かち合ってもらうことは、聞く者を変えずにはおかないほどの重みがあることを実際に経験しました。一人一人のお話を聞かせていただく間に、何度も神様の導きの素晴らしさを覚えました。霊的洞察の深さに心の中でうならされました。

また、話を聞いている途中で、「こんなアドヴァイスをしたら、この人の信仰はきっと成長するだろうな」と思うこともよくありました。しかし、実際には、私は誘導尋問にならないために、インタヴューの間、自分の意見を言ったり、価値判断するようなことは一切しませんでした。ただ、話の内容を詳しく聞くために質問し、聞くことに徹しました。こういった経験から教えられたことは、一人の人の人生を分かち合ってもらうこと（共に歩むこと）の重要さ、そしてその人の成長のために適切なアドヴァイスを与えることの大切さです。これがスピリチャル・ディレクター、霊的カウンセラーとしての務めではないかと思わされました。

本書を読まれて、「わずか 12 名のインタヴューで、日本人クリスチャンの一般的傾向がわかるだろうか」と疑問に思われた方もいらっしゃるでしょう。研究の仕方には大きく分けて量的研究（統計などを用いるもの）と質的研究があります。この研究は、質的研究であって、現実の傾向を描写する性質のものです。このような研究方法は、まだよく研究されていない分野ではなくてはならないものです。

「どうしたら信仰は成長するのだろうか。」信仰を成長させてくださるのは、神様の業です。しかし、人間の側にもできることがあります。神様に自由に働いていただける環境を整えることです。そのために本書が何かのヒントを提供することができたなら、著者としてこれほど幸いなことはありません。皆様と皆様の教会に、神様の豊かな導きと祝福がありますようにお祈りしています。

注

[1] Hiebert, Paul G. 1985. *Anthropological insights for missionaries*. Grand Rapids, Mich.: Baker Boos. p .56.
[2] Ibid.
[3] Matsumoto, Shigeru. 1972. Introduction. In *Japanese religion*, ed. Ichiro Hori, Fujio Ikedo, Tsuneya Wakimoto and Keiichi Yanagawa. Tokyo: Kodansha International, p.23.
[4] Suzuki, Norihisa. 1972. Christianity. In *Japanese religion*. p.72.
[5] Ibid.p.71.
[6] Matsumoto, p.25.
[7] Suzuki,p.71. Earhart, H. Byron. 1982. *Japanese religion:Unity and diversity*, 3d ed. Belmont, Calif.: Wadworth Publishing Company. p.187.
[8] Suzuki, p71.
[9] Earhart, p.165.
[10] Hiebert, Paul G. and Eloise Hiebert Meneses. 1995. *Incarnational ministry*. Grand Rapids, Mich.: Baker Books. p.167.
[11] Hiebert, 1985. p.184.
[12] Matsumoto, p.24.
[13] 宇田進 1984 年「福音主義キリスト教とは何か」いのちのことば社。p.119.
[14] Gillman, Ian. 1981. Blind spots: Some reflections on the adequacy and relevance of the Christianity brought to Japan by Western missionaries. *Japanese Religions* 11(4):11-12.
[15] Suzuki, p75.
[16]Suzuki, p87.
[17] Mullins, Mark R. 1989. The situation of Christianity in contemporary Japanese society. The Japan Christian Quarterly 55 (2):85,.
[18] Hall, Todd W., and Beth Fletcher Brokaw. 1995. The relationship of spiritual maturity to level of object relations development and God image. *Pastoral Psychology* 43(6): 373-74.
[19] Ibid. 386.
[20] Fowler, James W. 1991. The vocation of faith development theory. In *Stages of faith and religious development: Implications for church, education, and society*, ed. James W. Fowler, Karl Ernst Nipkow and Friedrich Schweitzer, 19-36. New York: The Crossroad Publishing Company.
[21] Hess, Robert D., Hiroshi Azuma, Keiko Kashiwagi, W. Patrick Dickson, Shigefumi Nagano, Susan Holloway, Kazuo Miyake, Gary Price, Giyoo Hatao, and Teresa McDevitt. 1986. Family influences on school readiness and achievement in Japan and the United States: An overview of a longitudinal study, In *Child development and education in Japan*, ed. Harold Stevenson, Hiroshi Azuma, and Kenji Hakuta, 147-66. New York: W. H. Freeman and Company.; Hess, Robert D., and Hiroshi Azuma. 1991. Cultural support for schooling: Contrasts between Japan and United States. *Educational Researcher* 20(9):2-8,12.
[22]Cornwall, Marie. 1987.The social bases of religion: A study of factors influencing religious belief and commitment. *Review of Religious Research* 29(1): 55.
[23] Benson, Peter L., and Carolyn H. Eklin. 1990. *Effective Christian education: A national study of Protestant congregations—A summary report on faith, loyalty,*

and congregational life. Minneapolis, Minn.: Search Institute. 40.

[24] Hunsberger, Bruce. 1985. Religion, age, life satisfaction, and perceived sources of religiousness: A study of older person, *Journal of Gerontology* 40(5):615-20 ;Watson, P. J., Robin Howard, Ralph W. Hood, Jr., and Ronald J. Morris. 1988. Age and religious orientation. *Review of Religious Research* 29(3):271-80 ; Benson, Peter L., Michael J. Donahue, and Joseph A. Erickson. 1993. The faith maturity scale: Conceptualization, measurement, and empirical validation. In *Research in the social scientific study of religion*, vol. 5, ed. Monty L. Lynn and David O. Moberg, 1-26, Greenwich, Conn.: JAI Press Inc.

[25] Cornwall, Marie. 1988. The influence of three agents of religious socialization: Family, church, and peers. In *The religion and family connection: Social science perspective*, ed. Darwin L. Thomas, 207-31. Provo, Utah: Religious Studies Center, Brigham Young University.

[26] Hall, C. Margaret. 1986. Crisis as Opportunity for Spiritual Growth. *Journal of Religion and Health* 25(1) : 15.

[27] Leean, Constance. 1985. *Faith Development in the Adult Life Cycle: Module 2*, rev. ed. Minneapolis, Minn.: Religious Education Association, 36.

[28] 最近注目されている本としては、次のものがあります。Robert Banks and R. Paul Stevens. ed. *The Complete Book of Everyday Christianity: An A-to-Z Guide to Following Christ in Every Aspect of Life*. (Downers Grove. Ill.: InterVarsity Press, 1997)

[29]アリスター・マグラス『キリスト教の将来と福音主義』島田福安訳（いのちのことば社、1995 年）、p. 175。

[30] 『前掲書』同頁。

[31] Ashkenazi, Michael. 1991. Local Japanese responses to missionary activities. *Social Compass* 38 (2) : 142.

[32] Ibid. p.143.

[33] England, George W., and Jyuji Misumi. 1986. Work centrality in Japan and the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 17(4):411.

[34] De Vaus, David, and Ian McAllister. 1987. Gender differences in religion: A test of the structural location theory. *American Sociological Review* 52 (4): 480.

[35] Schaefer, Charles A., and Richard L. Gorsuch. 1993. Situational and personal variations in religious coping. *Journal for the scientific study of religion* 32(2):136-47

〔著者紹介〕

松原 洋満 （まつばら ひろみつ）

1960 年、岐阜県生まれ。筑波大学で心理学専攻。東京基督教短期大学にて神学を学ぶ。1990 年から 1997 年までアメリカ、ゴードン・コンウェル神学大学院(M.A.)、トリニティー国際大学(Ph.D.)でキリスト教教育を学ぶ。現在、神奈川県川崎市にある日本同盟キリスト教団登戸教会牧師。

日本人クリスチャンの信仰 —どうしたら信仰は成長するか—
2002 年　7 月　15 日　発行

著者　　松原洋満
発行者
発行所

©Matsubara Hiromitsu 2002　　Printed in Japan